
流星のロックマン4 ただ勘違いで...

吉武 和

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流星のロックマン4 ただ勘違いで…

【Nコード】

N2647S

【作者名】

吉武 和

【あらすじ】

中学生ライフを楽しもうとしたスバルに新たな悲劇がおこる。

迫りくる敵、人類を滅ばさんとする組織が、動き出す。

スバルは、最後まで戦えぬけるのか！？

理不尽だ――――（前書き）

頑張りました。

他のとかぶらないように頑張ります。

理不尽だ――――

4月7日『星河家』

太陽が昇って、それなりに経つ。

一人のつんつん頭の少年が、ベッドの上で青パジャマで寝ていた。

（ん…今何時だ……って、8時だと…スバルを起こさねーと）

そう誰かが思い。

少年もといスバルを起こすため青色のハンターV Gから、青い強暴
そうなウィザードが、出てくる。

彼の名はウォーロック。

地球を三度救った一人である。

「起きろ――――ス――――バ――――
ール！」

ウォーロックは、スバルの耳に向かって叫んだ。

「う、わぁー!?!」

耳元に叫ばれたからだろうか、ものすごい勢いで壁に打ち付けられ
たスバル。

「う、イテテテ。ウォーロック、もつと優しく起こせないの?」

「ふん、知るか…てか、今の時間見てみるよ。」

頬を抑えながらスバルは、自身のハンターV.Gを見る
A.M.8時10分。

「……ふふふふふふ、ふははははっはっは。」

「お、おい。スバル、だいじょうぶか?」

ウォーロックは直感的に思った。

スバルがあまりの恐怖にバグを起こしたと…

それに関しては昨日に至る。

4月6日 スバル視点

僕は今、ゴンタ、キザマロ、委員長と一緒に、スピーカモールに中学校で必要な物を揃えに来た。

僕は、既に揃えているのだが、委員長が

「もう、揃えたですって!?!。……ま、まあ、いいわ。あなたがどーしてもつと言うなら私の荷物運びをやらしてあげるわ。」

「遠慮します。」

僕は、即答で返す。

そりゃそうたる。

誰が、荷物運びに行くんだよ。

が、しかし。ディスプレイ先の委員長は顔を真っ赤にして

「どーしてよ！」

とじだんだ踏んでいる。

… どんだけ自信があつたんだ？

「もう、分かった星河君！。絶対来なさい、生徒会長として命令するわ！」

と、無理やり電話を切った。

長い沈黙の中、僕は自室で

「理不尽だ——————」

と現在に至る。

もちろん僕は、ご機嫌斜めではなく、真っ逆さまで相棒のウォー口ツクでさえ声をかけられない状態であった。

「ちょっと、スバル君。なんでそんなにテンション低いのよ。ほら、私の荷物持ちなさいよ。」

僕は、3人の後ろをとぼとぼ歩いていると、急に委員長がぼくに、荷物を突き出す。

僕の脳裏に一つの妙案が浮かぶ。

僕は、すぐさまそれを実行することにした。

僕は、委員長の顔をまじまじと、見つめはあーとため息をついた。

「な、何よ。」

「君はいいよね。なんでも思い通りに、人を動かせると思えて」

「そ、そんなこと思っ
てないわよ。」

「嘘だ。じゃ、なんで今朝ぼくが、行かないと、言った時「どーしてよ。」と言ったの？これは明らかに自分の思い通りにならなかったから言った言葉だよな。」

そこまで、言った時委員長は、泣き出していた。

（あっちゃー。言い過ぎたかな。）

「星河君のバカ！」

そう言い残し委員長は奥の方へと走り去った。

「ちょ、委員長待ってくれよ。」

「待ってください。委員長。」

ゴンタとキザマロも委員長を追いかけて行った。

残された僕は、この後のことを考えると背筋に寒気がした。

「スバル…ドンマイ。俺はいつでもお前の相棒だ。」

「ありがとう。ウォーロック。」

僕は、そのままトボトボと家に帰って行った。

その日の夜、覚えておきなさいと言うメールが来たのは言うまでもない。

理不尽だーーーーー（後書き）

初めまして、吉武 和です。

感想などまっています。

他にも手品のタネ、先生ゲームなどをやっています。
ぜひ、見てください。

大変な1日（前書き）

ネーミングセンスねーな。俺…
ま、いっか。

大変な1日

「ロック、頼みがあるんだけど。」

「あ、なんだ。」

「今すぐ、電波変換お願いします。」

「嫌だ。」

「即答かよ!?!。」

即答に即答で返すが、こんなことしている場合じゃない。
説得を続けないと…悪魔に殺される。

「頼むよ。僕らは親友じゃないか!?!。昨日だって君は、僕に相棒
と言ってくれたじゃないか!?!。」

「昨日は昨日、今日は今日だ。」

そう一蹴される。

何て奴だ。

三度も地球を救った仲なのに…
もう絆の力には頼らない。

「頼むよ、ロック。僕はまだ死にたくないんだよ!それに委員長は
君のことが苦手なはずだろ!。ビビる必要はないだろ!?!。」

とか、思いつつも結局ロックに頼る僕…

結局、僕は絆が必要なんだな…

しかし、ロックの返答は僕の予想をはるかに上回った。

「モードに殺されるから嫌だ。」

…頼むから昔のロックに戻ってください。

そう思ったのと、同時に僕の中で何かが崩れた。

「ち、ちくしょーーーーー」

僕の断末魔が、コダマタウンに木霊した。

「ちょっとスバル、五月蠅いわよ。起きてるんなら早く降りなさい。今日は、始業式でしょ！」

「はい。」

下から母さんが言う。

最近の母さんは機嫌が悪い。

後、あまり食事を採らなくなった。

ダイエットでもしているのかな？（最近お腹出てきたようだし…）

そう思考を巡らせている内に、学ランへと、着替え下へと降りる。

もう既に、朝食は用意しており、テーブルの上には食パン、ジャム、コーヒーとシンプルな献立だ。

「母さん、父さんは？」

「ダイゴさんなら、もう行ったわよ。」

だそうだ。

その後、特に会話もなく沈黙が続いた。

「なあ、スバル。」

「うん？どうしたんだい、裏切り者。」

「気まずい。」

僕は、裏切り者を強調して言うが、ロックは特に苦にもせず当たり前のことと言う。

（僕もだよ、ロック。）

そう心の中で、相づちをを打つ。

「ごちそうさま。」

「おあいそうさま。」

母さんが、僕の食器を回収して、立ち上がろうとしたとき足から崩れ落ちるように倒れた。

ガッシャン

皿の割れる音がケタましく鳴った

「母さん!？」

僕は、駆け寄ろうとしたとき母さんは、それを左手で制した。

「だ、大丈夫よ。」

素晴らしい皿を片づけ始める。

幸いけがはないようだ。

僕が、心配してみてると

「ほら、早くいきなさい。」

そう無理して笑う母さんを、僕はみてられなかった。

「行つてきます。」

僕は、委員長に見つからないように少し遠回りをして行った。

遠くから、金切り声が聞こえたのはきつと気のせいだろ。

大変な1日（後書き）

なんか暗いな。

ま、なんとかなるだろ

新学期早々（前書き）

だいぶ遅れました更新…

次はもっと早くシヨ

新学期早々

『コダマ中学校』

コダマ小学校の裏の方に建ててある中学校は、小学校とエスカレーター式で通える。

僕は、今中庭の人ごみに紛れてあるものを見ている。
クラス発表の掲示板だ。

1 - A

白金 ルナ

:

星河 スバル

:

:

「な……。」

僕は、そこで絶句した。

見事に、同じクラスだ。

僕の視界が真っ暗になった…

目を開けると、見覚えのない天井が広がっていた。

「ここは？」

「やっとなってきたか。」

僕が、呟いた僕のそばにはロックが立っていた。

「お前がいきなり倒れたから、俺が運んでやったんだよ。」

「ロック…」

「おっと、礼はいらねーぜ。相棒を助けるのが相棒の役目だろ。」

そう笑って見せるロック。

僕は、なぜか泣けてきた。

「ごめん、ロック。僕、君のことを誤解していたよ。」

「気にすんな。俺を朝は悪かったぜ。ほら、仲直りの印だ。」
手を差し伸べるロックの手をガツチリとつかみ立ち上がる僕。

キンコーンカーンコーン×2

「ヤバ、チャイムなった。」

「もうサボればいいんじゃないか」（あ、なんか知っている周波数を感じやがる…だれだっけか）

「そういう訳にはいかないよ。」

僕は、机にあった。鞆をひたたくって、保健室を去って行った。

僕は、あれから5分たつてもいまだに走っていた。
なぜなら…

「スバル、どんくさいぞ。間違つて6 - Aまで行くなんてよー。おかげで俺まで笑われたじゃねーか。」

僕は、ハンターから聞こえる声を無視して教室の前までくる。

教室から声が聞こえる。

どうやら自己紹介が行われているようだ。

「新学期早々、遅刻した挙句、みんなに笑われた挙句……。」

「ああ、もう、うるさいな。ロック。後で、ウイルスバスターにでも行ってあげるから黙ってよ！」

「おお、まじか！？おっし、今から俺は、ずっと黙つとくぜ。」

……僕の相棒は、単細胞バカだ。

（よっし、入ろう。）

僕は、意を決して扉に手をかけ開けようとした時…

「スバル君!？」

その懐かしい声のほうを見ると、赤紫色の髪の長い顔立ちのきれいな女の子が立っていた。

ひどく驚いた顔で。

新学期早々（後書き）

ノーコメントでお願いします。

中学校で…（前書き）

部活しんどー

中学校で…

僕は、今、困惑している。

見知らぬ女の子に声をかけられたからだ。

（お、落ち着け。冷静に状況判断するんだ…僕）

とりあえず彼女の、様子を観察する。

コダマ中のセーラー服を着ているから、ここの中学校の子だろ。

胸にあるコダマ中ワッペンは、青だから一年生か…

「エーと、大丈夫スバル君？ 顔色悪いよ」

「え、あ、うん大丈夫だよ」

「声裏返っているよ、スバル君」

「え、あ、そう」

「それにしてもよかった。スバル君元気そうで…一年ぶりかなこうやって話すのも」

「うん、そうだね」（やばい、どうやら彼女は僕にあったことあるらしい。誰だ？）

そうやって思考をめぐらしているうちに、ぼくは、勇気を持っていたことにした。

「失礼だけど、君はだれですか？」

彼女は、一瞬驚きの顔をしめすが、そっか、と呟き笑顔で言った。

「響ミソラだよ。スバル君」

「ヒビキ…ミソラ」

僕の間抜けな声が聞こえてくるが、そんなのは後だ。

僕は、力の限り声を出して叫んだ。

「み、ミソラちゃん!？」

「うん、そうだよ。久しぶりだね、スバル君」

彼女は、にっこりと笑ってみせた。

…不覚にも、少しドツキ、としてしまった。

「おい、この女がいるってことはまさかあいつも」

「あら、もちろんよ。ウォーロック」

そういうと同時に、琴座のFM星人 ハープが出てくる。

ウォーロックは、すごく嫌そうな顔をしている。

「くそ、なんでお前までインだ?ちくしょう」

「アーラ、当然よ。だって私はミソラのウィザードなんだから」

「けっ」

そう、ウォーロック達がやり取りしていると…

「おい、うるさいぞ。誰だ…って星河と響か。オラ、来いお前ら、初日から遅刻しやがって、二人とも入って、自己紹介しろ」

いかにも体育系ですよ、と言わんばかりの体系の体つきだ。正直少し分けてほしい。

「「はい」」

僕らは、そう返事して教室に入った。

「えー、星河スバルです。小学校一緒だった人もそうじゃない人もよろしく」

誰も、聞いてない。

そりゃそうだ。

僕の隣には、アイドルが帰ってきたから。

「響ミソラです、趣味は、歌うことと曲を作ることです」

につこりと笑う彼女に、またもやドツキとしてしまった

うおおおおお、ミソラちゃんが帰ってきた！

確か、一年間外国へ、ツアーライブに行ってたんだろ！？

お帰りなさいミソラちゃん。

今度ライブ見に行くよ。

などなど、老若男女の人気は衰えておらず僕の自己紹介はそっちのけ

泣きそうだ…一応僕は、地球を3度救っているんだけど

「はいはい、静かにしろ…………じゃ、先生の自己紹介もするぞ」

がやがやしていた教室が静かになり、先生も自己紹介をする。

「天真 了だ。体育の授業を教えており、生活指導もしている。お前らに会えるのは、HRと体躯の授業だけだ。

他に質問は？」

はいはい、と共にゴンタが手を挙げる。

「購買のほうは使っていないのか？ 先生？」

「ああ、使っていないぞ。後、牛島。中学では年上には敬語で話せよ」「うう、すみません。」

少ししぼんでいうゴンタ。

ははは、と僕は、苦笑いを浮かべる。
ドンマイ、ゴンタ。

「先生、私たちの席はどこですか」
完全に忘れてた。

僕らはあれからずっと立ったままだった。
どうやら先生も忘れていたようだ。
すまん、と詫びを入れた。

「お前たちは、窓際の最後列だ」

そう言われ歩こうとした時――

「げっ」

思わず声に出してしまった。

ミソラちゃんの前の席――つまり、僕の斜めまえに、委員長が鬼の形相でにらんでいた。

僕は、神様を信じるような奴じゃないけど、本当に恨むよ、神様。

そして今日から、次の席替えの時まできつと僕は、小動物のように

びくびくするだろう。

「ミソラちゃん、なんだかうれしそうだね」

「うん、だってスバル君の隣の席なんだもん。ああ、席替えしたくないな」

「あははは、ありがと」(うう、僕は、早くしたいよ)

それから、入学式が始まって、僕らは体育館に行き、指定された椅子に座る。

すると悲劇は起きた。

「星河、お前のかあさんが倒れたぞ!」
そう確かに天馬先生は言った。

中学校で…（後書き）

さー、ミソラも出てきました。

アカネも倒れたしどうなるやら

家族（前書き）

定期テストで更新できませんでした。
すみません

家族

「え…先生…今なんて？」

スバルは、自分の耳を疑った。

お前の母親が倒れた、と先生が確かにそういつたのだ。

スバルは軽く放心状態になり、近くに座っていたミソラとルナはスバルのこと心配そうに見ていた。

「星河、お前の母親が倒れた。急いで先生の車でコダマ病院に行くぞ」

「……………」

何も答えないスバルの手を先生は引っ張り連れて行く。

「私も後で行くね。スバル君」

「……………」

ミソラは小言でそうささやいた。

しかしスバルは何も答えずにそのまま引っ張られて行つた。

スバル視点

僕は、車の中にいる。

だけど、今はそんなことどうでもいい。

今は、一つのことしか考えれない。

母さん母さん母さん母さん母さん母さん母さん母さん母さん母さん

母さん母さん母さん母さん母さん母さん母さん母さん母さん母さん

母さん母さん母さん母さん母さん母さん母さん母さん母さん母さん

今、僕はこのことしか考えれなかった。

今、よくよく考えてみると母さんの様子がおかしかったのは分かっていたはずなんだ

でも、僕はそれを軽く見ていた。

くそ、なにが地球の英雄だ。

母親一人も守れないくせになにが地球の英雄だ。

くそ、くそ、くそくそ。

「おい、そんなに自分を責めるなよ。俺だって気づけなかったんだ、俺にも責任がある。すまない、スバル」

そう僕が、自分を責めているとロックがいつもの乱暴でガサツな口

調ではなく母性感あふれるまでではなくても優しい口調で僕を慰めた。

僕は、まじまじ、とロックを見た。

それも顔に穴が開くくらいに

「な、なんだ、スバル。まじまじと見て、俺の顔になんかついてるのか？」

僕は首をかしげて、ロックの質問に答える。

「いや、なんていうか…気持ち悪いな、と」
「なっ……………！」

ロックは、心外だといわんばかりの顔をする。

「いや、なんか変わったね。ロック、いい意味で」

「…お前もな…スバル」

僕ら、誰ともなしに笑いあった。

心の底から、最高の笑顔で。

その時は気付かなかったけど、僕は、母さんに対する不安が消えていた。

やっぱり僕らは、最高の相棒だ。

それからしばらくして病院についた。

僕とロックは、走りながら病院に向かった。

先生はここで待ってる、と言い、駐車場で待機している。

「僕、ここ苦手なんだよ」

「ん？なんでだ」

「小さいころした注射が痛かったからトラウマになっちゃったから、
今でもだめなんだよね」

「注射ってなんだ？」

頭にバカみたいに？マークを出しているロックに僕は優しく言った。

「NFBより恐ろしいものだよ」

「ま、まじか。注射、恐るべしだな」

「へー、スバル君、注射ダメなんだ」

「そうなんだよ……ってあれ！？」

後ろを振り向くと、なぜかミソラちゃんがいた。

「な、なんでミソラちゃんか！？」

「あ、やっぱりスバル君聞いてなかった。私も後で行くっていたの
に」

「ご、ごめん。あの時いっぱいいいいで……」

ふふふふ、とミソラちゃんはおかしそうに笑った。

「？」

思わず？マークをだす僕。

なんで笑われたんだ？

「いや、ごめんね。やっぱりスバル君は優しいなーって……それにし

てもよかった。スバル君思ったより元気そうで」

ミソラちゃんの顔が笑顔に変わる（可愛いな）

「ありがとう、ミソラちゃん」

思わず僕も笑顔で返した。

そんなこんなしているうちに受け付けへと着く。

「すみません、星河あかねの病室を教えてください」

「ちよつと待ってください………302号室です」

「ありがとうございます……ミソラちゃん302号室へ行こう」
「うん」

僕らは、302号室へと走って向かった。

『302号室』

「母さん！」

僕は勢いよくドアを開けた。

そこには母さんが普通にベットに座っていた。

「あら、スバルにミソラちゃん」

「こんにちは、おばさん」

「いやいや、何、普通に会話してるの二人とも？…そんなことより大丈夫なの？」

「ええ、だいじょうぶよ。それよりもこの子女の子だって」

母さんは、自分のおなかをやさしくなでた。

その行動と発言に、一瞬、思考をストップする僕とミソラちゃん。

が、しかしすぐに二人同時に言った。

「赤ちゃんができた（んですか）！？」
本日2つ目の爆弾発言だった。

家族（後書き）

ということでスバルに妹をつつくてみました。
次はダイゴを出します。

バトルは…？話くらいかな？

僕に妹…実感ないね（前書き）

短い

実に短い

僕に妹…実感ないね

「どうしたんだ、スバル？そんな間抜け面して…さっきまでの張りつめた表情が消えているぜ」

どうやら僕は、ロックに言われるくらい間抜けな顔をしていたらしいあのロックに…

「あのロックに…ってどういう意味だ、こら！」

人の心を勝手に読んでいるロックを無視して僕は、さっきの質問を返す。

「多分、安心したんだと思うよ？てか、僕そんなに張りつめた表情してた？」

「…「してた(ぜ)」…」

一堂そろって言う(いつの間にかハープまで出てきた)

「あら、私は最初からいたわよ」

どうしてこの宇宙人達は人の心を勝手に読むんだ？

ダダダダッ↑(何かの足音)

「それにしても…僕に妹か…なんか実感無いな」

ダダダダッ(以下同文)

「そうね、また家族が増えるわね」

「そうですね」

ミソラちゃんと母さんの会話に僕は違和感を感じた。

何かは分からないけど、とりあえず違和感を感じた。
ダン！

僕が物思いにふけていると、後ろの戸が開いた。

反射的に振り向くとそこには、肩で息をしている星河ダイゴ…つまり僕の父さんが立っていた。

急いできたのか黒のスーツのはずが上着だけグレーになっている。

思わず笑ってしまった。

「アカネが倒れてきていたからM A？ Aから急いできたんだが…なんでみんな笑っているんだ？」

「だって、ははは、父さんのスーツ、あははは」

「スーツ…うお！」

やっと自分の状態に気付いたらしく、驚いている。

「…で、アカネは大丈夫だったか」

カッコがつかないのか、スーツを脱ぎながら聞く。

「女の子ですって」

「女…の子？」

「そうそう、赤ちゃんができたんだって…ん？」

「どうしたの、スバル？」

「そういえばあと何か月で生まれるの？」

「5か月後よ」

そう言って母さんは自分のおなかを撫でた。

父さんも母さんのおなかに耳を当てている。

その光景は、とてもほほえましかったしかし、この後に爆弾は投下されるのだった。

そう、爆弾発言という爆弾が。

僕に妹…実感ないね（後書き）

まったく、ハープしゃべらないなー
がんばろ

あと、誰か俺にルビの打ち方教えてください。

羞恥心？（前書き）

すみません遅くなりました

次はもっと早くします

羞恥心？

「あ、そういえば」

急に芝居のかかった口調で父さんは言う。

「母さんがこんな状態だから父さんは、しばらく帰れないからスバルとミソラが2人つきりになるな」

「そうね、スバル。ミソラちゃんが可愛いからって夜這い仕掛けちゃだめよ」

「はい。ちょっと待って、待って。おかしいでしょう」

「ん、何が？」

「ん、何が？じゃないよ！？ミソラちゃんが何で家に？後、ミソラちゃんが、か、可愛いのは知っているけど、ただの友達だから！」

「照れるなよスバル」

「あと、籍は入れてないわよ。兄妹じゃ二人とも結婚できないからな」

「そんな結婚だなんて…おじさん」

ミソラちゃんは照れたように言う。

「あと、おじさんじゃなくて、お父さんとお母さんでいいからな」

「はい、お義父さん」

「ミソラちゃん？すこしはツッコもうね？あと、字がおかしいよ？」

僕らがそう騒いでいると、隣でもウィザードたちも騒ぎ出した。

「げっ、お前も来るのかよ！？勘弁してくれ」

「うふふふ、よろしくね。ウォーロック」

ロックは、いやそんな顔を浮かべているが、まんざら悪い気はない

らしく、ハープはどことなくうれしそうだ。

ハープはもしかして…

そうやってバカ騒ぎしているときも時間は過ぎていき帰ることにした。

「じゃ、お大事に」「お大事に」

「また、来なさいスバル、ミソラちゃん、ウォーロック君、ハープちゃん」

僕らは病室を出た。

病院を出るとき、ミソラちゃんが思い出したように言う。

「あ、私こっそり抜けてきたんだった。じゃ、私先に帰るね」

「うん、また、あとでね」

僕らは手を振って別れ、ミソラちゃんは電波変換して帰った。

そして、僕は先生のもとへと向かった。

「先生―」

「おう、星河、どうだった？」

「あ、はい、それが…」

僕は、病室であつたことを話した。

先生はそっか、とだけ言い僕の家まで送ってくれた。

「そんじゃーな、明日は学校休んでもいいぞ。響にもそう伝えてくれ」

「はい、わかりました」

先生は車を出して去って行った。

僕はそれを見送って家に帰った。

通常視点

「あ、スバル君」

スバルが、帰ったらミソラはリビングの椅子でそわそわしていた。

それもそんなじゃそこらのそわそわじゃない。

どこの空き巣犯ですか？と聞きたくなるくらいそわそわしていた。

「どうしたの？そんなそわそわして？今日からミソラちゃんの家だよ、ここは」

「う、うん、そうだね」（よく考えたら、私、スバル君の家はじめてなんだよね）

「そういえば、先生が明日休んでもいってさラッキーだね」

「そ、そうだね」

ミソラの様子がおかしいときずいたスバルは、ミソラにぐっと近づく。

その距離は目と鼻の先だ。

「ひゃ、す、スバル君？」

突然の急接近でミソラは、顔を赤くする。

「動かないで、ミソラちゃん」

いつもより強い言動で言い、両手でミソラを固定し、徐々に近づき二人の唇が重なった…

何てことはもちろんなく、スバルは、ミソラのでこに自分のでこを当てた。

「へ？へえ？？」

何が何だかわかっていないミソラ。

滅茶苦茶顔が赤い。

「うーん、熱はないんだけどな…ん？どうしたの、ミソラちゃん？」

ミソラの思考は完全に停止した。

そして再起動したとき、行き場のない恥ずかしさがスバルへと向けられた。

顔をさらに真っ赤にしながら…

「スバル君のばか！」

ミソラは、少し涙目になりながら階段を駆け上がり、しまいにはドンと、カツチャという音まで聞こえた。

「????なんで????」

一方スバルは…

全力で？マークを出していた

そんな二人の様子を見ていた宇宙人どもは

「バカだなスバル（笑）」

笑ってました。

羞恥心？（後書き）

はあー、次こそバトルします。

あと、だれかルビの打ち方教えてください

火事が起きた時、あなたはどうします？（前書き）

今日は早く更新できました。

この調子で頑張ります。

火事が起きた時、あなたは どうします？

「とりあえず、謝ろう」

先ほどミソラに、怒られたスバルはなぜ起こられたのか分からず、ずっと考えていた。

考えた末、とにかく謝ろうという結論に至った。

階段を上がり、さっきの音の推測でしまっている部屋を確認する。

自分の部屋が閉まっていたのでスバルはこんこん、とノックをした。

「僕、スバルだけど」

返事はない。

相当怒っていると、スバルはそう判断した。

諦めずもう一度謝る。

「ミソラちゃん、ごめん。ほんととゴメン」

ドア越しで見えるはずもないのにスバルは頭を下げた。

カッチャ

ドアが開き中からミソラが現れる。

目も赤かったが、何より顔はもつと赤かった。

そんなミソラを見てスバルの心は痛んだ。

彼女を泣かせたのは自分なんだ、と自責の念に押しつぶされそうになりながらももう一度ごめん、と謝った。

「うっん、スバル君は何も悪くないよ。悪いのは私だから」

ミソラは首を横に振る。

「とりあえず、入ろうか」

スバルはそう言って、部屋へと入った。

「ごめんね、スバル君」

ミソラは何の前触れもなく誤った。

スバルも

「僕も悪かったから……ん？」

スバルはここで一つの疑問を思い出した。

「そういえばさ、なんで怒っていたの？」

「え、えーとそれは……」

急に口ごもるミソラ

ハープが仕方ないとため息をつき、助け舟を出した。

「スバル君、怒った理由は淡い乙女心よ」

「？」

ハープは、謎の言葉を残してギターに戻った。

しかし、スバルはその言葉の意味が全く分からなかった。

それから二人は楽しく会話した。

それからしばらくしてからだ。

二人は焦げ臭いにおいがするのに気付いた。

ボォーと何かが燃える音がスバルたちの耳にも入ってくる。

スバルとミソラは互いにうなずき合って、急いで表に出た。

表に出ると、二人の予想は当たった。

火事だ。

しかも、燃えているのは隣の家だった。

不幸中の幸いか、隣の家は空き家だったので、特に被害はないがスバルは、消防車を呼んだ。

「スバル、ビジナライザーをかけろ」

「え、あ、うん」

いきなりウォーロックがワイザードオンする。

スバルはそれに従い、電波の見えるメガネ、ビジナライザーをかける。

そこに映っていたのは大量の炎系のウイルスばかりだった。

「デスカウント、アカシーサー、フレイマー…まだ、いっぱいいる…ってあれ？」

ウイルスの中にいたただけ電波人間が混ざっていた。

スバルとミソラは、目をこらしてみると、そこには…

「ぼく（スバル君）！？」

そこには、赤いロックマンが立っていた。

火事が起きた時、あなたはどうします？（後書き）

すみません、すみません。

また、バトリませんでした。

次こそバトリます

ロックマンVSフレイムロックマン(前書き)

やっとなバトルシーン

ロックマンVSフレイムロックマン

スバル視点

「スバルにも見えてるってことは、電波体のようだな」

ロックは吐き出すようにごくごく当たり前のことを言った

「？何を言ってるんだい？ロック、どこからどう見ても――」

「やつの周波数が、まったく感じれね」

途中まで言いかけた時、ロックは、それを自らの言葉で遮った。

僕は思わず、え、そうなの！と驚きの声を上げる。

「ああ、何者が知れねーがあいつがウイルスを操っているようだが、どうする？」

僕は、答える代わりにハンターV.Gを天に掲げてこう言う。

「いくよ、ロック。トランスコード003シューティングスターロックマン！」

「私たちも」

僕は、ロックマンに、ミソラちゃんは、ハープ・ノートへとなり、電波の道…ウェーブロードに立つ。

隣の家は、もう全焼に近く、今から消火しても間に合いそうになか

った。

それにしても、なんで無人の家を…？

「スバル君のお家と間違えたのかもよ？」

「僕は、ツッコまないよ。もうツッコまないからね、ミソラちゃん」

「おい、そのバカップル。早く消火しないと、スバルの家まで燃え広がっちゃうぜ」

「そうよ、そのバカップル達、早くしないと」

「（ポツ）そんなカップルだなんて」

「いや、今はぼけている場合じゃないからね？ミソラちゃん。僕らが、カップルなんてありえないから…僕が、ウイルスで、ミソラちゃんに消火作業をお願い」

「うん…」

なぜか、ミソラちゃんはしゅんとした顔をし、火事のほうへと行った。

ミソラちゃんを見送った後、僕も戦闘態勢へと入る。

「…よし、火には水だ。バトルカード ワイドウェーブ1」

横に広い水の衝撃波が、ウイルスたちを襲い何体かをデリートする。

しかし、今のでこちらに気付いたようで、一斉に襲ってきた。

「スバル、エースプログラム、いつでも起動できるぜ」

「OK、ノイズチェンジ…キャンサー！」

僕は、周りのノイズを吸収し、キャンサーノイズへと変化する。

「NFB！ダイナミックウェーブ」

僕は、ジャンプし、回転しながら三つの津波を発生させる。

すべてのウイルスは、波にのまれデリートされた。

…ただ一体を除いて…

「ウォー、スゲエー、本物つえー」

5メートル先から、僕と全く同じ声なのにとっても暑苦しい声が聞こえる。

そこには赤い僕がいた。

「本物ということだ？」

ロックが、ワイザードオンし喧嘩口調で赤い僕に話す。

「うーん、お前がFM星育ちのAM星人のウォーロックか…頭悪そうだな」

「うるせえー！お前のほうが悪そうだ」

ボコッ↑（ロックの頭をどつく音）

「頭悪くて悪かったね、ロック」

「ス、スバルそんなに切れるなよ」

僕は少々、不機嫌になりつつも、脱線した話題を戻す。

「さっきの質問に答えてくれ、本物っていうのはどう言うことだ」

「俺たちは地球の意思で、できている。そう地球の支配者アース様によってな」

「アース？」

「お前の姿にしているのも理由がある。地球上でアース様の次に強いのがお前だからな。お前を元にアース様は俺たちを生み出したんだ」

「…クローン技術か…」

「そういうこと。そして俺の名と任務は、俺の名はフレイムロックマン…任務はお前を殺すこと…家、間違えて殺し損ねたけど、別にいつか、だつて…」

フレイムロックマンは（以降FRと略）につ、と笑い一瞬でこちらに移動し、僕の顔面にラリアットを決めた。

そのまま15Mほど飛ばされた。

「おいおい、大丈夫か？ほ・ん・も・の」

「グウ…」

今ので、ノイズチェンジが解けてしまった。

僕は、口元についている血を拭い取る。

「こいつ殴る瞬間に、炎でブーストさせてやがる。赤になるとスピードとパワーが三倍ってほんとだな、おい」

「なら、動きを止めてやる…ノイズチェンジ…ジェミニー！」

「マヒ、させようてか…でも！」

一瞬で、僕の前に移動し、アップアをする。

しかし、それは罠だ。

なぜなら…

「バトルカードヘンゲノジュツ！」

「んな！？」

後ろを取った僕はそのままFRの背中を切る。

「か、体が」

「ジェミニは、ソード系統のカードにマヒプラスを付ける力があるんだ。これで僕の勝ちだ！」

僕は、完全に勝利を確信した。

ロックマンVSフレイムロックマン(後書き)

誤字などがあれば指摘お願いします。

なんでスバルが二人いるんだ？（前書き）

テストで更新が遅くなりました。

すみません。

なんでスバルが二人いるんだ？

「トドメだ！ N F B サンダーボルトブレード！！」

スバルはどこからか、雷をイメージする3mほどの大剣をどこからか取出し1回、2回と横に切り、トドメに雷と一緒に大剣を振り下ろした。

あまりの威力に煙が発生した。

「よっしゃ！どうだ」

ウォーロックは勝利の雄たけびと言わんばかりに声を上げる。

「……………まだだ」

スバルは静かに言った。

「あ？なんでだ」

スバルは、答える代わりに待っている大剣を見せる。

いや、それはもはや大剣と呼べるような姿ではなかった。

持ち手以外、全てどろどろに溶けていた。

流石のウォーロックもこれを見て血の気が、サーと引いた。

「フレイムオーラ…摂氏3000 の高温でどんなものでも溶かす

チートな鎧だ」

「グウ」

煙の向こうから出てきたのは、炎の鎧状のようなものをまとったFRだった。

FRは、あれで大剣を溶かしたのだ。

「ま、お前の実力なんてこんなもんだろ。さっさと俺に消し炭にされてあの世で人間が死んでいくのを見ときな」

炎の鎧を引っ込めて、手を天にかざす。

すると見る見るうちに火の玉ができていき5mほどの火球ができあがる。

そうこれはまるで…

「アポロフレイムのサン・フレアじゃないか」

「ああ、お前の戦ったやつの技も使えるんだ」

そう言い、5mほどの火球をバスケットボールのようにくるくる回しながらやがて回すのを止め、何も言わず大きく振りかぶって投げた。

笑顔で

とてつもなく嫌な笑顔で…

FRは投げたのだ。

巨大な火球を

スバルは、それを避けようとするが間に合わず巨大な火球に飲まれていった。

「グウ、あ、う」

「お、まだ生きてたのか本物のロックマン」

スバルは、声にならない声で地面に這いつくばっていた。

先程スバルのいたウェーブロードは、跡形もなくなっていた。

スバルは、そのまま下にあったウェーブロードへと叩きつけられていた。

「苦しいだろ？そろそろ楽にしてやんよ」

もう一度FRは、サン・フレアの体制をとる。

（…ここまでののか…）

「死ねーーーーーーーロックマン！」

スバルは、ただ静かに死を覚悟した。

そして、FRはサン・フレアを投げようとすると…

「ペイントフレイム！」

無数の紫色の炎がFRを襲った。

FRは、チィとだけ言い見事なフットワークで紫炎を避けていく。

スバルは、この技をひどく懐かしく思った。

スバルは、紫炎が飛んできた上のウェーブロードを見る。

この技は…

「おいおい、電話かけてもでねーから心配して見に来てみやどうしたんだこの状況？スバルが二人いるじゃねーか」

「それは、僕が知りたいくらいだよ。ジャック」

そこには、2年前祖国の復興のために姉のクインティアさんと一緒に帰ったジャックの電波変換した姿、ジャック・コーヴアスが見下ろすように立っていた。

なんでスバルが二人いるんだ？（後書き）

感想ください、お願いします。

炎VS炎（前書き）

ウィザード達、しゃべらないな

どうかしないと

炎VS炎

スバル視点

「ふん、援軍か…ま、数が増えたところで俺は負けねーがな」

FRは余裕の表情を浮かべ楽しそうに笑い、炎の鎧を出した。

「そいつぁ、どうかな。俺には、秘策があるんだぜ」

ジャックも負けじと余裕の表情を浮かべる。

この二人似た者同士かもしれない。

「お前が言うか？スバル」

「それよりなんで、ジャックが電波変換してるんだ？」

「あ、無視すんなよ！スバル」

僕は、どこぞやのAM星人のぼけを無視して、ジャックへ質問を投げかける。

「ああ、外国で、再構築したんだ」

「で、こたあ…」

「そーだぜ、ウォーロックちゃん」

声と同時に、カラスをイメージさせるウィザード、コーヴァースが

現れる。

ウォーロックは、嫌そうな顔をして、地面にチツ、と舌打ちをした。

「生き返ったのかよ、お前」

「あつたりめーよ。なんたつて俺は、コーヴァース様だぜ、ウォー
ロックちゃん？」

「くううう、やめる。そろいもそろつて、ちゃん付けにすんのは！」

僕の頭にちらり、と優しい老婆の顔を浮かべる。

もう、コントはいいか？

ふ、とそう声が聞こえる僕の頬に激痛が走ってきた。

飛ばされながら、僕のいた方向を見るとFRがジャックを殴り飛ば
してきた。

僕の方に…

僕が、その後どうなったかは、言うまでもあるまい。

「いててて、おい、スバル大丈夫か？」

「全然、てか、早くどいてくれ」

「おっと、わりい」

ジャックは、僕の要望通りにさっさとどいてくれた。

「おい、もう決めてもいいよな？」

FRは、サン・フレアの体制をとる。

「冗談じゃない。バトルカード シャークカッター」
「だよな。ヘルズナックル」

三体のサメが横一列に突っ込んでいき、紫炎の拳がFRに向かって飛ぶが全て、フレイムオーラにかき消された。

「万策尽きたようだな」

FRは、炎の鎧を引っ込めて、手に炎を集めていく。

（！また、炎の鎧を引っ込めた！？もしかして）

「とどめだ！」

火球が、僕らに迫りくる。

僕は、大声を上げた。

「ジャック！サン・フレアを使った後のあいつは炎の鎧が使えない！狙うなら今だ。ノイズチェンジ コーヴァース」

「わかったぜ。見せてやるぜ、俺の新技！ダークフェニックス！」
「NFB！アトミック・フレア！」

ジャックは、紫炎で作った不死鳥をものすごいスピードで放ち、火球にぶつける。

僕は、それをアトミックフレアで更に加速させる。

「「いっけええええええ」」

が、しかし、サン・フレアは止まらずもう少しのところでスバル達に当たりそうだった。

FRは、鼻先でハン、と笑い言った。

「所詮、お前ら人間の限界なんてそんなもんだ。お前ら人は、人間は、決して俺たちには勝てないんだよ!!」

「それは、違う!!」

僕は、力を更に込める。

ほんの少し火球を押した。

「確かに、一人の力じゃ限界がある」

僕は、更に力を込める。

「でも…」

更に力を込める。

「絆の力が、あれば限界なんて存在しないだああああ!!」

僕のすべての力を使い切り、不死鳥は火球を貫きFRへと迫った。

「ふん、こんなもの俺のブーストで…」

「マシンガンストリング」

FRが、ブーストで避けようとすると、FRの後ろから鉄の弦が飛びFRを絡めた。

「な、なんだこれは！？う、うわあああああ」

ドオオオン！、と激しい音を立てて不死鳥はFRに直撃した。

炎VS炎（後書き）

余談ですが、作者はスバミソ派です（多分）

どんなことでもいいんで感想待ってます。

間に合え！（前書き）

更新遅くなりました。

これから、3日に一度更新したいと思います。

間に合え！

「スバル君！大丈夫？…ってジャック君！？なんでここに！？」

向こうからミソラちゃんが、走ってくる。

さっきの弦は多分、ミソラちゃんのだろう。

「ありがとう、助か——」

その時、僕はあまりの光景に目を疑った。

ミソラちゃんが、過ぎ通った時だった。

爆発でできた煙が、晴れた時にFRは…

立っていた。

しっかりと、地面に立ち、サン・フレアの体制でさっきより一回り小さい火球ができていた。

どうやら、瀕死の状態のようだが、さすがに勝ち目は無いはずだ。

しかし、FRの目は、いかれたように血走っており、ほとんど奇声に近い声で言った。

「ヒイヒイキイミイソオラアアア、シイイネエエ
エ」

勢いよく、火球を投げ切るFR

「！ノイズチェンジ…キグナス！」

僕は、スピードNO、1のキグナスになり、スピードマックスでミソラちゃんの方へ低空飛行する。

間に合え！

「ダークフェニックス！」

僕の頭の上を、紫炎の不死鳥が掠め飛ぶ。

不死鳥と火球がぶつかり合うが、少し小さくてもサン・フレア、2、3秒ぶつかり合った所で不死鳥は、あっ消された。

でも、それで十分だった。

火球が、ミソラちゃんに当たる瞬間に、ミソラちゃんを抱き上げ、他のウェーブロードに移った。

火球の当たったウェーブロードは、跡形もなく消えていた。

「まだだ、まだ、終わってはいない」

FRは、まだ、諦めずサン・フレアの体制をとる。

「させるか！ダークフェニックス！」

紫炎の不死鳥が、FRに当たった。

FRは、苦しそにくっつき、とだけ言い電波の塵と化した。

正直、同じ顔の僕が、やられるのを見ていい気はしなかった。

「ス、スバル君」

そんなことを考えていると、腕の中から声が聞こえる。

視線を落とすと、僕にお姫様抱っこされているミソラちゃんがいた

（軽いな）

僕は、優しく、なあに？と聞いた。

「えっと、その、お、降ろしてほしいな」

僕は、いたずらっ子のように微笑み笑いながら言った。

「えー、もうちょっと抱きときたかったな」

「え、それって…」

「なーんて、冗談だよ」

「もー、スバル君」

「ごめん、ごめん」

プー、と頬を膨らませるミソラちゃんはとてもかわいかった。

僕は、彼女をゆっくり降ろした。

「お前ら、俺のこと忘れてんだろ」

ふっと隣からジャックの声が聞こえた。

「「うん、忘れてた」」

「くそ、このリア充どもが」

「ん、何か言った？」

「いや、なんにも…それよりもさっきの奴なんなんだ」

「それが、僕——」

「そいつは、俺たちから言っぜ」

僕が、口を開こうとした時、別の声がした。

間に合え！（後書き）

感想引き続き待ってます。

一発殴っていいですか？（前書き）

PV10000突破。

皆さんのおかげです。

ありがとうございます。

「発殴っていいですか？

「それは、俺たちが言ってやるよ」

今の台詞は、僕のじゃない。

もちろん、ミソラちゃんやハーブでもない。

だからと言ってロックやコーヴァースでもない。

声の主は、姿を見せずどこにいるのかも見えなかった。

「おい、誰だ！お前らは、どこにいるんだ！」

僕ら、警戒しつつもあたりを見渡した。

そして

バツ
シャヤヤ

ド正面からバケツのようなもので水をかけられた。

すると、目の前から二体の電波人間が現れた。

どうやらこの2体は、インビシブルを使っていたようだ。

てことは、ずっと僕たちを見、いや、観察していたのか？

現れた一体は、女の子で青が基準でふりふりのスカートで年は僕より少し下のように感じた。

手には、水色のちょっとおしゃれな感じの小さな瓶を持っていた。

どうやら彼女が、僕らに水をかけたみたいだ。

「きゃははははは」

…おお、笑っているよ。

「…ね、ロック」

「…ん、どうした？」

「殴っていい？」

「いいんじゃない？てか、ちょうど、俺もそう言おうとしていた」

「ちよ、待つて、お前ら」

「は、離せ、ジャック！こいつは一度殴らないと気がすまない」

怒りのあまり殴りかかろうとする僕らをジャックとコーヴァースが羽交い絞めで止める。

気を取り直して、もう一体の方を見る。

もう一人の方は苦笑を浮かべている。

どうやら、こいつは常識人のようだ。

そう思いたい。

黒を基準としており、重装甲といった感じで、手には、ライフルを持っていた。

背は、170程あり顔は凛々しかった。

「おい、ユイ。いきなり水をぶっかけるなんて失礼だろ」
「いや、スバルをいじめるのは僕の仕事だからね」

その言葉を聞いた途端、あらかじめチャージしておいたロックバスターで、彼女を打つ。

しかし、それは彼女には、当たらなかった。

なぜなら、彼女の瓶から少量の水が出てき、弾道を隣に変えた。

隣に変えたということで、もう一体の電波人間に当たる。

しかし、男はそれに反応せず何食わぬ顔で、話を続けた。

「水をかけたことは、詫びるぜ、スバル」

「そうそう、そんなに怒らないのスバル」

無駄になれなれしい口調だったけど嫌な気にはならなかった。

むしろ、それが当たり前のように感じた。

「ま、一度電波変換を解いて下で話そうぜ。互いに聞きたいこともあるだろうし……な」

「じゃーね、スバル」

二人は、一瞬チラッとミソラちゃんを見た。

僕もつられてみると、なぜか少し怒っているように見えた。

なんでだ？

二体の電波人間はウェーブアウトした。

「さて、どうするスバル？お前の正体を知っているってことは…相当やべーぞ」

「うん」

実は、僕の正体はごく一部のしか知らない。

なぜなら、メテオGの際父さんが僕のことをロックマンだとばらしたが、僕〓ロックマンとは、ならずもし、僕だってばれたら、サテラポリスが口止めをしてくれることになっている。

僕は、星を見上げながらこう答えた。

「…話を聞くだけでも聞いてみよう」

そして、僕らは互いに頷き合い、ウェーブアウトした。

なぜか、ミソラちゃんの機嫌はいまだに悪かった。

一発殴っていいですか？（後書き）

やっと、オリキャラ出た。

また、オリキャラ出すので皆さんもできたら名前を考えて送ってください。

待ってますー

オリキャラは、お兄さんキャラでシスコン（？）です。

多分

先生ゲーム更新しました。

暇でしたら読んでみてください。

再会（前書き）

クラブ…鬼しんどい

でも、頑張つて更新します。

てなわけで明日も更新するので見てください。

再会

通常視点

「で、あいつらはどこだ？」

地上に降りたスバル達はスバルの家の前にいた。

降りた時、スバル達は気付いた。

二人は、どこにいるということに

よくよく考えてみればスバル達はどこに待っているという約束（？）的なのを忘れていた。

とりあえず、スバル達は当たりを見渡していると…

「おーい、こっちこっち」

おっとりとした声の方へ振り向くと二つの人影が見えた。

スバル達は互いに頷き合い公園へと向かった。

「スバル、久しぶりだな」「久しぶり、スバル」

公園に入るなり、二人はまるで昔の友達に会ったかのようにあいさつを交わす。

実際のところ、スバルは無言のままで二人をにらんでいた。

もちろんスバルは、一見強面の黒髪のオールバックの少年や夜でもしっかり見える蒼色のツインテイルの少女など知らない。

さっきのこともあり、スバルは警戒心を抱いていて問う。

「君たちは、誰だい？」（今日こついうの多いな）

すると、二人は声をそろえて

「「なっ…んだ…」」

二人は芝居のかかった口調だったが、顔は心外だと言わんばかりの表情を浮かべていた。

しかし、二人はすぐしやうがないなあゝとでも言いたげな表情に変わった。

「ま、7年も経ったんだ。忘れても仕方ないか」

「そつかなく、私たちは覚えているのに…」

男の方は、仕方なさそうに言うが女の方は頬を膨らましていた。

「まあまあ、これを見せれば思い出すだろ」

二人は、首にかけていたペンダントをスバル達に見せた。

「その、ペンダント…スバル君がかけているペンダントだ」

「君たちは…もしかして…」

スバルは、その時思いっきり頭を殴られたように感じた。

そして、思い出した。

この二人のことを…

「やっと、思い出したよ。この二人は女の子の方が青星 ユイと男の方は外亜 ダン…僕の幼馴染だ」

「へえ、そうなんだ。ところでユイちゃんとは、どんな関係なの？」

ミソラは少々、興奮気味で聞いた。

ミソラは、内心不安でしうがなかった。

もし、二人がお互いを想いあっている仲ならきつと、ミソラは絶望してしまっだろう。

ずきずき痛む胸と一緒にスバルの口を一心不乱と見ていた。

そして、徐々に口開いていくスバル。

時間は、ゆっくりと、でも確実に進んでいく。

「僕と、ユイは——」

「あたしとスバルは婚約者だよ」

割り込むようにユイは言う。

満面の笑みでユイはそう言い切る。

ミソラはその言葉に蹴落とされて行った。

絶望という名の谷底に…

再会（後書き）

サー、ユイの発言でミソラが絶望してしまいました。

どうなるスバミソ！？どうするスバミソ！？

引き続きオリキャラの名前を募集しています。

告白？（前書き）

今回はギャグポっくしてみました。

お楽しみください。

告白？

「あたしとスバルは婚約者だよ」

本日何度目の爆弾だろう。

この爆弾のおかげでこの場は（ダンを除いて）騒然となる。

ミソラに至っては、泣きそうな顔をしていた。

そんな中、ダンは「やれやれ、しょうがない。ここはお兄さんに任せなさい」とでもいいいたそうな顔で、鎮静剤を投下した。

「ユイとスバルは婚約者じゃねーぞ」

「ダン…あり——」

「俺と、スバルが婚約者だ」

「ダン、なんてでたらめな事を！表に出ろ！お前の腐った根性叩き直してやる！！」

訂正、核爆弾を投下した。

「スバル君ってそんな趣味だったの！？」

「マジか…スバル…見損なったぜ」

「うすうす分かってたけど、こうはつきり言われると…」

各々思ったことを口にだし、じわじわとスバルの精神を刈り取っていく。

「ダン…お前—」

スバルは、恨みの念を込めて声を発する。

ダンは、特に気にするそぶりを見せず続ける。

「そんな、カッカすんなよ、スバル。後で、そ・い・ね、してやるから」

「いらなから、添い寝！てか、なぜ、無駄に色っぽく言うんだ！気持ち悪いからやめてくれ！あと、ユイうすうすって何？僕にそっちの気はないから」

すると、今まで沈黙を守ってきたウォーロックが口を開いた。

「そんな！スバル。あの日の夜は全部ウソだっというの？」

「ウオオオオオロオオオオツクウウウウ！貴様、裏切ったな！あと、なぜ、おねえ言葉？気持ち悪いからやめてくれ！あと、ミソラちゃんとジャック、頼むから僕を社会のゴミの様に見ないで！！おねがい！」

吠えるスバル

それを満足げな表情で堪能した後、ダンは追い打ちをかける。

「そんな、スバル。俺との夜…も嘘だったのか」

「そんなわけあるかああああ。僕は普通に女の子が好きなんだ！」

ダンは、作戦通りとほくそ笑み本命を言う。

「ほー、じゃ誰が好きなんだ？スバル君よお」

しまった！はめられた、と内心焦りつつも冷静を装いながらスバルは答える。

「いや、いや、いや、いや、ボ、僕にス、好きな人、な、なんかい、いない」

訂正、スバルは焦りのあまりに詰まり放題噛み放題だった。

「……で、どうな（の？）んだ？スバル（君）……」

「いや、待って。なんか問い詰める数多くなってる？ロック、助けて」

「そんな！スバル。あの日の夜は全部ウソだっていうの？」

「もう、みんな大嫌いだあああああ」

そう叫びながら逃げようとするスバルを三人とハーブに囲まれて動けない

「……な、コーヴァーみんなの中に俺らも混ざってるのか？」

「混ざっていると思うぜ」

「だよな」

そう呟き、ジャックはユイとダンを観察し続けた。

詰め寄るダン達に、スバルは為す術が無く、意を決した。

「僕は、ミソラちゃんが好きなの！これでいいだろ！行こうミソラちゃん」

「え！？」

スバルは顔を真っ赤にしながら、ミソラの手を握りそのまま走り去った。

そんなスバルを本当に心の底から楽しそうに見送るユイとダン。

「で、お前らは何者なんだ？」

ジャックは警戒心むきだしで聞く。

二人は、不思議そうに顔を合わせた。

「だから、あたしはスバルの婚や——」

「いや、もういいってそれ」

「手厳しいね…ジャック君」

「普通に呼び捨てでいい…で、何者なんだ」

「そんなに睨むなよ、しわが増えるぜ？…だから睨むなって」

「そうそう、あたしたちはただの幼馴染だって」

「ただの幼馴染が、電波変換するか？」

「あー、もううざいな。そのことだったら明日、MA？Aに来なよ。そこで説明するから」

「ちょ、まて」

「トランスコード14…メタル・ウォーリア」「トランスコード15…アクア・エリアス」

二人は、電波変換して去っていた。

一人取り残されたジャックも諦め、電波変換して帰った。

告白？（後書き）

スバルが告白しました。

どうなることやら…

感想待ってます

引き続きオリキャラの名前募集してます

誤解（前書き）

特にいうことはありません。

誤解

スバル視点

「「はあ、はあ、はあ」」

僕は、ダンの策略にはまり何とか逃げ出し、家に帰宅し僕のベッドに隣同士で座っていた。

そして、僕は、今人生最大のピンチを迎えている。

終わった、終わった、終わった、という言葉が頭の中でぐるぐると木霊する。

チラッとミソラちゃんの方を見る。

ミソラちゃんは、恥ずかしそうに顔を俯かせていたんで表情は見えなかったが、きっと僕みたいなのに告白(?)をされて困っているに違いない。

誤解は解いておかないと

「「あ、あの(ね)！」」

ハモル僕ら…

思わず互いに視線を落としあう。

しばらく流れる沈黙…

僕は、耐え切れず口を開いた。

「さ、さっきのあれはその場を抜けるための口実というかなんて言うかその〜」

これ以上言葉が出そうになかったのでゴメン、と謝った。

「う、うん。分かってる」

分かってる…この言葉が異常な位、胸に突き刺さる。

なんでか知らないけど、胸がずきずきと痛む。

痛い…

「大丈夫、スバル君？すごく悲愴そうな顔してるよ」

「え…、そう？元からこんな顔だよ？それにしてもダンのやつ変わってないなあ〜」

ものすごく悲愴そうな表情をしてたらしく、僕は心配させまいと話題を変える。

「ユイちゃんも？」

「うん、ユイもいたずら好きな所は変わってないな〜」

僕は、遠くを見るようにするが、光が被って眩しかった。

「ユイちゃんってホントにスバル君の婚約者なの？」

「うん、ただの幼馴染だよ」
「ホントに？」

グイ、と顔を近づけるミソラちゃん。

僕らの距離は10cmもなかった。

いい匂いがした。

ドギマギしながら僕は、頷く。

「小さいころユイが、「大きくなったらスバルとダンと結婚する」
って堂々と二股宣言してたよ」

「あゝ、私もそんな事あったなゝ」

ミソラちゃんは遠くを見るようにするが、光が被って俯いた。

「さっきの、僕とおんなじことしてるよ」

「えへへへ」

とても幸せな時間

これのためならすべてを捨ててもいいと思えるくらい幸せな時間だった。

「ミソラちゃん髪伸ばしたんだね」

「うん、似合ってるかな？」

「うん、なんか雰囲気変わってるね、これぞ大和撫子って感じだよ」
「大和撫子は、こんな髪の毛の色じゃないだろうけどね」

少し、皮肉ぽく言うミソラちゃん。

「僕は、前より今の方が好きだよ」

「え、ホントに？」

「うん、僕はショートよりロングの方が好きだからね」

ミソラちゃんはそっか、そっかと呟きほんのりと顔を赤く染めていた。

「…ミソラちゃん？」

「ううん、そんなことよりご飯食べよ」

ミソラちゃんは、そう言い下へ降りて行った。

僕は、首を傾げつつも下へと降りて行った。

その頃、ウィザードたちは…

「青春ね」

「ああ、青春だな」

「「ぶちこわしたい（わね）な」」

ウィザードらしかめ発言をしていた。

誤解（後書き）

てなわけで、こういう風になりました。

感想待ってます。

引き続きオリキャラの名前募集しています。

一日の終わり（前書き）

しばらく合宿で更新できません。

木曜に更新します。

一日の終わり

ミソラ視点

「ごちそう様でした」

満面の笑みで私は言う。

私たちはあらかじめ用意されていたカレーを食べていた。

「ミソラちゃんよく食べるね」

目の前で座っているスバル君は啞然としている。

「ふふふふ」

そして、急に私を見て笑い出した。

「むー、食事中の乙女を笑うとは失礼な」

「ごめんごめん、変わってないなーって思ってたね」

「変わってない？」

変わってないとは、どう言う意味だろ。

私は、それなりにきれいになったと思うし、だいぶ変わったはずだ。

「2年前もすぐく食べてたね。なんか安心したよ、ミソラちゃんはミソラちゃんなんだね」

お風呂行ってくるね、と言いスバル君は部屋を出た。

一人になった私は、暇で仕方なかった。

「ねえ、ハープ」

「……………」

返事はない。

「ハープ？」

「……………」

返事はやはりなく念のためギター型のハンターVGをのぞくが居なかった。

ウォーロック君と、デートでも行ったのかなっと思いつつも私は、スバル君の部屋へと脚を運んだ。

通常視点

スバルは風呂から上がって、自分の部屋に向かうとミソラがいた。

「ミソラちゃんお風呂あがったよ」

「うん、覗いちゃだめだよ」

「の、覗かないよ」

スバルは顔を真っ赤にして否定する。

ミソラは、ふふふ、冗談だよ、と悪戯っぽく笑いながら部屋を後にした。

「さて、宇宙の本でも読むか…」

そう言って本を手に取りうとした時…

見上げる 空は 心に

ハンターV Gから着メロが流れる。

スバルは、メールを見ると差送り人はダンからだった。

「ん、何々…明日WA? Aに1時集合。

追伸 ミソラが可愛いからって襲うなよ」

「襲わないよ!」

思わず、ハンターV Gを投げ捨てるスバル

そのまま、本を手にはずさずカとベットに仰向けに寝転がって本を読み始めた。

しばらくして、ミソラも風呂から上がりスバルと思い出話でもしようとしてスバルの部屋を訪れた。

コンコン

「スバル君、入るよ」

返事も待たずにミソラは部屋へと入る。

「スバル君？」

「……………」

スバルは今だに、本を読んでおりミソラが声をかけても反応は無かった。

仕方がなくミソラは近くまで行く。

「スバル君」

「……………」

返事はない……

「スバル君ってば」

「……………」

返事はない……

「スバル君、私泣いちゃうよ」

以下同文

「もー、スバル君ってば」

ミソラは横から覗き込むと、スバルは目を閉じていた。

それと同時に視界が暗転した。

「きゃっ」

短い悲鳴を上げて、目を開けるとそこは、スバルの胸の中だった。

更によく見ると、スバルがミソラの上にいてミソラを押し倒している形だった。

もう、犯罪である。強姦罪である。

「ス、スバル君、どういう――」

激しくテンパるミソラ。

それに比例するようにスバルの寝息は安らかになっていく。

（ん、寝息？）

瞬間、ミソラは気付いた。

スバルは寝ていると……

脱出しようと試みたが、男のスバルに力で勝てるはずもなく、電波変換しようにもハーブがないので、これもできなかった。

「むうー……、スバル君、寝てるよね？」

そして、ミソラは諦めることにした。

ミソラは、スバルが完全に寝ていることを確かめると口を開いた。

「あのね、スバル君さ、今日は守ってくれてありがとうね。私とっても嬉しかったよ、スバル君にお姫様抱っこしてもらってそれでねお礼にね…」

この後、ミソラは、スバルの頬に…

キスをした。

ミソラの顔は、とても赤く熟れて幸せの絶頂だった。

「好きだよ、スバル君。お休み」

そう言い残しミソラは眠りについた。

「……僕もだよ…ミソラちゃん…だって僕は…」

何かをつぶやき、スバルは更に自分の腕の中のミソラをギュッと抱

きしめた。

一日の終わり（後書き）

感想待ってます。

引き続きオリキャラの名前募集してます。

起きたら…（前書き）

合宿しんどかった。

あと、ユニーク総合で11位

これもみなさんのおかげです

ありがとうございます

起きたら…

スバル視点

「んゝ、ん？ん！？」

僕は、起きてベッドから体を起こそうとするが、体が動かなかった
(ほのかに甘いにおいがする)

あたりを見渡そうとすると、ある物が視界に入った。

なんでだ…

なぜ、彼女はここに居るんだ…

なんで、ミソラちゃんが僕のベッドにいるんだ？

そして、なぜか僕らは抱き合っている。

速攻で僕は、ミソラちゃんの首に巻いてた腕を外す。

「何してんの…僕…」

「う、うゝん」

するとミソラちゃんが起きた。

あ、ここで僕は死ぬんだな…社会的な意味で。

「…おはよう、スバル君」

…普通にあいさつされた。

にしても、寝起きのミソラちゃんはかわいいな。

…って、やめる僕！これじゃただの変態じゃないか！

とりあえず、僕は無言でミソラちゃんの腕をほどきベッドから出る。

ガシッ！

あれ…可笑しいな？

しっかり、ほどいたはずなのに…

もう一度、僕は腕をほどき、ベッドから出ようとする。

ガシッ！

あれ…以下同文

「ミソラさん、あの腕——」

「やだ」

「即答ですか!?!」

更に、絞める力が強くなる。

どうしたんだ!?!ミソラちゃん!?!

疲れてるのか？

こんな元、引きこもりに抱き着いて嫌じゃないのか！

………思ってた自分が悲しくなってきた。

「腕――」

「い・や」

「お願いだか――」

「い・や」

「ロオオオオクううううう、電波変換！！」

「ハープ！」

「任せてミソラ」

僕が、電波変換するため、ロックを呼ぼうとしたら、ハープが僕のハンターV.Gに入っていた。

ハンターから

「な、なんだハープ、なんでジャイアントアックスなんか持ってたって、ちょ、み、ミソラのためって、わ、訳がわ…ぎややや」

ロックの、断末魔が聞こえたと思うとハープとぼろ雑巾と化した口ツクが出てきた。

ハープは、そのままぼろ雑巾を背負いどこかへ立ち去った。

「ロオオオオツクウウウウ」

僕は、最後の希望もたたれてしまい、頂垂れる。

ああ、これが本当の絶望という訳か。

「もう、何でも言う事聞くんで勘弁して下さい」

「うーん、いいよ。もう時間だしね」

「…え、時間？」

スバルは、自分のハンターV.Gを見る。12時50分

みるみる、スバルの顔が青くなる。

「昨日の戦いで私たち疲れてたから寝過ごしちゃったんだね」

「電波変換で行こう。ミソラちゃん着替えるからさつき行ってくれない？」

「いいけど、ロック君、大丈夫かな」

「あ…」

そのあと、スバルは2時位にWA？Aについたと言う。

起きたら…（後書き）

次回、敵について説明します。

引き続きオリキャラの名前募集しています。

いまだに、名前が決まっていなかったので遠慮なく送ってください。
感想も待ってます。

アース（前書き）

なんか適当ですみません

アース

通常視点

「WA？A司令室」

チン、とエレベーターから到着の音が聞こえ、中から赤い服を着た少年が入ってくる。

司令室にいた一同は、やっと来たかという表情を浮かべている。

「す、すみません。寝坊しました」

「おせえよ、スバル」

「そうだが、今日は俺ですら遅刻しなかったのによ」

スバルが、詫びを入れるとジャックとゴンタのバッシングを受ける。

「ま、星河君も疲れていたのだろう」

「そうね、昨日は新しい敵と戦ったらしいじゃない」

「長官、ヨイリー博士お久しぶりです」

それにフォローを入れる長官とヨイリー博士。

スバルは、二人に会うのは約一年ぶりだった。

「それにしても、スバルちゃんは大きくなったはね」

「ありがとうございます」

「そういえば、私も若いころに——」

「博士」

ヨイリー博士が長話をしようとするどこからか機械っぽい声が聞こえた。

「あらあら、ごめんなさい、アシッドちゃん」

そこには、アシッドと暁シドウとクインティアさんがいた。

「暁さん！体大丈夫なんですか！？」

「ああ、大丈夫さ」

シドウは、腕をめっいっぱい広げて元気アピールをする。

「じゃ、そろそろ説明でもしますか」

見計らっていたかのように、ダンは口を開いた。

そして、スバル、ミソラ、ゴンタ、シドウ、ジャック、クインティア、長官、ヨイリー博士に緊張感が走る。

「やつらの組織名は、アース。アースという電波体が率いていて、理由は分からないが俺たちを滅ぼそうとしている。そして、昨日スバルが戦ったやつだがいっつみたいなのがもう数体いる」

「え！まだあんなのが数体いるの！」

「ああ、やつらの総称はカラミティ…災害という意味だ」

「災害？どういう意味なのダンちゃん？」

「ダンちゃんって…ま、いいか。昨日のやつは火事、多分そのうち、地震やら、吹雪やら、雷やら出てくるだろうな。そして、いつもこいつも強い…なんたってスバルだからな」

「じゃ、どうするの？ダン君」

「こいつをスバルに使ってもらおう」

そう言い、ダン自身のハンターV Gを使いスバルにあるものを送った。

「ダン、これは？」

「そいつは、エースPGMを強化するPGMだ。名前は…そうだな、スターPGM（以降SPGM）そいつは、今までの、ノイズチェンジを強化したり、新たなノイズエンジを加えたりしている。そして、あるコードがあればファイナライズもできるんだぜ」

「そうなんだ…ん、てかなんでダンとユイ電波変換できるようになったの？」

ダンはいざガードオンをする。

そこには、子犬のようなウィザードだった。

「俺の相棒のメタルは、アースの組織で実験体としていたんだが、嫌気がさして脱走したんだ。で、たまたま俺が行く当てのないこいつを引き取ってやったんだ。今日は、きてねーけど、ユイもそうだぜ」

「そうなんだ」

「じゃ、そう言う事で俺からの言う事これくらいだ。長官解散って言っ事でいいすっか」

「うむ、解散」

その掛け声で皆は三々五々と散っていた。

ただ二人を残して

「ヨイリー博士、例の計画はどうかね」

「順調です。長官」

「そうか、この計画が成功すればあの子たちの負担も減るだろう」

「ええ、必ず成功させます。アッシュ量産計画」

スバル視点

今、僕とミソラちゃんは駅から降り、家へと歩いていた。

「…また、戦いが始まるのかな」

「大丈夫だよ、なんとかって僕は世界を3度守っているからね。今回も守って見せるよてん絶対に」

「うん、そくだよね。私もできるだけ手伝うから！」

「うん！」

僕らは、互いに微笑みあい家へと帰った。

アース（後書き）

感想待ってます

引き続きオリキャラの名前募集してます

チケット（前書き）

もう少いで、クラブの府大会

小説共々がんばるぞー

チケット

スバル視点

「平和だな」

ベッドでゴロゴロしている僕に唐突にハンターからやる気のない口ツクの声が流れた。

実際あれからFRとの戦いから3週間…なんにも起きていない。

4月も終わろうとしているのになんにも動きがない。

僕はそれが…

気味が悪かった。

で、そんな中、僕とロックは家で暇を持て余していた。

ちなみにミソラちゃんは、今夜の帰国ライブをするためにスタッフと打ち合わせにオクダマスタジオに行っている。

それにしても

「暇だ」

「暇だな、スバル」

バツと反射的に窓を見る。

そこには、ダンとユイがいた。

ホッと胸をなでおろす。

流石に敵もここまで大胆では無かったようだ。

「ん、どうしたの？スバル顔色悪いよ」

「うん、どっかの誰かさんたちのおかげだね」

「なんだと！どこのどいつだ、スバルの顔色を悪くした奴は！」

「君たちだよ」

「ホントだよ、許せない！」

「え、スルー！？まさかのスルー！！」

「確かにこいつはブサイクで、能無しで、引きこもりで、あほで、間抜けで…」

「ダああああん、貴様、表に出ろ！！」

「て言うのは冗談で」

冗談なのかよ。

僕は、思わず毒づいた。

にしても本当にこの2人は…僕を全く退屈させてくれない。

「で、要件は何？来たからには言う事があるんだろ？」

「おお、そうだった。あのさスバル」

二人は声をそろわせて言う。

「「ミソラちゃんのライブのチケット頂戴」」
「は？」

それから二人の訳を聞かされた

「フムフムで、君たちはミソラちゃんの大ファンで手に入れ損ねたチケットがほしいと」

「そうそうで、ミソラちゃんにチケット二枚分頼めないかなスバル？」

「うーん、こればかりはミソラちゃんに聞いてみないと…」

「「お願いスバル」」

二人は、雨の中に捨てられた子犬のような目で頼んでくる。

グッ、流石腐っても幼馴染…僕の弱点を突いてくる。

「分かったよ、とりあえずメールするだけするよ」

適当に文を打ってミソラちゃんに送った。

数分後

「……………オッケーだったさ」

「わーい、やった！」

「よっしゃやや」

本当にうれしそうに喜ぶ二人を見て、僕も無性に嬉しかった。

「じゃ、今夜6時にオクダマスタジオの駅前で僕の友達と待ってるから」

「うん」「おう」

二人は、手を振って出て行った。

もちろん電波変換して

「……ふうー」

二人が去った後ドツと疲れが来た。

本当に退屈させないな、あの二人は…

そう思いながら僕は、時間が来るまで眠りについた

チケット（後書き）

パソコンを修理に出すのでしばらく更新できません。

感想待ってます。

ひきつづき名前待ってます。

にげちゃ、ダメだあああああ（前書き）

久しぶりの投稿です。

思った以上に修理に手間取りました。

すみません。

にげちゃ、ダメだああああ

スバル視点

僕、委員長、ジャック、ゴンタ、キザマロと各自のウィザード達は
オクダマスタジオ前の駅でダン達の到着を待っていた。

「遅いわね」

唐突に委員長が口を開いた。

あれ以来、僕らの中は気まづくなり互いに避けていた（主に僕だけ
だったような気がする）

今回のことも、僕↓キザマロ↓委員長といった感じで伝言を回して
もらった。

というわけで僕らは少し距離を置いていた。

そんなに委員長を横目で見ると…

ひひひひひ、と思わず声をあげそうに成程委員長は、僕のことを
睨んでいた。

怖い、怖い、殺されるう。

ジャックたちは、恐怖のあまりブルブル、と生まれたての子羊のよ
うに震えている。

今の僕は、委員長にしゃべりかける蛮勇は無い。

そう決意し、聞こえない振りを決め込んだ。

「遅い。遅すぎるわ！星河君の幼馴染！」

近くで、言われても聞こえない、聞こえない。

委員長は、尚も同じことを繰り返すが、僕は、しっかりと聞こえない振りをする。

…さて…、そろそろ逃げようか……………

そう思いながらクラウチングの構えをしようとすると、真っ直ぐに伸びた二本の腕が、僕の顔に埋まった。

つまり、ダブルリアット。

「ぐふぁ」

派手な音を立てて豪快に数m跳ぶ。

……………気のせいだろうか？

委員長が、「ふん、ざまー見なさい」と言ったような気がする。

「いや、遅れてごめんね、ごめんね」

「…謝る…気ないだ…ろ………」

息絶えながらもなんとか立ち上がり元いた場所を見る。

そこには、ダンとユイがいた。

殺してやりたい。今すぐ八つ裂きにしてやりたい。

「そんな怖い顔で睨むなっさんなって、スバル」

「君らは相変わらず30分遅刻してくるね」

念のため時間を調整して正解だったよ。

「にしても、ミソラちゃん遅いですね」

「そーいやそうだな」

「じゃあさ、その間自己紹介しない？」

「いいな、それ。流石ユイだ」

キザマロ、ゴンタ、ユイ、ダンのじゅんで喋り自己紹介が始まった。

その場にいたものが、了解の意味で頷いた。

「じゃ、おれから言うぜ。おれの名前は外亜 ダンだ。こっちの子犬がメタル…おれの相棒だ」

「よ、よろ、ししく、で、す」

緊張しているっていうより怯えているに近かった。

…ダンに何かされてるのか。

「私は、青星 ユイだよ。こっちの蒼の瓶がウィザードのアクア」

「ユイ共々よろしくお願いします」

「それでね、それでね」

お、まだ続くようだ。

「将来の夢はダンとスバルと結婚するの！」

ダッ（ダッシュで逃げる僕）

ガシッ（肩を掴み首を横に振るロック）

…そうだよな。

逃げても一緒だ。

そう思いみんなの前に向きなおす。

キィッ（ものすごい形相で睨む委員長）

ビクビク（とたんに震えだす僕の体）

逃げちゃだめだ、逃げちゃだめだ、逃げちゃだめだ、
だ、逃げちゃだめだ

逃げちゃだめだ、逃げちゃだめだ、逃げちゃだめだ、
だ、逃げちゃだめだ

逃げちゃだめだ、逃げちゃだめだ、逃げちゃだめだ、
だ、逃げちゃだめだ

逃げちゃだめだ、逃げちゃだめだ、逃げちゃだめだ、
だ、逃げちゃだめだ

「逃げちゃ、だめだあああああああ」

僕は、言葉とは裏腹に逃げ去った。

にげちゃ、ダメだあああああ（後書き）

久しぶりの投稿でうでがなまってないか心配です。

明日は、5、6話更新したいです。

再結成（前書き）

今回は、あの人がでてきます。

再結成

「はあ、はあ、はあ。ここまでくれば大丈夫だろ」

「なんで、おれまで…てか、ここはどこだ？」

言われてみればここはどこだろ。

あたりを見渡して見るが、ただの林が広がっているだけで他には何も無かった。

何より、オクダマスタジオは、半年ほど前に改装＋規模拡大をしたため前来た時とは勝手が違う。

本来ならば、集合場所でミソラちゃんが来るのを待つのだが、鬼のせいで逃げださなければならなかった。

「どうしよつか？ ロック」

「……だれか探して聞けばいいんじゃない？」

「そんな簡単に人がいる「何してるんだ？ スバル」いた」

いました。普通にいました。

しかも、この声は…

「マモロウさん！」

「よっ、スバル久しぶりだな」

後ろを振り向くと、僕のブラザーマモロウさんがいた。

こうして会うのも随分と久しぶりだ。

少し緊張する。

「あの、マモロウさん」

「ん、なんだ。改まって」

「えっと、道に迷ってしまっ…えへへ」

照れくさそうに笑う僕を見て、仕方なさそうにマモロウさんは、ため息をついた。

しかし、それもすぐに真剣な表情へと変わる。

「実は、スバルお前に頼みごとがあるんだ」

「？なんですか」

僕もつられて小声で話す。

「また、きたんだよ」

「また？」

マモロウさんは、当たりを見渡しさらに小さな声で言った。

「脅迫状だよ」

「…また…ですか…」

脅迫状か…ダイヤの件を思い出すな。

「で、これなんだが」

自身のハンターを操作し画面を見せる。

どれどれ…

「Dear 寂女へ 今日のライブをビリビリに潰すぜ！

いやなら、流星のロックマンにでも助けてもらいなbyサンダーロ
ックマン（以降SRと称）

「…テンションおかしいですね」
「だな」

「そんなことより、二人ともこいつの知り合いかなんかか？」

「いや、全く」
「そうか…」

マモロウさんは残念そうにうつむいた。

全くというのはもちろん嘘。

でも、アースやカラミティのことは極秘事項だから言うことはできない。

…ゴンタが委員長に行ってしまういそうで心配だ。

「で、お前に頼み事——」

「もちろん引き受けます」

マモロウさんが言いきる前に僕は了承した。

「…そうか、じゃ、レゾンを設定しようぜ」

『レゾンの設定を完了しました』

レゾン内容はもちろん「ライブを成功させる」だ。

ミソラサポート's

再結成かな？

「じゃ、しばらくはパトロールを頼むわ。何かあったら連絡するぜ」

じゃ、と手を挙げマモロウさんは、去っていった。

ぼくも手を振って別れた。

「さっ、どこから行こうか」

「それよりもスバル」

「なんだいロツク？」

「ここどこだか分かってんのか？」

.....あ。

「しまったあああああ」

僕は、ダッシュで、マモロウさんの後を追った。

再結成（後書き）

この調子じゃ、5、6話無理っぽいです。

頑張つて、あと1、2話やります。

感想まっています

新たな力（前書き）

今日は、これが限界です。

すみません

新たな力

オクダマスタジオ内』

結局、あの後マモロウさんには、追いつけずメールを送り、スタジオ内の地図を送ってもらった。

てな訳で、地図を見ながら僕はオクダマスタジオの受付前にいる。

それにしても、広い。ただただ広がった。

前とは比べ物にならない。

次は、室内で迷子になりそうだ。

『見上げる空は 心に』

「電話だ。だれから？」

「キザマロからだ」

いけない。

そういえばみんなと離れ離れのまんまだった。

きつと、心配してくれたんだな。

少し、うれしく思いながら電話に出た。

「あ、キザマロ。僕——」

「助けてください。スバル君!!」

どうやら、僕が心配しないといけないようだ。

「キザマロ。何があつたか教えてくれ」

「委員長が、委員長が」

SRめ。

何がミソラちゃんのライブをつぶすだ。

手紙はフェイクか！

「委員長が、特別席で暴れてるんです！」

.....へ？

「早く早く来てください。僕以外のみんなは電波変換して逃げたんですけど、このままじゃ」

ブチッ

僕は、何のためらいもなく電話を切った。

さらば、友よ。君のことは忘れない。

『見上げる 空は』

「今度はマモロウからだぜ」

「はい。スバルです」

マモロウさんからなので普通に出る。

キザマロなら無視していただろう。

…そうだ。着信拒否に設定しよ。

「はい…小道具部屋のウィザードが返ってこない？…わかりました。行きます」

「面白そうじゃねーか。行こうぜスバル」

「うん。でも、おもしろくないからね」

しっかりと訂正して、僕は小道具部屋へと走り出した。

勿論、着信拒否に設定するのも忘れずに

「トランスコード003 シューティングスターロックマン」

『小道具部屋内』

僕は、ロックマンとなり、さっき部屋にいたミソラサポートsのお姉さんに聞き小道具入れにサイバーインした。

入った瞬間目の前には大量の電気系ウィルスと今にもデリートされそうなウィザードが一体横たわっていた。

「ロック！」

「わかってら」

ロックをウィザードオンし、ビーストスイングで蹴散らす。

「リカバリー150」

その間に、僕はウィザードを回復させる。

「大丈夫、立てる？」

「は、はい。何とか」

「じゃ、持ち主のところに戻って」

「はい」

ウィザードが、去ったのを見送りウィルスのほうに構えなおす。

さっそく新しいノイズチェンジを試そうか…

「ノイズチェンジ…ゴート！」

光と共に姿が変わる。

羊をイメージする姿

頭には、二本の角が生えており、脚力とに異常なほど力が湧いてきた。

これが、新しいノイズチェンジの力。

頭に流れるゴートの使い方をすると同時に1直線にウィルスの群れの中へと走った。

「バトルカードヒートアップ」

僕は、炎の拳を高々と挙げた。

新たな力（後書き）

感想お待ちしております。

新しい力は使いにくくて（前書き）

今回は、二つのノイズチェンジを使います。

新しい力は使いにくくて

拳を高らかにあげ、ウィルスを蹴散らす。

ただ、ヒートアップを使っているんじゃない。

ゴートの数あるノイズその一つ、体術系の武器の威力を挙げることだ。

例えば、アッパー系やナックル系などの威力を上げてくれる。

でも、それだけでは、威力を上げたただけなので蹴散らすには手数が足りなすぎる。

でも、もう一つの能力が、あればある程度は解消される。

「バトルカード スタンナックル」

雷の拳でウィルスを殴る。

その瞬間僕の体は三体に分身した。

そう、ゴートの二つ目の能力体術系のバトルカードを使うときに3体に分身するというものだった。

普段体術系の武器は威力はあるが範囲が狭いというのが弱点だった。だが、三体に増えることにより攻撃する瞬間だけ攻撃範囲が広くなる。

威力が上がっている今、この程度のウイルスならカスリ程度でやれる。

「スバル、オヒュカスにノイズチェンジだ！」

「OK、ロック。ノイズチェンジ…オヒュカス！」

光が包み、オヒュカスノイズへとノイズチェンジする。

そういえば、前のノイズチェンジには新しい能力がついたって言うてたな！。

どんなのだろ？

そう思考しつつ、改めてウイルスのほうへ向きなおす。

「バトルカード グーリングレネード」

このグレネードは、誘爆すると草むらパネルを発生させるという付属効果がある。

これで、誘爆させて発生した草むらパネルを使ってジャングルストームでさらに少なくしてやる。

ボンッ

「スバル待て」

音が鳴り、ジャングルストームを発動させよーとするとロックから制止の声がかかった。

「どうしたんだい、ロック？」

「よくパネルを見る」

「ん？パネルって草むらパネルじゃ——」

ないの？、と言いきる前に気付いた。

そこには、草むらパネルではなく、毒沼パネルがあることに。

少し、呆氣にとられたがすぐにジャングルストームからポイズンス
トームに変更し、ウイルス達を一掃した。

もしかして新しい能力ってパネル系の効果を毒沼に変えるのか。

ちゃっちゃと終わらせよ

「NFB…ゴルゴ・アイ……って、ええええ！」

僕の目からきれいな赤い光線が一直線にウイルス達を貫いた。

エレメンタル・サイクロンのつもりがゴルゴ・アイってNFBも変
わるのか！？

フム、威力だけならトップクラスだな。

でも、貫通能力があるからって範囲は一直線だし、ウイルスは一掃
できず、まだ、十体程残っている。

そして、体力は限界だ。

なぜなら、さっきまで逃げ回っていたし、大量のウィルス相手では
疲れる。

「うっ」

突然ふらっと体が揺れたかと思うと僕は地面に仰向けになって倒れた。

立たないと…立たないとやられる。

ニヤリ

ウィルス達はウィルス独特の笑いを見せ、僕の方へ迷わず突っ込んできた。

くっ、万事休すか…

「スバル、あきらめんな」

その声と同時に青い電波体がウィルスを数体蹴散らした。

新しい力は使いにくくて（後書き）

感想待ってます。

メール（前書き）

最近、s d g oというガンダムのネットゲームにはまりました。

皆さんもどうぞです。

ちなみに僕のユーザー名はかず21です。

メール

その青い電波体はロックだった。

疲労のせいか目に霞が掛かっていたがそれはロックだとすぐにわかった。

ロックとウィルスは戦う。

だが、僕をかばいながら戦うというハンデと、10体を相手にするのは、さすがに苦しく3体倒したころには、ロックの息はだいぶ荒れていて、体中ボロボロだった。

「ロック…」

「へ、心配ねーよ」

ボロボロの体を奮い立たせ、笑いそして、言い放った。

「こつから先は通さね！てめえら全員はっ倒す！」

「よく言ったロック」

「後は任せて」

この声は…

「ダン！ユイ！」

そこにはダンとユイが、電波変換したメタル・ウォーリアとアクア・エリアスだった。

二人は、コクリと頷いた。

「ウォーターアロー」

「いけ！ビームライフル」

ユイは一回ジャンプして、瓶をウィルスの方へとむけ水色の矢を大量に放つ。

そして、ダンは僕の傍での確に黄色い光線を打ちウィルスの脳天へと当てる。

どうやらダンのライフルは、ビームライフルのようだ。

ウィルス達は、突然現れたダン達に成す術もなくデリートされた。

「……はあー、助かった」

仰向けのまま僕を安堵のため息を吐いた。

「大丈夫スバル？」

「ありがとうユイ。大丈夫——」

「そっか。まだ、悪戯する余地はあるんだ」

「ああ！疲労困憊で今にも死にそう！！」

なんて奴だ。

少しでも感謝した僕がばかみたいじゃないか！

残念って小声で言っな！

「あ、そうだ。ロックは」

ロックのいた方を見ると、ロックはダンに手当てをしてもらっているようだ。

ちよつとだけ踏ん張り、少しよろめきながらもなんとか立って見せた。

「ロック大丈夫？」

「大丈夫だって…いててて」

「ごめん。僕のために…」

「ちげーな」

「え？」

「おれは、ごめんよりありがとうの方が言われた方がうれしいぜ」

「…ロック。ありがとう」

「へへ、いいってことよ」

僕らは、少し照れくさそうに笑いあつた。

「おい、スバル」

「ん？何ダン？」

今まで沈黙を決めていたダンは口を開いた。

「お前、戦っているとき体がおかしくなかったか？」

「？いいや別に…でも、いつもより疲れた気がするよ」

そうか、とダンは呟いて何かを考え始めた。

「あ、そうだ。今僕さ……かくかくしかじか角のしかー」

僕は、今までのいきさつを話した。

二人は事情を理解し、このことをみんなに言ってくるそうだ。

「このことはミソラちゃんには、言っちゃだめだよ。余計な心配が
けたくないから」

「わかってるって」

「ちゃんと、休んでね」

二人に手を振り二人はサイバーアウトした。

「じゃ、僕らもサイバーアウト——」

『見上げる空は 心に』

ん、メールだ。

誰からだろ。

「ミソラからだぜ」

ミソラちゃんから？

なんだろ？

「今すぐ、楽屋に来てくれませんか？見せたいものがあるの」

「なんだろ？」

「さーな。とりあえず早く行こっぜ」

僕は地図を見つつ楽屋へと足を運んだ。

メール（後書き）

感想など、お待ちしております。

ぎこちなさの中で少年少女は…（前書き）

特にいうことはないです。

それにしても4いつ出るのかな？

ぎこちなさの中で少年少女は…

コンコン

ミソラちゃんの楽屋は、自動ドアなのだけどいきなり入るのは流石にまずい。

ので、センサーに引つかからないように立ち位置を選びノックをした。

「はい」

「ミソラちゃん。スバルだけど…」

「え！スバル君？」

「ん？どうしたの慌てちゃって」

「ス、スバル君こそ急にどうして…」

「え？ミソラちゃんが来てっていうメールを送ったんじゃないか」

「……………え、私そんなメール…って、ハープ！？」

ハープ？

ああ、ハープが送ってきたのか。

ミソラちゃんのハンターからメールが来たからてつきりミソラちゃんからだと思っていた。

そう一人で、納得していると部屋の向こうからミソラちゃんから「入っていいよ」と言った。

「じゃ、入るね」

「うん、笑わないでね」

「笑うって、別に笑うことなんか――」

そう、笑うことなんか無いと思っていた。

そう、この後笑うよりも別の感情を抱くなんて思いもよらなかった。

通常視点

「笑うって、別に笑うことなんか――」

スバルは、そう言いながら入ると、ある絶景が目に入った。

もちろん比喻表現であり、決して景色のことではない。

スバルの目に入ったのはミソラの少し露出が、多めのドレス姿だった。

ピンクを基準としており、上半身は、ミソラのイメージカラーの淡いピンク。

下半身は、純白太ももがちらちら見えるスカートだった。

きれいだ、とスバルは思う。

ほおを赤く染め、明後日の方向に思わず向いてしまうスバル。

対するミソラも恥ずかしそうに足もとに視線を移す。

スバルは、ミソラが今日のライブのために、このドレスでいるのはすぐわかったが、これではまともに顔を見ることはできない。

（平常心平常心、目を合わすぐらいなら）

スバルは、そう自分に言い聞かせミソラのほうをちらつと視線を移した。

ちら（互いに目が合う）

ばっ（互いに目をそらし合う）

（僕には無理だ！なんか、こつ無性にドキドキする！でもなにか、喋らないと余計気まづくなってしまつとりあえず何かしゃべらなくちゃ）

「あ、あの」「え、えーと」

互いの言葉がはもり二人の間は余計に気まづくなる。

スバルは、ウォーロックに助けを求めようとするが、ハンターの中はもぬけの殻で、ウォーロックに怨恨を抱きながらもなんとかしようと思いを張り巡らしていた。

しかし、特にいい案は思い浮かばず黙り込んでしまった。

「あ、あの私から言うね」

唐突にミソラのはそういった。

ひどく緊張しているようで、いつもの元気いっぱいの声はなくか細

い声がそこにあつた。

「う、うん」

スバルもスバルで、声が裏返っている。

「私、その、似合ってるかな？これ」

そうミソラは、ぎこちなくクルッと回って見せた。

きこちなさの中で少年少女は…（後書き）

ひき続き感想待ってます。

写真いる？（前書き）

今回は、ハープの出番が多いです。

写真いる？

スバル視点

「私、その、似合ってるかな？」

そつぎこちなく回って見せるミソラちゃん。

ふんわり、純白のドレスのスカートの部分が浮く。

恥ずかしいので、ストレートに言わず遠まわしに言おう。

変わらず僕は、裏声のまま言う。

「目の保養に良さそうだね」

「私は山！？」

僕は、首をかしげた。

なんで怒られたんだろ。

「要するにきれいってことよ」

「「ハープ！？」」

「はぁーい」

どこからともなくハープが手をひらひらさせながら現れた。

白き灰と化したロックと共に。

ロックの身に何が起きたんだ？

…ん、何か言っているぞ。

断片的に聞こえてくるロックの声に耳を澄ますと…

「…ごめんなさい…」 「…もう二度としません…」

と、何かに必死に謝っているようだった。

…怖…

僕は、ホラー現象に一瞥をくれてやり、視線をハープに移した。

「そういうことでしょ？」

「え、あ、う、うん。そうともいうかな？」

「あ、ありがとう」

ミソラちゃんが何か小声で言ったようだけど何かは聞こえなかった。

そのままそっぽを向かれたので、表情さえ見えない。

やっぱり怒らしてしまったのかな？

「そんなことないわよ。ミソラはとてにやけていたわよ…あ、その写真撮ったの見る」

「…もう何も言うまい…それより、君だろ！？僕をはめたのは！」
「いいじゃない。ミソラの晴れ姿」

「確かにかわいいけど「写真いる？」2ダース貰おう。はめられるのは…」

「スバル君。あなた何気にすごい発言してるわよ」

だって、ファンとしてミソラちゃんのドレス姿の写真ってほしいだろ。

「それに、ミソラちゃんきれいだし」

と、小声で言った。

ピッ

ん、なんだこの音？

ハープから聞こえたけど…

何か手に持ってるぞ？

それをよく見てみると…

「言質とったわ」

「ボイスレコーダかよ！」

今のをミソラちゃんに聞かれたら…

恥ずかしすぎるう！

「これミソラに聞かさないよね（にやにや）」
「頼むからやめて！」

「ほら、大きな声出すとミソラに聞かれるわよ」

「くう、ハープ。貴様」

「交換条件よ」

「交換条件？」

なんだろ。交換条件って？この交換条件ならそれ相応のものだろ…

ので、僕は深々と頭を下げてこう言った。

「どうか女装だけは勘弁してください」

「どうしてそうなった！？」

「え、違うの？よかったです」

「…まあ、いいわ。条件は今度、ミソラと買い物に行つてあげて。いやならさっきのを——」

「喜んでいかせていただきまっす！」

「そう、よかった」

脅すだけ脅してハープとロックはウィザードOFFした。

『見上げる空は 心に』

と同時にメールが来た。

「だれからだろ…」

ダンからのメールだ。

僕は、内容を見ると、血の気がサーと引いた。

「ライブステージから少しのところにある森でウイルス達が暴れてんだ。

オレ、ユイ、ゴンタ、ジャックは、もう戦っている。

お前も早く来い」

とのことだった。

僕は、ミソラちゃんに背を向けてようとしたが、呼び止められてしまった。

「どうしたのスバル君？」

ミソラちゃんから心配そうな声が漏れるが、僕は心配させまいと感付かれまいと、今できる作り笑いを浮かべた。

「大丈夫！ちょっと、ダンに呼ばれたただだから」

「スバル——」「絶対、ライブ聞くから…楽しみにしてるね」

もう一度作り笑いを浮かべ、僕は地図に従い森へと向かって走る。

絶対、絶対にライブを成功させてやる！

僕は、決意を胸にさらに走るスピードを上げた。

写真いる？（後書き）

ちょっと、今回はスバル壊れた部分がありますね（笑）

感想待ってます。

エレキギター（前書き）

あまりにもほかのキャラがしゃべらないのでわかるように今度番外編をしようと思います。

エレキギター

『スタジオ近くの森』

「みんなお待ちせ！」

僕は、電波変換するなりすでにウイルス達と交戦中のダン達に向かって声を上げた。

「「「おっせえ!!」」」「遅い!」

「ええ。まだ1分もくらしいしか経ってないんだけど…」

「「「「10秒で来い!」」」」

「鬼だる君ら! てか、まだあつて数時間もないのに見事な連携だね!」

「「「「D A R O」」」」

「殺したい…今すぐ八つ裂きにして殺りたい」

僕の胸に憎しみという文字が激しく燃え上げる。

「へーーーーーい」

ズドオオオオオオオオオン

突如、激しい電子音と雷が僕らのすぐ近くに落ちた。

僕らは、口げんかをやめ、もう一度戦闘態勢へと入る。

声の方向を向くとそこには黄色の僕…つまりSRがいた。

しかし、今回の僕は、僕との色の違い以外で違いがちゃんとあった。

それは、黄色のエレキギターを持っていることだ。

「…なんで、あいつギター持ってた？スバル」

「ゴンタ。そんなの僕に聞かれても…ダン何かわからない？」

「わかるか。メタルなんにか知らねーか？」

「え、えつとそ、そのー」

「はつきり喋りやがれ！この子犬野郎が！」

「ロックだめだよ。大きな声を出しちゃ」

「さあ、続けて続けて」

「……お、音楽が…だ、大好きなんじゃ、ないでしょうか………」

「「「「んなわけあるかぁー」」」」」

「ひ、ひい。ご、ごめんなさい」

「まあ、まあ。みんなそんな怒んないの。メタルも次からははつきり喋ろうね」

「は、はい」

「もういいか？」

SRは、退屈そうに自分のギターをチューニングしていた。

「僕とユイが、SRをやるからダンとゴンタとジャックはウィルスをお願い」

「二人だけで大丈夫か？おれが行っても…」

「ダンは、二人のサポートを頼むよ。ジャックは、前のFRとの戦いでダメージがあるし、それをゴンター一人でフォローできとも思わないしね」

「…すまね、スバル。お前のほうがダメージあるのに…」

「いいよ、これくらい…じゃ、行くよ」

そして、僕らは2チームに分かれ、それぞれ向かうべき場所に向かった。

今回のウィルスの数はFR戦とは、比べ物にならない。

2チームに分かれた方が効率的だ。

ぼくとユイは、SRの前に立ちはだかる。

いや、SRが僕たちの前に立ちはだかったのかもしれない。

「さて、おれの方に来たのは二人か…なめられたもんだな俺も…」

「ま、君なんて僕ら二人で十分つてことさ」

「……………一つ良い事を教えてやるぜ」

「何？」

「おれの強さはFRの2倍だ」

言つと同時にSRのオーラが変わった。

周りから、途切れ途切れに電気が顔をだし、鋭い音を立てている。

成程、SRより強いのは嘘じゃないようだ。

でも、それでも…

「さー、ビリビリとしびれるバトルをしようぜ」

僕は、必ずライブを成功させる！

SRのセリフと同時に勝負が始まった。

エレキギター（後書き）

感想などとしどし待っています。

幼馴染とのコンビネーション（前書き）

今回は、ユイと一緒に戦います。

どうぞ、お楽しみください。

幼馴染とのコンビネーション

「一つ、ゲームをしようぜ」

「ゲーム？」

「ああ、これで遊ぶんだ」

SRは、手を天にかざし、光の玉を放った。

すると、見る見るうちに雨雲ができ、少しずつだが大きくなっていく。

「なにそれ？」

「こいつは、雷雲だ。名前の通り雷の雲で、徐々に大きくなり最大まで大きくなると……」

「大きくなるとなんだってんだよ」

「何もかも消し飛ばす神の雷へとなるのさ」

「神の雷？そんなことは、僕らがさせない！必ず止めてやる」

SRは、片手で？サインを作る。

「20分だ。20分で神の雷が発動する。その間に俺を倒してみな」

やってやるさ。絶対に……！

僕は、ユイにアイコンタクトを送り、事前に打ち合わせた作戦を発動する。

「ノイズチェンジ……リブラ！」

僕の体が光に包まれ、リブラノイズへと姿を変える。

「ウォーターバズーカ！」

僕が、ノイズチェンジしている間にユイは自分の瓶を肩に担いで水を圧縮した球をSRに向けて放つ。

しかし、SRはこれを難なくかわす。

しかし、これでいい。

僕は、SRが攻撃をかわした瞬間に、突っ込んだ。

あるバトルカードと、共に…

「バトルカード ジェットアタック1」

無敵状態となりSRめがけて1直線に突き進んだ。

「浅知恵だぜ」

SRは、突っ込んできた僕をいなし、反撃へと移る。

狙いは水属性のユイだ。

「おれ相手に水属性とは笑わしてくれるぜ」

「……………」

「そーら、スーパーサンダーボール」

SRは、ボウリングを投げる感じで数発サンダーボールを投げる。

S Rの投げたサンダーボールは、普通のサンダーボールと違って速かった。

ユイは、走り回ってよけていくが、サンダーボールは追尾性でどこまでも追いかける。

更には、スピードもあるので捕まるのも時間の問題だ。

「つやらせはしない！」

僕は、少し距離があつたので遠距離系のカードを使う。

「ワイドウェーブ1」

水の衝撃波がS Rを襲う。

「こんなもの……エレキウォール」

自身の目の前に電気の壁が出現しワイドウェーブを防ぐ。

「これぐらい何とも——！」

S Rは、目を丸くした。

そこには、僕はいず、当たりを見回してもどこにもいなかった。

リブラの新たな能力は、水属性のカードを使うと3秒だけインビジブル状態にすることである。

ちなみに炎属性の効果もあるのだが、どんなのは使ってみないとわからない。

「今だ。ユイ」

「OK。スバル」

逃げ回っていたユイは、サンダーボールの方向にツボを構えた。

「吸い込め！」

ユイの言葉通りに、サンダーボールは吸い込まれていった。

「な、なにー」

「からの…放出」

ユイの瓶は、水を操るだけでなく決められた質量までなら吸収することだってできるすぐれものだった。

僕がユイを選んだっ理由はこれだ。

電気属性のSRが、水属性のユイを狙うと予想できるのは容易だった。

「さすがだな。だが、もう一度スーパーサンダーボールで相殺してやる」

SRは、手にサンダーボールを作り、投げようとした。

だが、ぼくはそれをさせない。

「バトルカード パニックラウンド」

「なっ、手元が…！」

S Rは、全く関係ないところにサンダーボールを投げ、そのまま全弾S Rにあたり、体中にしびれが走っている。

パニックラウンドは、周辺にいる電波体を7秒間だけ混乱させる。

勿論、ユイの例外では、ないのだがユイの出番はもうない。

「コイツで決めてやる。N F B…ダブルライトバレッジ！」

空中で、拳を引き、水と炎のエネルギーを溜めS Rめがけて一気に放出する。

赤き球と青き球が、S R付近に爆破し、大爆発を起こした。

幼馴染とのコンビネーション（後書き）

すこし、パニックラウンドの効果をいじりました。

感想を待っています。

無力な僕じゃない…（前書き）

俺が思っていた落ちからだんだんと変わろうとしています。

どうしよう（笑）

無力な僕じゃない…

「ハア、ハア、ハア。やった…」

僕は、肩で息をしつつ勝利の余韻に浸りながら爆風で舞い上がった煙を見ていた。

それにしても、今日はいつもより疲れる。

どうしてだろ？

「スバル。大丈夫？」

「…うん、大丈夫だよ。それよりユイは？」

「私は逃げ回っていたから大丈夫。それにしてもあっけなかったね。こんなに簡単にやつつけられるなんてね」

「そうだ——」

「誰が呆氣ないって？」

ね、と言おうとした時、爆風の中から5本の先端が鋭く上がったワイヤーが、僕の顔めがけて飛んでくる。

やられる。そう思った時、力強く何かに胸を押された。

一瞬の思考の停止。

だが、目の前に移る映像が全てを物語る。

ユイの肩に二本のワイヤーが貫通していた。

「え…？」

スローモーションで、ややオーバーに倒れていくユイ。

どさっ、と倒れる音と共に僕の思考は復活を遂げる。

「ユイ!!」

敵に、背を向けしゃがみこむ。

返事がない。

僕が、揺さぶろうと手を伸ばそうとした時、ユイの体に突然、電流が走った。

「えっ…?」

「きゃあああああああ」

僕の、拍子抜けた声と裏腹にユイの悲鳴が広がる。

指先にビリッと来るものがあり、反射で手を引っ込める。

…このワイヤー…電流が流れてくるのか!

「バトルカード ファイヤースラッシュ」

炎剣を展開し、力いっぱいワイヤーを切りつける。

ワイヤーは固く、きれば切るほど固くなっていく感じがした。

更に、ワイヤーに剣先が触れるのと同時に電流が僕の体を走りぬく。

「スバル………」

「喋っちゃだめだ。ユイ」

「あ、のね……」

僕の抑止も無視して、ユイは口を動かす。

「あ、の時、の、事、まだ、気にし、てるんだ」

「だって……」

「だって、じゃ、ないよ、スバル。あれは、スバルのせいな——」

そこで、ユイはグツタリとし、目を閉じた。

「ユイ？ユイ！」

「大丈夫です。ユイは寝ただけです」

「アクア！」

ユイのウィザードのアクアは状況報告する。

僕は、安堵のため息を漏らす

「ユイ、ユイ。うるせーな。おい」

「……SR」

後ろを向くと、黄色のギターを構えているSRの姿がいた。

さっきの攻撃はあのギターによるものか、と推測する。

僕は、ゆっくりと立ち上がりキツとSRを睨みつけ、お腹の底から声を上げた。

「SR！お前を絶対僕の幼馴染に手を出したことを後悔させてやる！」

「来いよ。ビリビリの黒焦げにしてやる」

「やってみろ！僕の新しい力でおまえを倒す！ノイズチェンジ…ア
クア」

光が僕の体を包み込んだ。

無力な僕じゃない…（後書き）

感想など待ってます。

きれたスバル（前書き）

スバルが、きれます。

どうなることやら

きれたスバル

「ノイズチェンジ…アクア！」

僕の体が青い光につつまこまれ、水色を基準とした姿へと変わる。

「これは…ユイの……」

僕の新しい姿、アクアノイズ。

手には、あの青色の瓶がある。

グツと、瓶を握りしめ僕は、SRに向けて構える。

「ウォータスラッシュ」

「そんなヘナチヨコカッタなんざ——」

シュツと、空を切る音がすると同時にSRの右肩と胴体が引き離されていった。

「え……？」

「ヘナチヨコな攻撃が何だって？」

ブッシャー——と、鮮明な血が噴き出しSRは膝をつきつつもリカバリーを大量に投入する。

「……………どうした？スバル。今ならあの野郎を倒せるぜ」

「そうだね」

「だったら——」

僕は、右手で続きを制した。

「だって、それじゃ。ユイの苦しみを味合うことができないじゃないか」

「スバルお前……！」

「孤独の周波数か？ いや、別のも………」

ロックが、何やらぶつぶつ言い始めたようだが特に気にしない。

「はっ、俺相手に手加減だと……？ 笑わしてくれるぜ」

SRは、肩を抑えながらも立ち上がり、僕を睨みつけた。

「……もう立てるんだ。タフだね」

「ああ、アース様がリカバリーを改良した、リカバリーXのおかげだ。これなら大抵の傷でも治せる」

自分の肩をグルグルと回し感触を確かめつつSRはうん、と頷いた。

「この調子ならいけるな」

「……………」

「……………おい、もしかして今のが本気だと思ってるの？」

「……御託はいいからきなよ」

「そうか。そーいうことなら」

スタンディングの構えを取り一気にSRは加速した。

速い。

でも、今の僕なら…

「ウォーターアロー」

ユイみたいに、上に構えずSRに一直線に向かうように大量の水の矢を放った。

しかし、それはSRはエレキウォールを展開して、それを押すようにし、ウォーターアローをすべて弾く。

「くっ、ウォーター——」

「させつかよ。エレキボム」

野球ボールのように白いボールを瓶の中に投げこまれる。

バアアン！

入って1秒もたつか経たないくらいに瓶が粉々に砕かれた。

しまった。

このノイズチェンジは、瓶が応用が利き、ありとあらゆる状況に対応できる事が出来るのだが、その代わりバトルカードが使えないという弱点がある。

普段なら瓶が破壊された時点で、ノイズチェンジすればいいのだが敵はもう目の前だ。

「覚悟はできてるよな。本物さん？」

「ライトニングボルテックス」

「う、うああああ」

S Rの手が、振り下ろされ曇り空から極太の雷が、僕の頭上に落ちた。

「ぐう、くあ、あぐ、は」

「お、まだ生きてんのか。しぶてーな。何まだビリビリされたいわけ？」

そんなわけない、と言おうとしたが声がでなかった。

目を開けようとしたがぴくぴく動くだけで十分にS Rの姿を確認することができなかった。

「エレキストリング」

ワイヤーが、僕の肩を貫き電撃が走った。

「ぐうああああああああああああ」

広がる断末魔。

ああ、これがユイの感じた痛みか…痛いな

このままじゃ、死ぬのかな？

苦しんで苦しんで…死ぬのかな？

「あきらめるな！スバル君」

「さつさと起き上げれ！」

頭上から何かが降ってきて、ワイヤーを切り裂いた。

あんなに硬いワイヤーを切り裂くなんて一体何者なんだ。

「おら、リカバリーだ」

徐々に体の痛みが取れてくる。

「立てるかい？」

金色の手が僕に手を差し伸べた。

目を開けると、そこにいたのは…

「ツカサくん！ヒカル！」

そこにいたのは、ツカサが電波変換した姿、ジャミニ・スパークWとBだった。

「や、久しぶりだね。スバル君」

ツカサ君は、いつもの2年前と変わらない笑顔で微笑んだ。

きれたスバル（後書き）

きれたスバルあんまり強くないですね（笑）

にしても、リカバリーXつよ

やっとなツカサ達も出てきたし、次は何をしようかな。

感想待ってます。

今、僕のやりたいこと（前書き）

今回はちょっと短いです。

今、僕のやりたいこと

「ツカサ君！ヒカル！どうして君たちがここに？和解の旅はどうなつたの？」

「スバル君落ち着いて」

「でも…」

「いいから落ち着けて」

そうだ落ち着け僕。いくらユイがやられたからって逆上して周りが見えなくなっちゃ意味がない。落ち着かないと…

二人になだめられ徐々に落ち着きを取り戻す僕。

念のため深呼吸をする。

「落ち着いた？」

「…うん。落ち着いた。」

「事情は、後で聞くよ。なんで君が君とそっくりさんと戦っているかは知らないけど」

「友達のためならどんな理由でも戦ってやるよ…だろ？ツカサ」

その通り、とツカサ君は言い二人は、改めて手を差し伸ばした。

優しく差しのばされた手とぶつきらばうに差し出された手をガッチリと掴み、起き上がった。

「スバル君。今、君のやりたいことってなんだい？」

「復讐か？それともやつを倒したいのか？」

僕が、やりたいこと………そんなこと考えるまでもない。

僕が、やりたいこと…それは…！

「ミソラちゃんのライブを成功させることだ！一人のブラザーとして！」

「へっ、やっとやる気になったか」

「それでこそスバル君だよ」

僕らは、改めてSRに向かって戦闘態勢をとる。

ミソラちゃん、君の力借りるよ。

「ノイズチェンジ…ハープ」

桃色の光が僕を包みハープノイズへと変わる。

ピンクを基準としており、白いスカーフをしていて蒼いギターが手元にあった。

「感動的だな。だが、そんなもの無意味だ」

「言ってる。ロケットナックル」

ヒカルは、自身の拳を飛ばす。

と、同時にツカサ君がエレキソードを展開し突っこむ。

いつものコンビプレーだった。

これなら…！

「お前らのデータくらいあんだよ」

そうSRは言い、拳をサンダーボールで相殺し、エレキウォールでツカサ君を防ぐ。

これを待っていた。

「マシンガンストリング」

僕は、鉄の言を飛ばしSRをからめ捕る。

これで完全に動きを防いだ。

「いまだ二人とも」

二人は、頷き互いを背にし、腕を構える。

「ジャミニサンダー！！」

二年前よりも遥か強力な電撃がSRに放たれた。

今、僕のやりたいこと（後書き）

感想待ってます。

白い僕と黒い僕（前書き）

また、ジェミニノイズが出ます。

だって、好きだもんジェミニノイズ

白い僕と黒い僕

「やったか？」

「…いや、まだだよ」

「！」

あの強力な攻撃を食らってもSRは、立っていた。

「中々良い、ビリビリだったぜ。だ・が、こんなんじゃ俺を殺れない」

そう言うだけ言い、サンダーボールを投げってくる。

「フォルテツシモ」

「エレキソード」

僕らは、各々の技で対応するが、状況は決して好ましくない。

いくらダメージを与えてもリカバリーXで回復される。

何か、決定打がないと…

迷っても仕方ない。

時間を稼ごう。

「二人共、時間を稼ぐ。ダブルストーン×3、ボボボム1、アンガーファイヤー」

ストーンを6つランダムに展開して、アンガーファイヤーでボロボムを爆破し、煙を発生する。

僕たちは、各々、素早く岩に身を隠した。

「おゝい。煙で見えねーっての、どこだー」

SRが、ゆっくりと歩き回る音が聞こえる。

SRに、リカバリーXを使わせないように戦闘不能にするには、さっきのジェミニサnderよりも強力な威力の技を使わないといけない…

『見上げる空は 心に』

「うわっ！」

唐突に、ハートウェーブが鳴る。

幸い今ので、こちらの位置はバレてないようだ。

「メールだぜ。どうやら非通知のようだぜ」

「なんでこんな時に…ウオーロック、読んで」

「おう。…ハーブの能力とジェミニの新しい力でSRを討て…だつてよ」

「なんで、このことを…それに僕の力まで…いったい何者からだろ？」

「で、どうすんだ？スバル」

「…信じよう。もうこれしかなさそうだから…」

近くの岩に隠れている二人にソツとアイコンタクトを送る。

コクリ

二人は、了解の意味でうなずいた。

「ゴー！」

合図とともに二人はエレキソードを展開してSRに向けて切り込む。

しかし、SRはWをいなし、WをBにぶつけまとめて蹴り飛ばした。

「今だ！スバル君」

「分かつてる。アブステースルーチェーン」

六つの障害物が碎かれそこからチェーンが、SRに向かって飛び、からめ捕った。

「くっそ、油断した。しかも、むちゃくちゃ丈夫だな。これ」

必死に鎖を切ろうとするSR。

僕はその間にノイズチェンジをする。

「ノイズチェンジ…ジェミニー！」

黄色い光が僕を包み込み、ジェミニノイズが表れるはずだった。

しかし、そこに現れたのは白いジェミニノイズの僕と、黒いジェミニノイズの僕だった。

「…だれ？」

「なんじゃこりゃー……」

黒い僕が、急に叫びだす。

この聞きなれた声は…まさか。

「まさか…ロック？」

「ああ、そうだぜ、スバル。どうやらジェミニの新しい能力は俺がロックマンになるようだな」

「…なんじゃそりゃー……」

今度は、僕が叫びだした。

でも、これで新しいNFBが分かった。

「とりあえず、いくよロック、ツカサ君、ヒカル」

「…ああ（うん）……」

「……（NFB）ダブルジェミニサンダー……」

「！……」

「サンダーウォールッ！」

ジェミニサンダーと、エレキウォールがぶつかり合い、二つのジェミニサンダーがエレキウォールごとSRを飲み込んだ。

白い僕と黒い僕（後書き）

ちよつと強引かな？

感想待ってます

アマちゃん(前書き)

疲れた〜部活。

アマちゃん

二つの電撃がエレキウォール事、SRを飲み込んだ。

「くあ…」

ドサッ

二つのジェミニサンダーをともに食らい、丸焦げになったSRが前のめりに倒れこんだ。

「今度こそやったまいたいだな。ヒカル」

「そうだね」

「それにしてもこの姿には驚いたぜ…ってスバル、何処に行くんだ！」

「えっ？」

僕は、気付くとSRの方に歩み寄っていた。

どうしてだが知らないけど寄らずにはいらなかった。

なんで近づいたんだ僕？そう自問自答しながら僕は、しゃがみ込んだ。

「…ああ、なんだ」

かろうじで喋れるようだが、声はかすれていた。

僕は、首を横に振った。

「特に、用はないよ。ただ、体が勝手に動いていたんだ」

「へっ、オリジナルは、アマちゃんだな。だから弱いんだよ」

かもね、と僕はさびしそうに笑いながらそう肯定した。

確かに、僕はアマちゃんだ。

何もできないアマちゃんだ。

でも…

「それが、スバルの強みでもあるんだぜ」

「ロック…」

後ろからそうロックが言った。

アマちゃんが僕の強みか…

軽くけなされているような気もするけど後ろの二人もうんうん、と首を縦に振っていた。

思わず苦笑する。

どれだけ僕は、アマちゃんと認識されてるんだろ？

「はっ、だからか…俺たちが完全になれないのは…」

「完全？…どういっつた、そりゃ？」

ロックの質問にSRは答えた。

「俺たちはクローンだが、何故か100%のお前になれないらしいな。もしかしたらアマちゃんになれないのも一つの原因かもしれないな…ぐっ」

「SR!」

「はは、どうやらここまでのようだな…じゃ、お前があのにコネー事を祈つといてやるぜ」

SRは、僕の腕の中で電波の塵へと化した。

…なんだろ。この胸に空いた喪失感は？

「おい。スバル」

遠くからダン達の声が聞こえる。

どうやら向こうも終わったようだ。

「大丈夫か…スバル？」

「大丈夫だよ、ダン。それよりもユイが…」

「私なら大丈夫だよ」

いつの間にか復活したユイが僕の傍にいた。

「もう大丈夫なのか、ユイ？」

「うん。その親切な白い電波人間とアクアが面倒見てくれたからね」

一方ロックたちも会話をしていた

「な、ウォーロックなのか、その姿」

「どうだ見違えただろ。オックス、コーヴァース」

「ま、まあーな」

「にしても、姉ちゃんひでぜー」

「？なんでだ？」

「救援を要請したら『シドウが、這ってでも行く』とするから止めるのに精いっぱい』だよ」

「『ははははは』」

「腹減ったな」

…ユイの傷も大したこともないようだし神の雷も消えた。

ライブの途中だけど、見に行けそうだ。

「じゃ、みんな。今からライブを見るに――」

足元が何故か揺ら付いた。

あれ？おかしいな意識が…

ドサッ

前のめりに倒れ、鼻を打ったが不思議と痛みはなかった。

そうわめかなくても大丈夫だよ。ユイ

僕は、何とも…

僕は、そこで意識を手放した。

アマちゃん（後書き）

次回は、何をしようかと迷走中です（笑）

感想待ってます

約束だからね（前書き）

もうすぐでテストか…だるいな

約束だからね

気が付くと僕は見知らぬ場所に立っていた。

そこは、原っぱのようだが、周りの草木は枯れきっている。

「ここはどこだ？」

一人呟いてみる。

………返事はない。

いつもならここでロックの返答が来るのだが、今は来ない。

ハンターV.Gを覗くと、中はもぬけの殻で試しに電話をかけたが誰にも繋がらなかった。

ちょうどその時だった。

近くから、複数の声が聞こえた。

中には、叫び声や唸り声なども聞こえる。

僕は、迷わず声の聞こえる方へと向かった。

そして、そこに居たのは、数々の電波人間達だった。

アシッド・エース、ハープ・ノート、ジャック・コーヴァース、オックス・ファイヤー、クイン・ヴァルゴ、ジェミニ・スパークWB、

アクア・エリ阿斯、メタル・ウォーリアがいた。

他にも見たことのないやつがいる。

2、30体のうす青いアシッド・エースが屍のように倒れていたり、膝を突いたりしていて、その人たちを庇うように紅いアシッド・エースが構えている。

その全員が1ヶ所に視線を集めている。

僕も視線の先を見た。

そこにいたのはロックマンとブライを2で割ったような電波人間だった。

ツンツン髪は、白く、黒を基準としており、ブライ同様他人を全く寄せ付けないオーラがあった。

「ヘルズシツク」

「アンガーパンチ」

何の前触れもなくジャックとゴンタは攻撃を開始する。

「……………」

そいつは無言で、エドギリブレードを二つ展開し、二人を切り裂き簡単ににダウンさせる。

なんなんだこれ!?

「うわああああああ」

バツと体を起こす。

そこは、見知らぬところだった。

壁にオレンジ色が霞みかかっている、テレビが一台あり窓から日差しが差し込んでまぶしかった。

そして、気付くとベッドの上だった。

? どういうことだ。

なんで僕はこんな所に――

「スバル君!!」

途端に、右首に手が回り、突然の出来事に対応できず重心を支えることができずそのまま倒れこんだ。

「…! ミ、ミソラちゃん」

そこには、長い髪の毛をたなびかせた2年前の普段服と一緒のミソラが抱き着いていた。

「え、ちょ、ちょっと、どうしたのミソラちゃん!? 何を――」
「よかった。スバル君無事で…あれから三日三晩眠り続けたんだよ

？」

三日も寝てたのか…

寝不足だったのかな？

「…そうだ、ごめんね。ライブ見に行けなくて…」

「…それは許さない」

「えっ！」

まさかの解答。

どうしよ、どうしたら許してくれるだろ。

…そうだ。あれを

「ええと、その埋め合わせと言ったらなんだけど、今度どこか買い物に行こうか。僕が荷物持ちをするからさ」

「そういう問題じゃないのに…」

「ん、何か言った？」

「うっん、何も。私はそれでいいけど…これからは無茶をしないでね」

「うん。わかった」

「約束だからね」

僕は頷いた。

それにしても、あの夢は一体なんだたんだろ？

約束だからね（後書き）

この夢に出てきた新しいキャラクター達は、そのうち出ます。

l e t ' s ジャンプ (前書き)

今回は、たいして何もしいです。

let'sジャンプ

「「いちゃいちゃしすぎだろ」」

「「!」」

唐突に、病室の入口から聞きなれた声が聞こえる。

振り向くとユイとダンだった。

あ、なんかいやなところを見られたな。

「ヒュー、ヒュー。熱いね、お二人さん」

「あーあ、俺もこんな感じの女の子がほしいよ」

くそ、例のごとく冷やかしに来たな。

「そ、そんなことは…」

「照れるなつて、ミソラちゃん」

「うっ」

「…あのね。スバル」

「ん？何ユイ」

二人が騒いでるのを眺めていると、ユイが柄にもなく真面目な声で言った。

「ねえ、ちょっと聞きたいんだけどさ…」

「？急に改まってどうしたの。頭でも打った？」

「ミソラちゃんとスバルって付き合ってるの？」

「うふあー!!」

ありえない質問に思わず目の前にある机に頭を打ちつける。

痛めた鼻を抑えながら、小声で話す。

「そんなわけないだろ。何処をどう見ればそんな結論になるんだい？」

「だって、さっき…」

不服そうに言うユイ。

さっき？ああ、約束のことか…

「ただの約束だよ」

「？約束。いや、そうじゃなくて——」

「スバル。見舞いに来たぜ」

「ジャック、ゴンタ、キザマロ、それと委員長…」

最後の委員長の方は、少し濁して言う。

うう、やはり気まずいな。

できるだけ委員長と目を合わせないようにしながらもチラチラと様子をつかがう。

向こうは、頬をムツスリと膨らませそっぽを向いている。

本当ならお説教でもされそうなのだが、流石に病院内じゃないようだ

『見上げる空は 心に』

メールだ。誰からだろ？

ハンターV Gを流れるように開き、中身を確認する。

宛先 委員長

件名 後で屋上に来なさい

屋上でお説教してあげるわ。

「屋上ならいいのかよ!？」

魂の叫び。

立ち上がり、入口は封鎖されているので隣の窓に手を掛け、身を乗り出す。

「待て、スバル。ここは」

「もう誰も僕を止められないーーーーー」

そして、一気に窓をけりジャンプする。

鳥のように羽ばたき僕は、大空を舞う。

「……ここ4階だぞ」

「……え？」

そのまま急下降していく僕の体。

しまったあああああああ。

でも、僕には電波変換が

「ロック。電波変換だ、って………いないじゃん」

おお、なんということでしょう。

相棒のピンチに相棒がいません。

空中で、泳ぐように手足をジタバタさせる。

ドサッ（無事木の上に着地成功）

なんとか助かった。

それにしてもちょうどいいところに木があって助かった。

「大丈夫スバル！？（君）」

「あはは、大丈夫だよ。ユイ、ミソラちゃん」

微笑しつつも、木から降りた。

ま、目的の脱出も成功したし、これからどうしようかな。

『見上げる空は 心に』

本日何度目のメールだろ。

そう思い、中身を見る。

ツカサ君からだ。

「何々、話があるから、今すぐ来てくれないかな。
話したいことがあるんだ」

話したいこと？

ヒカルとの和解のことかな？

とりあえず行ってみるか

僕の足は、展望台へと向けて歩き出した。

l e t ' s ジャンプ (後書き)

明日はもう少しストーリーを進めます。

ツカサの旅（前書き）

今回、ツカサを出しますがヒカルは全く出てきません。

ツカサの旅

『展望台』

電波変換のできない僕は、町はずれのコダマ病院から、走って屋上へと向かって走って行った。

「はあ、はあ、はあ… ツカサー君」

僕は、息を弾ませ階段を駆け上がりツカサ君を見つけると目標に向かって駆け出した。

「スバル君…」

「や、来たよ」

軽く手を上げて挨拶する。

それにしたって真剣な表情だ。

一体話ってなんだろう？

「わざわざ来てもらってごめんね。どうしても君に聞いてほしいことがあるんだ」

「構わないよ」

ツカサ君は一呼吸おいて言った。

「僕とヒカルとの和解の旅について聞いてほしいんだ」

「……………」

やっぱり、そうか。

ちょうどいい。僕も気にはなっていたことだ。

僕は、様子をうかがいながらも黙って聞くことにした。

「まず、最初に言うけど僕とヒカルとの和解は失敗したんだ」

「失敗？でも、この前の戦いでヒカルは普通に戦っていたじゃないか？」

「…うん。実はヒカルとある取引をしたんだ」

「取引？」

取引とは、なんだろう？

この時、僕の脳内で警報がガンガン鳴り響いていた。

いやな予感がする。

何故か、この突起の僕の予感は100%あたると確信していた。

「この戦いが終わったら僕の体をヒカルに差し出すって」

「え…」

当たった。

自分でもびつくりしている。

まさか本当に当たるなんて…

「そんなに心配しなくても大丈夫だよ」

ツカサ君は、あどけない表情で笑って見せる。

「で、でも…」

「だから大丈夫だって、別に僕が消えてなくなるわけじゃないんだしね」

そう言つて、もう一度ツカサ君は笑って見せた。

「それに…」

また一呼吸おいてツカサ君は口を開く。

「こうでもしないと、スバル君の力になれないからね」

「ツカサ君…」

僕が口を開こうとした時それをツカサ君は手を上げて制す。

「そんな僕からのお願いなんだけど…」

「お願い？」

「うん。少し待ってくれないかな？もう少しだと思うから」

そう言つて、僕のバックを一点に見る。

「おい、来たぜ」

「ジャック！」

「悪いな、ツカサ。どういうわけかコーヴァースいないんで遅れちゃった」

「いいよ。急にメールを送った僕が悪いから」

遅れたことに詫びを入れるジャックを手を横に振って笑顔で許すツカサ君。

「で、君たちが揃って何をするんだい」

「うん…それが、その」

「えっと、俺たちと」

「？」

二人の口がごによごによと動く。

「僕（俺）達とブラザーになってくれないか（い）？」

「……………くふふふ」

僕は、思わず笑ってしまった。

なんだこんなことか。

答えは、もちろん決まっている。

ハンターを突き出しこう答える。

「ブラザーを結ぼう」

こうして、僕は二人とブラザーを結ぶことになった。

ツカサの旅（後書き）

感想など待ってます。

今日は疲れた。(前書き)

特に何もありません

でも、テスト週間で時たましか更新ができないのでご了承ください。

今日は疲れた。

病院に帰ると、いろんな人に怒られた。

まず、病院の看護婦さん。

年を取ったおばさんや綺麗な若いおねえさんなどに集団で怒られた。

次、同じ病院にいた母さんと偶々見舞いに来ていた天地さん。

がみがみ叱られた。

その次委員長たち。

殺されかけた。

ツカサ君…笑っている

ジャック…苦笑

ゴンタ…牛丼をオックスと一緒に食事

キザマロ…肝を冷やしたんですからねつと説教

ミソラちゃん…約束を破ったのでクレープをおごらさせられることに

ユイとダン…ダブルリアット数十回

委員長…睨みつけられた。

……………。

「ユイ、ダン。表に出ろ!!」

「上等だ! 返り討ちにしてやる!」

「二人ともがんばって」

「ユイもだからね!」

「え? そうなの?」

「… なぐり殺してやりたいっ」

唇をかみしめながら、喋るような感じで僕は、呟いた。

「なら、電波変換で決着をつけようぜ」

「ああ、望むところだ。地球を4回救った力を見せてやる」

僕は、少し距離をとる。

「トランスコード003(014)シューティングスターロック
マン(メタル・ウォーリア)」

各々の電波変換した姿がウェーブロードに向かう……はずだった。

「あれ、僕は電波変換していない… そうですねロックがいないんだ
った」

「なんだ。いねーのかよ。命拾いしたなスバル」

「その言葉、そっくりそのまま返そう」

僕は、ガンのくれあいをしていると

「よ、ジャック。帰ったぜ」

行方不明だった、ハープとコーヴァースが僕の病室に帰ってきた。

ロックを抱えて…

ロックに何があったんだ。

見たところ意識はなく、ただ、ぐったりとしている。

本当に何があったんだろ。

僕は、コーヴァースの方に視線を向ける。

コーヴァースは、少し言いにくそうにしていたが諦めたようにため息をふき、さっきロックにあったことを述べた。

「いやな、ウォーロックちゃんとハーブが、どこかに行こうとしてたんで見に行っていたんだよ。で、ほんの少しだけ目を離したらロックがこうなっていたんだ。

本当に、何があったんだろ？

「そういえばさ、スバル君の退院はいつなの？」

ミソラちゃんが空気を換えようと話題を振る。

「ああ、もう。今日の夜には帰れるらしいよ」

「そうなんだ」

僕らは、そのあと他愛のない雑談をして、空が夕暮れに染まりつつあるとき、そろそろお開きにしようかとなった。

お大事になど言い、みんなが帰っていく時、急にダンが振り向いた。

「スバル。SPGMは極力使うな」

「なんで？」

「何でもだ」

それだけを言い残しダンも帰った。

SPGMをつかうな？

体力の消耗が激しいからかな？

疑問に思いつつも急に睡魔に襲われた。

今日は、走ったりしたからかな？

体が疲れてるな。

「少し眠るとするか…」

横になりまぶたを閉じて、意識を手放すのにそう時間はかからなかった。

今日は疲れた。（後書き）

ユニークアクセス総合5位。

皆さんのおかげです。

ありがとうございます。

感想待ってます

早起き（前書き）

やばい段々とネタがなくなってきた。

早起

チチチチ、と鳥のさえずりが聞こえる。

まだ寝ていたいという希望と裏腹に体は覚せいを促していた。

「…スバル君。起きて」

鳥のさえずり声と一緒に最近聞きなれた声が聞こえる。

ああ、この声はミソラちゃんか…

「ん〜、もうちょっと寝かせて」

「え？でも、今日は…」

半分寝ぼけている僕の言葉に耳を貸してくれるなんて「私ももうちょっとスバル君の顔を見ていたいし…」優しいなあ。

「でも、今日は学校で…」

「うーん、後12時間」

「それ絶対学校、遅刻するよ!？」

そう言っ僕を遠慮がちに揺らすミソラちゃん。

だが、その行為は僕にとっては程よい揺れで、ただの揺りかごではない。

「起きないと——」

「委員長にどやされるぜ」

「早起きは気持ちいいね！」

一瞬で、覚醒し寝癖まで直した。

完全に忘れてた。

ふっと時計に目をやる。

…うん。まだ6時半だ。

これならまだ十分委員長から逃げ出せる。

「ミソラちゃん。朝ごはん食べた？」

「ううん。まだだけど」

「じゃ、一緒に食べようか」

そう言い僕らは下へと降りていく。

最近、こんな感じの朝を過ごしている。

朝早く起きるのははつきり言っつらいけど、こんなかわいい子に起こされるなら悪い気はしないよね。

そう言い目の前に用意された朝食はトースト、イチゴジャム、スクランブルエッグ、コーヒーだ。

余談だが、ミソラちゃんは料理ができる。

しかも、とてもおいしい。

きっと、将来はいいお嫁さんになるんだろうな。

ちらっと思いつつも目の前の朝食を平らげる。

「ごちそう様」

僕は、手を合わせて言い、食器を食器洗い機に容れて、部屋へ向かおうとする。

「あ、そうだ」

一つ思い出した。

僕は、振り向きまだ食事中のミソラちゃんに向けて言う。

「今週の日曜日空いてる？」

「え、うん。あいてるけど…」

「じゃ、今度買い物に行こうか。もちろん、ミソラちゃんさえよければだけど」

「え、えええええ」

突然、大声を出すミソラちゃん。

何を突然驚いたのသူ？

「え、っとその、いいよ」

最後の方につれ声が小さくなっていったが、了承してもらった。

忘れないようにハンターV.Gに書き込んでおこう。

記入が完了し、僕は、自室へと駆け上がる。

そこで、学ランに着替え下へと降りた。

もう下には、ミソラちゃんはいず、代わりにロックがソファでぐったりと座っていた。

「ロックも昨日は大変だったね」

「…ああ」

あ、やばい。目が虚ろだ。

そんなに、ハープとのデートがきつかったのだろうか。

「誰が、デートだ。あんなもの………」

ブルブルブルブル（突然急に震えだすロック）

………もうこれ以上この件に関しては黙っておこう。

「スバル君。お待たせ」

セーラ服姿のミソラちゃんが下りてきた。

女の子は、準備するのに時間がかかるな

時計を見ると7時30分を回っていた。

そろそろ行くか…

鞆を持ちドアに手を掛けようとした時

ピンポーン

僕の体は、反射レベルで、防衛体制へと移った。

早起き（後書き）

感想待ってます

裏切られたあああ

ピンポン

再度チャイムが鳴らされる。

僕は、あきらめるようにドアに手を掛け、カギを回す。

大丈夫だ。

まだ委員長と決まったわけじゃない。

「そうだぜスバル」

「ロック！」

ウィザードオンし、ロックが出てくる。

「俺もそろそろ弱点を克服しねーとな」

と言ってファイティングポーズをとるロック。

わずかに期待しつつもドアを勢いよく開けた。

ズズズズズ（委員長の怒りで大気が震えている）

ブルブルブル（その後ろでキザマロが青い顔で震えている）

「ロックガード」「スバルバリアー」

互いに互いを生贄にささげようとする僕ら。

「「やんのか!?!」」

互いに胸ぐらをつかみあうのを――

「おやめなさい!二人とも」

「「はい、すみません」」

――委員長の制止の一言で僕らは、息をぴったりにして謝る。

ダメだ。恐怖で体が勝手に…

「さて、今までよくも逃げてくれたわね。訳でも聞かせてもらおうかしら」

あ、だめだ。僕の警戒レベルがレッドゾーンに突入した。

「ロック。電波変換だ!」

「分かってる!」

僕は、ロックマンとなりウエーブロードへと逃げ込む。

そこで、僕は何かおかしいと思ったが、気のせいだと思いそのまま学校に向かうことにした。

少し、広いところに出た時だった。

「「殺気!」」

とっさに受け身も考えず横跳びを決める。

僕の元いた位置赤い何かが通り過ぎた。

あれは…

「ゴンタ！」

僕の正面には、ゴンタが立ちふさがるように立つ。

「俺もいるぜ」

横から紫炎の拳が飛んでくる。

「バトルカード バリア」

バリアで防ぎ僕は、支援の拳が飛んできた方向を見る。

「ジャック君まで…」

「僕らもいるよ」

そこには。ツカサ君とヒカルもいた。

気付くと僕は道を塞がれ囲まれていた。

前にオックス・ファイヤ。

後ろにジャック・コーヴァース。

右にジャミニ・スパークW。

左にジャミニ・スパークB。

…これが四面楚歌という奴か。

「なんでだい！みんな。僕らはブラザーだろ！？」

「すまねえ。スバル」

「…断つたら、殺される勢いだっただ」

「ゴンタはともかく、ジャック！君は一度地球をつぶそうと考えていたよね！？それを一中学生のさっきに負けるなんておかしくないかい！？てか、ツカサ君も脅されたのかい」

ツカサ君の性格を考えるとまずそれはない。

どんな解答か、期待してみると

「「おもしろそうだったから」」

「ツカサっくん！？」

最悪だ。

てか、ツカサ君僕の力になりたいって言うていたよね！

こうして裏切りというガチンコバトルという火ぶたは切って落とされた。

裏切られたあああ
(後書き)

感想待ってます

あ、死んだな。僕（前書き）

だいぶ投稿しなくて申し訳ありませんでした。

次からは、もっと早くします。

あ、死んだな。僕

「ロケットナックル」

拳が前後から僕に放たれる。

ジャンプして避け、拳は互いにぶつかり合い相殺された。

「やめるんだ、みんな！こんなことをしても意味はない！」
「うるせえ。こっちは命がかかってんだ」

ジャックは飛び上がり空中で無防備な僕に一蹴りいれる。

蹴りは、鳩尾ちへと入り、そのまま体が重力に引き込まれていく。

「アングーパーンチ！」

そこに待ち構えていたゴンタが僕にパンチを叩き込み、数メートル吹っ飛ばされた。

「ぐっか…はあはあはあ」

（しょうがない。最後の切り札だ）

「バトルカード」

「なんだ。何がくるんだ？」

「ツカサ気をつけろ」

「ヒカルもね」

「バトルカード インビジブル」

「……な、なにイイイイ」「……」

姿を消し全速力で学校へと走った。

インビジブルが消えるころには、僕は屋上へと到着し、電波変換を解いた。

「あいつらひでーな」

「だよな」

一息し、この後どうするかを考えていると殺気がビンビン伝わってきた。

「ほおおしいいかああわあくうん？」

あ、死んだな僕。

ゆっくりと後ろを振り向く。

そこには、怒りのあまりか般若の形相を浮かべる委員長。

もう一度言いたい。

あ、死んだな僕。

「はい。なんでしょうか？」

「覚悟はできてるかしら？」

「ごめんなさい。ごめんなさい。本当にごめんなさい」

ドンドン、と頭を地面に打ち付けて反省の色を見せる。

頭を伏せていてもわかる。

鬼の怒りは一向に止まないということが。

仕方ない。こうなったらまた逃げるか。

一度立ち上がり正面を見据える。

「おい、スバル根げられる算段はあるのか!？」

「勿論、あるに決まっているだろ」

「本当かよ」

「ま、任せときなつて」

自分の胸をドン、と叩き胸を張って見せる。

思った通り、鬼は許すどころかだんだん表情が鬼の顔へと変わっていくのがわかる。

「あ、あんな所に空飛ぶ猫が…」

「黙りなさい」

一蹴された。

「あれ、おかしいな？僕の計画じゃ委員長が振り向いてその内に逃げ出すはずだったのに…？ロック何がダメだったのかな？」

「頭だ」

ひどい。

「さー、さっきの続きをしようかしらね。ほおおしいいかああわあくくん?」

「いえ、結構です。……………本当に」

一歩ずつ、一歩ずつ、近づいてくる委員長に今までにない恐怖感を覚えた。

だめだ。次こそ殺される…

覚悟を決め目を閉じた時救いの女神が降臨した。

「スバル君? ルナちゃん? 何してるの?」

すぐ傍からミソラちゃんは不思議そうな顔をして尋ねた。

あ、死んだな。僕（後書き）

感想待ってます。

ラッキースケベ？（前書き）

最近更新ペースが遅いな。

もっと、下書きを早くしよ。

ラッキースケベ？

「二人は何をしてるの」

突然の出現に驚いてしまい、固まっている僕らにもう一度ミソラちゃんに聞いた。

「えっと」

言葉に詰まる。

なんて説明をすればいいんだろ。

そう僕が迷っているとき委員長は躊躇なく言った。

「お説教中よ」

嘘つき。今の僕は殺されそうな勢いなんだけど。

そう口を動かそうとした時、言葉を失った。

（見える…委員長からどす黒いオーラみたいなのが。今喋ったら何されるかわかんない）

ついでに、足も震えてきた。

「そうなんだ。スバル君は何をしたの？」

「私を避けていたのよ。だから、朝早く登校していたの」
「そうなんだ」

ミソラちゃんは、委員長のオーラが見えてないのかいつも道理に話している。

僕は、この後の会話の流れを予想してみた。

『あ、だからスバル君は早く起きてさっさと登校しようって言うんだ』

『一緒に登校？　そういえばミソラちゃん。あなたはどこに住んでいるの？』

『スバル君の家だよ』

『星川君。お説教の時間…倍ね』

「僕の死は、免れない！」

「あ、だから——」

「ミソラちゃん。ストップ！」

立ち上がり、５メートル先にいるミソラちゃんへとダッシュする。

その時、僕は焦っていたのだと思う。

焦りすぎて、焦りすぎて、焦りすぎた結果。

石につまずいてしまった。

この時点では、まだいいのだがこの後大変な事になってしまった。

「えっ」

僕の頬に柔らかい何かに押し付けられた。

あれこれって。

この感触は、昔どこかで感じたことがある。

あれは、確か僕がまだ小さい頃、秋原町に住んでいた時のことだったはず……

僕は、思い出した時、顔が紅潮しているのが分かった。

まさか、キスをされちゃった！

いや、これは、僕から突っ込んだからキスをされに行っただけ……

でも、結局キスという事実は変わらないのか。

お、落ち着け。

一旦周りを見る僕。

僕は、視線を周りへと変える。

「じゃあな。スバル。来世でまた会おうぜ」（合掌しているロック）
「あらら、スバル君やってしまったわね」（楽しそうに笑うハーブ）
「ス、スバル君。なんてことを」（生まれたての小鹿より震えているキザマロ）

「○× ■ ▲ ○□」（地球の言語を使わなくなってしまうた鬼もとい委員長）

「……………」（頬を紅潮させているミソラちゃん）

「良い物撮ったな」
「だね」

なぜか、写真を片手にダンとユイがいた。

.....

「僕だけじゃ突っ込みきれない!!」

なんでこの二人がいるの!

とにかく、写真を取り返さない!

「ユイ、ダン。写真を……ってもういないのかよ!」

代わりに、置手紙で『写真、ネットにアップしとくね』と書いてあった。

その写真が、公表されたらまず僕は、真っ先にミソラちゃんのファ
ンに殺されるだろう。

キンコーンカーンコーン×4

ちょうどいいタイミングでチャイムが鳴った。

「あ、HRが始まっちゃう。早く行かないと」

僕は、そう言い足早と二人を置いて逃げた。

その後、HR中に「覚悟しておきなさい」というメールが17通も
来た。

ラッキースケベ？（後書き）

感想待ってます。

部活動編？（前書き）

今回から数話だけ部活の話にします。

あまり長くはありませんがご了承ください。

部活動編？

通常視点

現在 8 時 4 0 分。

H R が始まり、仲のいい友達と喋っていた生徒たちは席に着き、居眠りを決め込んでいた天真先生は、目を眠たそうに開け大きく欠伸をし、全員が着席したのを確認すると大きな声でハッキリと言った。

「皆も知っていると思うが、今日は転校生が来るぞ。入れ二人共」

ガラガラ、の音と共に二人の男の子が現れる。

「双葉ツカサだよ。知っている人もそうでない人もこの一年よろしくね」

「ジャックだ。前は迷惑かけたが今は改心した。一年間よろしく頼

む」

ツカサとジャックが、今日から学校に来ることになった。

ジャックは、4月から来ていたのだが引越しの準備などで忙しく終わったのは、4月の半ばくらいだったので、月の初めの方が色々都合が良いということで5月になってからはいることになった。

一同の歓迎の拍手がクラスから溢れ出た。

歓迎してくれたことにほっとした二人は、空いている席に適当に座った。

「ほら、お前ら静かにしろ。今日の連絡事項をするぞ」

その言葉を聞くと同時にピタと教室は静かになる。

そう、今日は中学一年生が楽しみにしていた……

「本日、コダマ中はクラブ体験を開始する。各自、昨日渡されたプリントの時間帯と場所を見て行動するように……以上」

そう言い残すと天真先生は足早と教室を後にした。

と、同時にドツと歓声に近い騒ぎが教室に沸騰する。

生徒たちは、次々に立ち上がり仲の良い友達同士で、固まり「どこに行く?」「俺は野球部に行く」など会話を繰り広げながらプリントを片手に教室を後にする。

だが、一方スバルの方は

（まだ、顔が赤い…）

先程の出来事が未だに映像として頭の中で鮮明に残っていた。

（ミソラちゃん、驚いた顔をしていたな…うつ、絶対怒っているよ。どうしよう）

スバルは、紅潮した顔を隣にいるミソラ見せまいと顔を机にうつ伏した。

ミソラもまた

（まだ鼓動が止まらないよ…ドキドキしてる）

自分の胸に手を当て、スバル同様、顔を紅潮させていた。

「二人共どうしたんだろ？」

「そうだな。なあ、キザマロあいつらどうしたんだ？」

「え、僕ですか！？えっと、その、はあ」

「？」

「メロンパンうめえ」

口ごもるキザマロを見て、二人は？を浮かべる。

中々答えそうになかったので仕方なく二人は視線を周りに移す。

互いを見ないようにしているスバルとミソラ。

ムスツとしている委員長。

購買で買ったアンパンを頬張っているゴンタ。

.....

「「分からない...!!」」

「いや、今明らかに不必要な判断材料が混ざっていたよな！」

コーヴァースが、頭を抱えている二人に突っ込む。

「はあ、仕方ないわね。私が教えてあげるわ」

「「「ハープ」」」

いつの間にかハープが出現していた。

「スバル君が、こけてその勢いでスバル君の頬がミソラの唇に当たったのよ」

「「「成程」」」

二人と一体は、ポンと手を叩き納得の表情を浮かべた。

「ス、スバル君」

「！な、何かな。ミソラちゃん」

ビクッと一瞬体をはねたスバルは、ぎこちなく首をミソラの方に向けた。

ミソラは、少し戸惑いながらも聞こえるように言った。

「一緒に、クラブ見学、回ってほしいな…ダメ…かな？」

「……………僕でよかったら、いいよ」

少し戸惑いを覚えたスバルだが、了承し二人は教室を出た。

部活動編？（後書き）

さて、スバルたちに何をさせようかな。

感想を待ってます。

部活動編？（前書き）

今回は新キャラを出します。

これは、前に募集したやつとは違うやつです。

部活動編？

スバル視点

あれから僕らは、教室を出て少し廊下を歩きながら次に行く場所を相談していた。

「次どこに回ろうか？」

「んゝそうだね。スバル君はどこがいいの？」

二人で事前に貰ったプリントを覗きながら次の場所を決める。

僕もミソラちゃんも、自分の興味のある所にはあらかじめ行っており時間を持て余していた。

（それにしても…）

視線をミソラちゃんに移す。

彼女はどことなく嬉しそうにプリントを見ている。

フツとある疑問が脳裏をよぎった。

どうして彼女は僕と二人で回りたかったのだろうと。

いくら考えても分からない。

「スバル君？」

ミソラちゃんが僕の顔を心配そうに覗きこむ。

「いや、大丈夫——」

夫だよ、と言おうとした時、言葉に詰まる。

本当に僕は大丈夫なのだろうか？

ミソラちゃんと視線が重なる。

吸い込まれるようなきれいな瞳だった。

…あれ？……ミソラちゃんってこんなにきれ——

「そこのお二人さん」

「え？」

ノリのいい、悪く言えば軽い感じ、陽気な声に我に返る。

玄関の方に目を移すと、そこには、赤いジャージを身にまとった。
僕より少し大きい男の人が居た。

赤ジャージということは3年生か…。

「そんなに警戒するなって」

親指を立て、自分を差す先輩。

「俺の名前は、早崎シンだ。シンでいいぜ。これでも陸上部の部長をしてんだ」

さつきと変わらない陽気な声で言う。

「1-Aの響ミソラです」

「同じく星川スバルです」

僕らも自分を自己紹介する。

「ああ、知ってるよ。だから声をかけたんだ」

知ってる？ミソラちゃんとはもかくなんで僕の事も…

「だから警戒するなって。これは先生に聞いたただだから」

「先生ですか？…それって」

「察しの通り、天真先生に聞いたのさ」

やっぱり。僕らのスポーツテストの結果を知っている人なんて担任のあの人しかない。

「で、二人に声をかけたのは他でもない。50m走学年トップクラスの二人に陸上部の見学に来てもらいたい」

つまり、遠まわしで陸上部に入らないか、と誘っているようだ。

うん。別に断る理由がないからな！。

（どうする。ミソラちゃん？）

（特に行くところないし…）

チラッとシン先輩を見る。

笑顔を貼り付けてで期待をするような目で、僕らを見つめるシン先輩。

大きく頷いてはっきりと告げた。

「分かりました。行きます」

「じゃ、私も行きます」

「OK。じゃ、着いてきてくれ」

嬉しそうにシン先輩は、笑い僕らはグラウンドへと赴いた。

「あ、やべ。あと五分でクラブ始まる」

「え」

部活動編？（後書き）

感想や分かりづらいところがあれば遠慮無く言ってください。

待ってます。

部活動編？（前書き）

今回も新キャラが出ます。

正直この後の展開どうしようか悩んでいます。

どうしよう

部活動編？

走って行くこと数分。

僕は、普段通ってる校門からの真逆の位置に向かっていた。

「さ、着いたぜ」

「ここは…！」

案内されて来てみるとそこはドームのような場所だった。

ドーム状のような建物はそれなりに大きく、少しだけ何かが胸を熱くした。

「大きいですね」

ミソラちゃんが、驚きの表情を示している。

僕も隣でうんうん、と頷く。

それにしてもなんでこんなものがあるんだろう？

「お、不思議に思ってたんだろ？」

ニヤついた表情で、得意そうに僕の疑問に答えてくれた。

「コダマ中は代々陸上部が強くてな。十年連続全国優勝を決めて記念に学校が雨天練習場を立ててくれたんだ」

コンコン、とコンクリートを叩いて見せるシン先輩。

何故か、無駄に様になっていた。

これが、3年生の貫録っていう奴か。

「じゃ、入るか」

シン先輩が扉に手を掛けた時だった。

「ちょっと、シン！あんた遅いわよ。もうみんなとつくにアップも終わらせているわよ！」

扉が急に開かれ、扉の前にいたシン先輩は勢いよく扉に鼻を打ちつけ倒れこんだ。

「いててて。おい、ルカ！痛てえだろ！」

「あ、居たんだ、シン」

「てめー。覚えてろよ」

「忘れた」

「……くっそー……」

ルカと呼ばれた女の人是对して詫びも入れずシン先輩に一瞥をくれ僕たちの方に向いた。

顔立ちは綺麗で髪は茶髪のボブで気の強そうな顔をしていた。

「私は、3年の笹江ルカよ。ルカでよろしく」

「1-A 星河スバルです」

「同じく響ミソラです」

僕は軽く会釈した。

それにしても何というか本当に綺麗な人だな。

「先輩とは、どういう関係なんですか？」

僕は、シン先輩に問う。

シン先輩は、打った鼻を摩りながら答えてくれた。

「こいつとは、幼稚園からの腐れ縁で、一般的には幼馴染って呼ばれる存在だな」

「いつまで寝そべってんの。ほら起きなよ」

ルカ先輩はシン先輩に手を差し伸べる。

顔をうつ伏せてシン先輩は手を借りた。

ほんの少し赤くなったような気がしたけど気のせいかな？

「さて、と入るよね。練習場へ」

ルカ先輩は当然のように聞く。

目も合わせず同時に行った。

「はい」

ここまで、来たら当然行くしかない。

行かなきゃ、今まで歩いたのが無駄になる。

それに…

「面白そうですね。陸上部」

「だろ。実際結構面白いぜ。陸上は」

僕らに目配りをすると、扉に手を掛けた。

ギシ、と思い音がした。

扉が徐々に開かれていく扉。

と、同時に流れ込んでくる風。

鼓動が早く、胸が熱くなってきた。

きっとミソラちゃんも同じだろう。

ああ、一体どんな場所なのだろう？

再度自分の鼓動を感じる。

そして、扉は開かれた。

部活動編？（後書き）

前の話で部活動編が部活編になってましたすみません。

感想など下さるだけでとてもうれしいのでぜひ感想をください

部活動編？（前書き）

最近、まったくストーリーが進む気しません。

でも、何とかするので応援してください。

部活動編？

「さー、何か感想はあるか？」

「「すごい」「

思わず息をのんだ。

僕らの目に入ってきたのは、赤色に近い色を施されたオールウエザーと呼ばれるトラックだった。

周りを見ると砂場があったり、高跳び用のマットなどがある。

子供のように目を輝かせて見ていると

「お、来たか。星河、響」

「え、先生…なんでここに」

声の主は天真先生だった。

「え、先生は陸上部の顧問なんですか？」

「ああ、そうだ」

「僕知らなかったよ」

「私も」

がははは、と先生は豪快に笑って見せた。

「シンは今すぐアップをしに行け8分も過ぎているぞ」
「わ、いっけね。じゃ、しっかり見て行けよ」

僕らを指さしそのまま立ち去った。

「アンタら。見学者はあっちにあるパイプ椅子に座ってな」

ルカ先輩はそう言つて向こうの方にあるパイプ椅子を指し示す。

僕らは、用意されたパイプ椅子に座ると他にも人が居ることに気付いた。

そのうち二人知り合いがいた。

「お、スバルたちも来てたのか」

「奇遇だね。ジャック君、ツカサ君」

ジャックとツカサ君がいた。

二人も来ていたようだ。

「スバル君たちも誘われてきたの？」

「うん、そうだけど…ツカサ君達も？」

「俺たちはあの先輩から誘われたのさ」

ジャックは、顎の動きでルカ先輩と教える。

「そっか。私達もシン先輩に誘われたんだ」

ミソラちゃんもジョグをしているシン先輩を指さす。

「そつえば…」

ツカサ君は、思い出したようにルカ先輩の方を見る。

その視線に気付いたルカ先輩は、何？と返した。

「先輩は走らないんですか？」

ツカサ君は極々普通の質問をした。

僕らもそう思ったはずだ。

なのに、ルカ先輩は苦虫をすりつぶしたような表情を浮かべる。

何やら聞いてはならないことを聞いてしまったようだ。

とても居心地の悪い空気が流れる。

すると、一度ため息をついてルカ先輩は少しばつの悪そうに訳を説明する。

「私は、4月の春先に練習で足を怪我、してしまったんだ」

衝撃のカミングアウトに僕らは声もできなかった。

ツカサ君の表情が徐々に苦しいものになっていく。

きつと、聞いてはいけないことを聞いてしまった後悔をしているんだろう。

「それで一年間は走られなくなっちゃてさ…一度はやめようと思ったんだけどね」

ルカ先輩は仕方なさそうにさびしく笑う。

「すみません。僕…」

「いいよ。私は気にしてないから」

頭を下げるツカサ君を制止するルカ先輩は優しさを感じた。

「でも、シンが『やめんなよ、陸上部。お前がいないと面白くなるぞ』って言うてくれてさ。だから、私はマネーじゃなかったって訳」

ふと、ルカ先輩の視線が仲間たちと一緒に練習をしているシン先輩に向けられた。

その表情は、安らぎの表情だった。

部活動編？（後書き）

次からストーリーを進めたいと思います。

何でもよいので感想など下さい。

新しい小説を始めました。

題名はチェンジです。

ぜひ読んでください。

感想待ってます。

部活動編？（前書き）

そろそろ路部活動編を終わらせたいと思います。

1／2 話位を予定中

部活動編？

通常視点

あの後、ルカは仕事があるからと言ってどこかへと行った。

残されたスバル達は、本来の目的のクラブ見学をすることにした。

しかし、ツカサは先程から一言もしゃべっておらず口を噤んだままだった。

先程のことをまだ気にしているツカサの気分は気鬱だった。

どうして自分はアンナ軽率なことを言ってしまったのだろう、と。

スバル達も心配はしたがなんと声を掛ければいいかわからなかった。

「あれ？ルカ先輩居ないですね」

所変わって、シンは100m流しを済まして、水分補給をしている所に弟のような存在の後輩、レイがシンにルカの居場所を聞いた。

大方、いつも一緒にいる俺ならルカの居場所を知っているという考えか、シンはレイの考えを読みその質問に答えた。

「ルカなら部室だろ。確かスケジュールの管理をするって言ってたぜ」

「あ、そうなんですか」

レイは残念そうに言い、シンの元から離れっていた。

シンは知っていた。

レイがルカのことを好きだということを。

ルカは、面倒見が良く何より外見も中身もいいのだ。

そんな女の子を男達がほっとく訳が無く週に一回ペースで告られていった。

だが、結果は全滅。

年下や年上、どんなにかっこいい奴でもすべてこの決まり文句で断られた。

「私、今。陸上の方が大切だから」

と…

実はシンもそんな中に入っていたりする。

中学に上がった頃、ある日の休みの日にルカが上級生に自分と付き合うように、と強要された時、たまたま通りかかったシンがそれを助けに行った。

だが、向こうは3年生で、喧嘩は強くシンが勝てるはずがなかった。

だが、シンは一瞬の隙をついてルカの手を引き駆け出した。

なんとか巻いて二人は、二人つきりになった。

「どうして、こんなになるまで…」

「ん、ああ。別にただほかの男にお前を取られなくなかった。…そんなだけだよ」

「え……！」

「好きだ。ルカ」

今思えばその場の勢いだけで言ったのかもしれないと今でもシンは思っている。

しかしルカは

「ごめん」

と、ただ一言でシンを振った。

それ以来シンはルカに告白しようとは、思わなくなった。

だから、シンは弟分のレイの恋を応援しようとは思っていた。

だが、何故か素直に応援ができない。

よく、考えればわかる気がしたが深く考えるのが苦手なシンはすぐに考えるのをやめる。

「おーい。今から種目練をやるから各自、パート長のところに集ま
つてくれ」

『はーい』

そうして、シンは練習に集中するのだった。

そのころスバルは…

「ジャックは、クラブどうするの？」

「んー、まだ決めてねえーからな」

「ミソラちゃんは？」

「私もまだ決めてないな」

どのクラブに入るか相談していた。

部活動編？（後書き）

感想待ってます

部活動編？（前書き）

部活動編で書いたのにあまり部活の描写ができませんでした。

ごめんなさい。

部活動編？

スバル視点

「やっぱり、僕…謝りに行くよ」

ツカサ君は唐突に言った。

「じゃ、シン先輩にルカ先輩の場所を聞きなよ。きっと知っているからさ」

「うん。行ってくるよ」

ツカサ君はそう言ってシン先輩の元へと駆け出した。

シン視点

「シン先輩！」

練習も終盤に差し掛かった時、不意に俺の名を呼ぶ声に体を動かした。

「えーと、双葉ツカサだよな？」

「はい」

ツカサは俺が見る限りかなり切羽詰っている感じで自分より背の高い俺を見上げるように言う。

「ルカ先輩…今どこにいるかわかります？」

……………え？

この時俺は、先程の考えてた時のこともあり頭の中には一つの方程式ができていた。

男に人気のあるルカ＋真剣な眼差しでルカの場所を聞いてくるかわいいい後輩〓ルカに告りに行こうとしている。

「…わかった。ルカは今、部室でスケジュールの調整をしている。地図で言うところだ」

「…ありがとうございます」

「頑張れよ」

「！」

一瞬ツカサの顔が驚きに変わったが、身を翻しツカサは走り出した。

「……………」

複雑だね。俺の気持ち。

少し呆けた後、練習に戻った。

ツカサ視点

（おいツカサ。あの女のところに行くのか？）

（うん。やっぱりちゃんと謝らないと）

走っていると、今まで眠っていたツカサが急に話しかけてきたので質問に答える。

（…よく分からないぜ。お前の考えは）

（そうかな？ヒカルだって分かっているだろ？だって、君は僕だからね）

（ふん、俺はもう少し寝るぜ）

（ふふふ）

ヒカルは不機嫌そうに鼻を鳴らしそのまま眠った。

それからしばらく走った時だった。

部室と思われしき建物が見えた時だった。

「あれが部——」

ポオ！

室、と言おうとした時、急に部室が炎上した。

思考が停止しかけたがなんとか保ち部室のほうに近づく。

すでに建物は炎上しており、手に負えそうになかった。

（くそ。なんでだ）

（…おい、ツカサ。こいつはウイルスだ）

（え？本当に）

（ああ、今なら間に合うかしんないぞ）

「よし。トランスコード008ジェミニ――」

「ルカ！ツカサ！」

スパーク、と言おうとしたがやめた。

なぜなら、シン先輩が来たのだ。

「お、ツカサ大丈夫だったのか。ルカは！？」

「まだ中に…」

今のシン先輩にはいつもの陽気な感じの声は無く、焦りそのものだった。

「ツカ、今すぐ消防車を呼べ。俺はルカを助けに行く」

「え、ちよつと先輩！？」

僕の制止の声も無視して先輩は部室の近くまで行った。

「あ、スバル君。今すぐ助けに来てほしいんだ。消防車も呼んで。訳は後で話すから」

スバル君達に連絡も入れ、僕は電波変換をした。

スバル視点

ウェーブロードでは、炎系統のウイルスでいっぱいだった。

ミソラちゃん、ジャック、さっき合流したゴンタと共にウイルスを掃除していた。

「こいつはすげー数だぜ」

「確かにこれじゃ、ツカサのところにもいけねーぜ」

「僕も、ノイズチェンジする暇もないよ」

それぞれが迫りくる敵を倒すのにせいっぱいだった。

「…スバル君は行つて」

「え？ミソラちゃん？」

「私たちが道を作るから早くツカサ君のところに行つてあげて」

「…分かったよ」

「…いくぜ」

三人は一度ためを作り前方に攻撃した。

「マシンガンストリング」

「ダークフェニックス」

「フレイムプレス」

三人の技で道ができ僕は全力で駆け抜けた。

「行ってくるよ…ツカサ君を助けに」

部活動編？（後書き）

感想待ってます。

チェンジ！も更新しました。どうぞお読みください。

部活動編？（前書き）

もつそろそろこの話を終わらせます。

って結局部活動編終わってねー

部活動編？

通常視点

シンは、改めて部室だった物を見つめる。

部室はゴォゴォと燃えており、その激しさは増すばかりだった。

だが、迷わずシンはドアノブに手を掛けた。

そこに、ルカがいるなら炎だろうとなんだろうと関係なくシンの手は動いた。

「アツッ」

だが、熱さのあまり反射で手を離し退いた。

シンは驚愕する。

自分の握っていたドアノブが高温のあまりに原形をとどめていないことに…

しかし、シンはまたドアノブに手を掛けた。

ハッキリと自分でも分かっているはずだ。

ただでは済まないと

それでもシンは迷わずドアノブに手を掛ける。

「……！」

ジュー、と肉が焼ける音が炎の轟音と混ざって聞こえる。

さつきよりはつきりシンの手に伝わる。

熱が

常人では耐えうることでできない熱がシンの手から伝わっていく。

思わず反射してしまいそうになるがシンは自分の意志でそれを抑え込む。

代償としてほんの数秒握ってただけで、シンの手の感覚はなくなっていた。

シンは自分に自問自答をする。

ル力を守りたい？

…YES

そのためには、自分のことなどどうでもいい？

…YES

これ以上自分に嘘をつけない？

…ああ、これ以上自分に嘘をつけない。

自分の気持ちに…！

「うおおおおおお！」

腹から絞り出すように声を出し、ドアノブを傾ける。

徐々に開かれていく扉。

だが、あとちょっと、もう少しのところで回せない。

回れよ。回せよ。回れって言ってんだろがああああ

ガシャン

開いた。

扉が開き、部室の中が外の世界に解放される。

中では、炎を避けるために壁を背にしているルカがいた。

「ルカ！」

「！シン？」

咄嗟にシンは、ルカの名を呼ぶ。

ルカは、驚愕の表情を浮かべるが、同時に嬉しそうに笑う。

「こっちにこい、ルカ！」

シンが、手を差しのばす。

ルカも手を伸ばした。

その時だった。

ガクシャン

嫌な音が天井からした。

瞬時に二人は悟った。

天井が崩れたのだと

シンは、できる限り手を伸ばし空を掴むようにしてバックステップをした。

その時、頭を打ち付けてしまいシンの意識は沈んでいった。

「ウェーブロード」

「クフフ、誰かが傷つけばお前は来るのだからな！さ、今度こそ私の脚本通りに動けロックマン！」

黒いタキシードのような物を着た電波人間がふわふわと浮いていた。

それには、あまりにも残忍で人を馬鹿にしたような笑いを張り付けて

「ロケットナックル」

「！」

黒色の拳が、タキシードの電波人間を襲う。

「エレキソード」

怯んだすきに電気のソードで背中を切り付け、蹴り飛ばす。

「お、お前は!?!」

タキシード男…ブラック・ファントム自身の敵を見据える。

「俺らか?」

「僕らはね…?」

一呼吸おいて二体は言う。

「「ジエミニ・スパークだ!!!」」

部活動編？（後書き）

次、スバルたちが旅行するのですが場所などはまだ決めていません。

あと、3〜4くらいで決めるのでここがいいなど、こんな感じのところがいいなどの希望がございましたらどんどん言ってください。

例1：南の国がいい 例2ヤエバリゾートがいい

とま、こんな感じで待ってます。

感想も待ってます。

部活動編？（前書き）

もうしばらく続くな、部活動編。

部活動編？

現実世界では

「――？ン、起きて」

「.....」

「――？起きてってば」

「.....」

「――おきろってば！」

ボカ！

「痛っ」

ル力は、気絶していたシンを起こそうとしシンの頭を殴りつけた。

おかげで、シンは目を覚ますことができたが代わりに頭に尋常じゃない痛みを感じた。

「シン。大丈夫？」

「言いたいことがあるが、今は許してやる」

シンは、頭を押さえながら辺りを見渡した。

部室は見事に燃え尽きており、これ以上火事が広がることもなさそうだった。

「シン。ホントに大丈夫？」

「ん？何がだ」

「なにがって、手が…」

恐る恐るといった感じで、ルカはシンの両手を差した。

シンは、導かれるように視線を移すと、真っ黒になっている自分の手があった。

「やべ、急に目まいが…」

「え、ちよつと！」

ふらつとまた倒れそうになるシンをルカは容赦なくひっぱり叩いた。おかげで、またシンは意識を保つことができたが今夜はきつと痛みのあまり眠れないであろう。

「お願いだから、あんまり叩くなつて」

「それよりシン、なんでこんなになるまで…」

「はあ？」

シンは、こいつ何言ってるんだという表情を浮かべ、一回ため息をつくとシンは言った。

「お前が、中にいたから無茶しただけだよ」

ニヒ、とシンは笑って見せた。

ピーポピーポ

そこに丁度救急車が到着した。

「お、いこうぜ、ルカ。手当てもらわねーと」
「ちよっと待ってよ」

先に救急車に向かって行くシンを追いかけるルカ。

ルカは、シンには聞こえないように

「ばか。…でも、ありがとう。私のために無茶してくれて」

少女は、満たされている思いを胸に彼の背中を追いかけた。

その頃、ウェーブロードでは

ツカサとヒカルがブラック・ファントムを対峙していた。

「さあ、きちりと…」

「あなたがしたことを償ってもらおうよ！」

二人は、言い同時に突っ込んだ。

「くう」

迫りくる二人に、焦りの表情を覚えるブラック・ファントム。

二体のエレキソードがブラック・ファントムに襲いかかる。

何とか、避けつつもだんだんと苦しくなっていく。

「とどめだぜ」

ヒカルがエレキソードをブラック・ファントムに振り下ろそうとした時だった。

笑ったのだ。

自分がピンチなのにブラック・ファントムは笑ったのだ。

「？何笑ってんだ？」

「引っ掛かったな」

その瞬間だった。

急にヒカルの足元から黒い鎖が数本飛び出してきヒカルの心臓を貫通した。

「ぐはー」

「ヒ、ヒカルウウウウ」

ツカサの叫びだけがウェーブロードに響いた。

部活動編？（後書き）

祝50話達成！

当初の予定では60話で終わらせるつもりだったのに…

こりゃ100話超えるの覚悟したほうがいいですね。

感想待ってます。

操られたヒカル（前書き）

なんだかんだでもう部活動編終わっていますね。

もう関係なくなってます。

シンとルカも退場しちゃってるし…自分の文章力のなさを恨みます。

操られたヒカル

「ヒカル！」

「……………」

ツカサは駆け寄り、鎖で胸を貫かれているヒカルを揺らす。ヒカルは答えずジャラジャラと、ただただ鎖の揺れる音だけが聞こえる。

「お前…何をした！」

ツカサは珍しく声を荒げてブラック・ファントムに問う。

「いささか脚本通りとはいかないがこれは思わぬ飛び入り役者だ。」

「ふざけるな！」

ツカサは、一気に距離を詰めエレキソードを振り下ろした。

だが、怒りで冷静さを失ったツカサの攻撃は簡単に避けられてしまう。

「ふっ！」

ブラック・ファントムは自身のステッキソードでツカサを切り付けた。

「ふふふ、教えてやろう。あの鎖の意味を」

「鎖の意味？」

傷口を抑えながらツカサは膝をついた。

ブラック・ファントムは小ばかりにするように一礼をした。

「その鎖は、マインドチェーン。捕えたものを使用者の虜にするよ
うだ。つまり、彼は私の忠実なる犬なのだよ」

「……らしい？」

「私はある人から貰ってね。その名もアース様。私の新しき主だよ」
「アース！？スバル君が言っていた新しい敵の事か」

「おや、知っているのかい？まあ、いいさ。そろそろ仕上げといこ
う」

ブラック・ファントムは、指をパチ、と鳴らすと鎖がヒカルの中へ
と入っていく。

「させるか！」

ツカサは鎖を引きちぎろう手を伸ばすが、何かの力で鎖には手が届
かない。

「ぐうわわわわわわわわわ」

ヒカルの悲鳴に近い声がウェーブロードに響いた。

「くくく、完成だ。さ、いくのだジェミニ・スパークB。奴を倒せ」

「……はい」

ヒカルの顔からは生気は消え失せ、目が虚ろになっている。

「ヒ、カル？」

「……………死ね」

ヒカルは、迷わずエレキソードを振り下ろした。

ツカサは何が起こっているかわからなかった。

咄嗟のことで防御もすることができず攻撃を受けそうになる。

「バトルカード ソード」

だが、青い影がエレキソードを止め火花を散らす。

「ツカサ君大丈夫？」

「スバル君…」

ツカサのピンチに駆けつけたのがスバルだった。

「よお、久しぶりだな。脚本野郎」

「ふん、ロククマン。やはり来てくれたか。今度こそ私の脚本を読んでもらうよ」

「また、僕らに脚本をつぶされに來たみたいだね」

「どうかな？すでに私の脚本はほとんど完成しているのだよ。あとは、君がやられてくれるだけだ。いけ、わが犬よ」

「…はい」

ヒカルはエレキソードを振りかざしスバルを切り付けてくる。

「なんで君が…！」

「ツカサは、操られているんだ！」

スバルの疑問をツカサが答える。

スバルは成程、と呟き状況を理解した。

「なんとかできないの？」

「今のところは…」

「…どこを見ている？」

エレキソードがスバルに当たりそうになるがシールドで塞ぐ。

「なら、ノイズチェンジ…ウルフ」

青緑の光がスバルを包み、表れたのはウルフノイズのスバルだ。

「これで、できるだけ時間を稼いでみせる」

「…こい」

こうして、ロックマン&ジェミニ・スパークW対ブラック・ファントム&ジェミニスパークBの対決が始まった。

操られたヒカル（後書き）

次回、スバル達が戦います。

ついでに少しアースについての説明とかも入れようかな？

迷える双子座と迷わない双子座（前書き）

チエンジ！の更新遅れそうです。

読んでいる方は、すみません。

迷える双子座と迷わない双子座

スバル対ツカサの勝負は、スバルの圧倒だった。

単体では、あまり強くないジェミニ・スパークに対してウルフノイズの特徴の素早い動きで、翻弄し攻撃を回避し、攻撃をするヒット&ウェイ戦法で戦っていた。

だが、それはただ圧倒的に戦っているだけであつた。

攻撃と言っても峰打ちで大したダメージにはならない。

回避はできても止めはさせない。

正にジリ貧。

いずれ自分がやられるであろう、とスバルは思った。

（それなら…）

「バトルカード プラズマガン1」

プラズマガンを放ち、ヒカルにヒットさせる。

プラズマガンが当たったヒカルは体をそらして避けようとしたが、当たってしまう。

「スバル！マヒしている間に」

「分かつてる」

スバルは、バックステップで、距離を取り呼吸を整えた。

スバルは、操られているヒカルを見る。

ヒカルは、肩では息をしているが決して疲れた表情は見せず、ただ目標のスバルだけを見据えている。

（きっと、感情までも支配されているんだ…だから、無表情しか表
せれないのか？）

「スバル、二人で抑え込むぞ。ジエミニだ」

ウォーロックは、そう言ったがスバルは首を縦には振らなかった。

「ダメだ。ジエミニノイズは体力の消費が激しい。この後はブラッ
ク・ファントムとも戦かはなくちゃいけないからこのままウルフで
行く」

「分かった。お前の判断に任せる」

もう一度戦闘態勢をとる。

「僕は必ずツカサの鎖を絶対に壊してやる」

スバルは、ヒカルの心を睨みつけるのであった。

スバルとヒカルが戦っている間にツカサ対ブラック・ファントムの勝負が行われていた。

「ヒカルを元に戻せ」

ツカサはエレキソードがブラック・ファントムに振り下ろされる。

「断る！」

ブラック・ファントムはそれを易々と避け、ステッキソードで反撃をする。

エレキソードで防ぎ、蹴り飛ばす。

ブラック・ファントムは、腹を押さえたが、すぐにまたステッキソードを振りかざした。

（ツカサがいればこんなやつ…）

ツカサは、悔しそうに唇をかみしめた。

事実、ヒカルがいればもっと楽に終わらせることができただろう。

だが、そのツカサは敵に操られてしまった。

「隙だらけだ。ファントムスラッシュ」

「なっ、しまった」

マントの裾を持ち、高速で何回も回転する。

ツカサは、ファントムスラッシュに飲み込まれてしまった。

迷える双子座と迷わない双子座（後書き）

感想待ってます。

ダークサイドの入り方（前書き）

こんなサブタイトルですが、あまり気にしないでください。

ダークサイドの入り方

「うつつ」

ブラック・ファントムのファントムスラッシュに解放されたツカサの体は傷だらけとなった。

あまりのダメージに膝をつくツカサ。

ブラック・ファントムは、見下すようにツカサを見下ろし、ツカサの脇腹を蹴り上げた。

「ぐあ」

蹴り上げられたツカサは、体が宙に舞い受け身もせず背中から地面にたたきつけられた。

ツカサは声のない悲鳴を上げ、仰向けのまま動かなくなった。

再度、ブラック・ファントムは、見下すようにツカサを見下ろした。

「フフフ、痛いだろ？体が！心が！だが、その痛みから私が解放してやろう」

「…どういう意味だ？」

「そのままの意味だ」

ややオーバーにバサツとマントを広げ、ブラック・ファントム懷からあるものを取り出した。

「それは…」

「ああ、そうだ。もうひとりの君が囚われている鎖だよ。フッフ」

今のツカサの体の痛みもそうだが、何より心の痛みの方が痛かった。

そして、迷う。

自分も鎖に囚われてしまえばまた一緒になれるのじゃないのだろうか？

「さあ、この○印を踏むんだ。そしたら、また一緒になれるぞ」

「……………また、いっしょに？……………」

ブラック・ファントムは、ステッキで○印を示す。

ツカサは、ふらふらと○印に向かって一歩ずつ足を進める。

だが、あと寸前というところでツカサの足は止まった。

うつぶせの顔上げ、ブラック・ファントムの顔を見上げる。

「ほお」

思わず感嘆の声を上げるブラック・ファントム。

ブラック・ファントムの瞳には生気が抜けた顔でブラック・ファントムを向上げているツカサが写っていた。

このままでも十分いけそうだとチラ、と思ったが念には念をと思い黙ってみることにした。

ツカサは、黙っていた口を開け言った。

「…本当に…本当に一緒になれるんだな？」

しめった、と思いになまりと悪いブラック・ファントムも言った。

「もちろんさ。これでまた君たちは一緒になれる」

「……………」

ツカサの生氣のない目に迷いはなかった。

一歩を踏み出そうと足を上げた時だった。

「ごめん！」

その声と共にヒカルの横腹に衝撃を与えた。

「！」

ヒカルは、突然のことに対応できずズズズ、と滑った。

（暖かい感触…これは…）

「ごめんごめん、ツカサ君。ちょっと油断していて」

「スバル君…」

そこには、彼のブラザー星河スバルがてへへ、とべそをかきながら笑っていた。

「……思いからどいてほしいんだけど……」
「…あ、ごめん」

ツカサの上に乗っかっていて。

（またしても、私の脚本を読まないとするのか。ロックマンよ！）

ブラック・ファントムは恨めし気にスバルを睨んだ。

その視線に気付いて、スバルは笑うのをやめ立ち上がって睨み返した。

「ブラック・ファントム。また、なんの脚本を立てたかしらねーが」
「僕たちが、潰してみせるよ」

一呼吸して、スバルとウォーロックは、言った。

「「何度でも！何回でも潰してやる！」」

ダークサイドの入り方（後書き）

チェンジの方は明日更新します。

それにしてもほかのロックマンの作品を読んだりすると、ミソラとのデートシーンがあるので、この小説それらしいこととしてねー

ま、その内しますか

感想待ってます。

ツカサとヒカルの答え（前書き）

久しぶりの投稿だ。

ツカサとヒカルの答え

スバル視点

「潰すだど？やれるものならやってみる。お前たちに私の犬が倒せるのか？」

傍らにいたヒカルをコンコン、とステッキで軽く叩く。

ヒカルは、ただ無言で僕らを見つめる。

いや、正確にはツカサ君を見つめた。

「まだ、希望はあるかもしれないよ」

僕は、ヒカルとブラック・ファントムを見つつもツカサ君に言った。

「……………」

ツカサ君は、生気のない顔でヒカルを見つめ返した。

ヒカルは変わらずツカサ君を見つめている。

「ほら」

僕は、ツカサ君に手を差し伸べる。

「……………スバル君。僕はどうしたら…」

「迷っているの？」

「……………うん」

ツカサ君は、迷っているようだ。

僕にもその理由は分かる。

以前クリムゾン・ドラゴンに父さんを吸収されたことがある

迷いながらも、戸惑いながらも最後に迷いを振り切りクリムゾン・ドラゴンを倒した。

父さんがそう望んだから

「でも、もう答えは出ているんじゃないのかな？」

「答え？」

「そう、ツカサ君とヒカルの答え」

「…僕と、ヒカルの答え……………それは」

僕の手を取り、立ち上がり言った。

「もう一度、ヒカルと共に時を過ごす事だ！」

ツカサ君の顔に生気が戻った。

「ヒカル。来てくれ」

「……………」

そして、音もなく二人はどこかへと去った。

取り残された僕らは、互いに睨みあった。

「やはり、貴様は私の脚本を読もうとしないな？ ロックマン」

「何度だって俺達が邪魔してやるって言っているだろ？」

「さ、僕らもやろう。今度こそお前を許さない」

僕の怒りも静かに燃えてきた。

刹那

ブラック・ファントムのステッキソードとシールドがぶつかり合う。

「バトルカード ウッドスラッシュ」

ガードしたのと同時にシールドを深緑の力を纏ったソードでブラック・ファントムを切る。

しかし、ステッキソードを盾にして防ぐ。

「な、私のステッキが…！」

「ざまみろってんだ」

代わりにステッキが折れてしまっている。

「私のステッキが…よくもステッキを」

何かの思入れがあったのか、突然怒り狂ったように僕に殴り掛かっ

てきた。

「くっ」

「なんだこいつ。急に強くなりやがった」

向こうはなれない拳のみでの攻撃しているはずなのに全くこちらは反撃に出ることができない。

「スバル……」

「分かってるよ」

ロックが促すので仕方ない。

確かにウルフの新しい力を使わないといけないようだ。

「バトルカード パワーボム1」

十字に誘爆する爆弾をブラック・ファントム目掛けて投げる。

「そんな物！」

しかし、いとも簡単に避けられストレートを入れてこようとす。

だが、これでいい。

次の瞬間、頭が真っ白になった。

ツカサとヒカルの答え（後書き）

スバルが何をしたか大体の人わかんと思います。

この話が、終わったらみんな旅行でもさせるのですが誰にスポットライトを充てるか迷ってます。

予定じゃ、ゴンタと委員長かな？

感想待ってます。

二人の新しい力（前書き）

今回は、ツカサをヴァージョンアップさせます。

…俺ってこんなにツカサのこと推してたっけ？

1 もろくにやってないのに…

二人の新しい力

通常視点

所変わってツカサたちは、スバルが戦っている場所からそれなりに近い場所に対峙していた。

「ここら辺でいいよね。ヒカル」
「……………」

無言で戦闘態勢に入るヒカル。

ツカサも応じるように戦闘態勢に入った。

「……………」

ピクリ、と動かなくなった二人に只ならぬ空気が流れた。

しかし、それもすぐに崩された。

先に動いたのはヒカルだった。

エレキソードを展開し、切りか掛かろうとするのに対して同じくエレキソードを展開して受け止める。

エレキソード同士がぶつかり合い鉄の焼けるにおいがした。

あまりいい匂いはしないな、とツカサは苦笑する。

「…なぜ笑っていられる？」

「ヒカルもなんで楽しそうに戦わないの？いつもなら楽しく戦うのに」

「楽しそうに戦うだと…？」

無表情だったヒカルの顔が少し険しくなった。

「スバル君の言う通りだね。まだ、希望は捨てられない」

ツカサは嬉しそうに言う。

ヒカルの感情は、心はまだ完全に鎖に囚われていないことが疑念から確信へと変わったのだから

「…やめろ。その表情…」

ツカサの表情を不快と思い、空いている片手で拳を飛ばす。

「ツカサ！」

「…！」

敵がいきなり大声を上げたのに驚きを示しヒカルの拳が一瞬のためらいを覚える。

その隙に、ツカサは足払いをし、マウントを取った。

「くっ……」

焦りを覚えるヒカルはジタバタ、と抵抗をするがうまく押さえつけられていて、抵抗は無意味だった。

「やっぱり、君なんだねヒカル」

「何を…」

「ヒカルだよ。君は」

「違う！おれは」

ヒカルは絶句した。

自分は誰なんだ、と。何者なんだ、と。

「俺は…俺は…俺は…」

胸が痛みだし、ヒカルは自身の胸を抑える。

「なんだ？この胸の痛みは」

「それは、心が痛いからだよ」

「心だと？」

ツカサはゆっくりと頷いた。

「いくら鎖で縛っても心は縛れないんだよ。だから、ね？戻っておいでよヒカル」

「俺は…俺は……うあああああああ」

ヒカルは叫びだしドン、とツカサを押した。

ツカサは油断していたので、簡単に吹っ飛ばされた。

「ヒカル！」

「うおおおおお」

ヒカルは、滅茶苦茶にエレキソードを振り回しながらツカサに向かってくる。

ツカサは、ヒカルを呼ぶ掛けてみるも全く反応を示さなかった。

（僕じゃ…無理だったのか…ヒカルを救うのは…）

諦めた時だった。

ピピピピピ

ヒカルのハンターV Gが、強制的にブラウズされ、数字やアルファベットの描かれた大量のデータが、ハンターV Gに転送されているではないか。

ヒカルは、驚きつつもハンターV Gから機械音が聞こえた。

「ダブルシステム起動…ホワイトサンダーデココロウテ」

「ホワイトサンダー？僕の新しい力か…？」

少し不安もあつたが迷っている時間は無かった。

左手を構え、自分のエネルギーすべてを放つ。

その名も

「ホワイトサンダー！」

白い電撃がヒカルを飲み込んだ。

「やったのか？」

ぜえぜえ、息を荒らすツカサ。

数々の疑問が横切るがツカサにはそんなもの後回しだ。

「ツ、カサ。帰ってきた…ぜ」

ばたん、ヒカルは元に戻ったのをヒカルに見せ、前のめりに倒れた。

「よかった」

ヒカルも、そう呟き前のめりに倒れこんだ。

二人の新しい力（後書き）

自分で読み返してみると何が悪くて何が良いかわかりません。

ので、僕の悪いところやいいところなどを感想にしてくれるとうれしいです。

次回はブラック・ファントム戦決着です。

多分

感想待ってます。

殴り切り合う（前書き）

少し戦闘シーンを省きます。

けして手抜きじゃありませんよ！

ただ、思いつかなかっただけです（笑）

殴り切り合う

スバル視点

「うっう」

だれかの呻き声が聞こえたかと思うと、ずっと視界が開いた。

視界にまず入って来たのがブラック・ファントムがうめき声をあげ、膝についている姿だった。

「僕がやったの？」

「ああ、お前がやったんだ」

ハンターからロックの疲れきった声が響く。

「ウルフノイズの新しい力…狂戦士化を使ったらお前がブラック・ファントムを倒したんだ。すげえスピードだったぜ。赤色のウルフは」

「赤いウルフ？…そういうばそんな感じだったかも。なんか血がたぎるというか」

「おいおい。それじゃ、緒方じゃねーか」

「そうだね。緒方さんだ」

まだ、記憶に霞はかかっているが、うつすらと覚えている。

「それにしても体中の節々が痛い」

「俺もだ。無茶苦茶疲れた」

「ロックマン。よくも母の形見を…」

膝をついていたブラック・ファントムは恨めしそうに僕らの名を呼びふらふらと立ち上がった。

「ノイズチェンジ…オックス」

ウルフノイズからパワータイプのオックスノイズへと姿を変える。

「まだ、やるのか？脚本野郎」

「当たり前だ。貴様のせいで私の人生は狂い拳句の果てには母の形見までも…」

折れたスツテキソードを両手に持ち、構える。

「それは悪かったよ。…でもお前が今までやったことは許されるものじゃないし、僕は決してお前を許さない」

「ねかせ。今日こそ貴様の息の根を止めてやるロックマン！」

ふらふらの僕らは互いにぶつかり合い、殴り切り合った。

切られたら殴り、殴られたら切る。

先に手を止めた方が負ける、と二人はボロボロになりながらも手を止めなかった。

互いに手を止めぬ中だんだんとタイプの違いの差が出てきた。

オックスノイズ、スピードや知略には欠ける物の防御力や攻撃面では各ノイズでもトップクラスの能力がある。

ブラック・ファントム、総合能力ではパツとしないがトリッキな能力で相手を翻弄する策略家タイプ。

殴り合いなら圧倒的に僕が有利だった。

徐々に苦しい表情へと変わるブラック・ファントムに思わず勝利を確信する。

それが命取りだった。

ブラック・ファントムと僕の視界にシン先輩とルカ先輩が写った（どうやら二人は怪我をしているけど無事なようだ）

油断した僕を蹴り倒しそのままシン先輩とルカ先輩の飛ぶように向かった。

「しまった！」

だが、時すでに遅し、あつという間にブラック・ファントムの手は二人に届きそうだった。

二人に電波体は見えないので回避の仕様がなかった。

「やらせないぜ」

その時、ブラック・ファントムの腕を掴む人物が僕の目の前に現れた。

殴り切り合う（後書き）

ウルフの能力は円状のものをみると、赤色に変わり速くなるというもの。

ほかの出ていないノイズチェンジはまだ考え中です。

こんなのがいいと思った方は感想と一緒に送ってください。

待ってます。

次回はあの方が復活します

感想お待ちしております。

僕は… ロックマンですから（前書き）

久しぶりの投稿です。

遅れてごめんなさい。

僕は… ロックマンですから

アシッドの声がハンターから響く。

「でも、体の方は「貴様は…！」

「よ、初めましてかな？ ブラック・ファントム」

男は余裕の笑みを浮かべさらに強く腕を握る。

そうして男は僕に向かってこういった。

「ヒーローは遅れてくるものだよな？ スバル」

「遅すぎますよ。暁さん」

僕は、遅れてきたヒーローに軽口をたたく。

「私もいますよ。スバル、ウォーロック」

「アシッドも…」

「げっお前もいるのかよ」

「当然です。私なしではシドウは電波変換できないのですから」

…」

「ああ、まだ無茶できないから早急に片をつける。スバルはあの子らの避難を」

「…わかりました。任せます」

僕は一礼してシン先輩とルカ先輩の元に駆け寄った。

「さ、リハビリと行こうか！ アシッド」

「OKです。シドウ」

二体はブラック・ファントムに体を向きなおした。

「シン先輩！ルカ先輩！」

「スバル！？」

僕は、二人に見えないように物陰で一度電波変換を解き二人の目の前に現れた。

二人はひどく驚いた表情を浮かべており、何より身なりがボロボロだった。

「スバルなんでここにいるんだ！？」

「爆発があつて駆け付けたんです。それより早く避難しましょう」

「！見て二人共」

僕が二人を避難させようとした時ルカ先輩が空を指す

ビジナライザーを掛けている僕にはアシッド・エースとブラック・ファントムが対峙している姿が映る。

それを見た僕は、二人を早く避難しない、と改めて思う。

「先輩たち早く避難しましょう」

「ああ、分かった」

「正門に救急車が来ているはずだから行きましょ」

僕らは急いで正門へと足を運ぼうとした。

その時だった。

「「「メットー！」」」

目の前に何故か実体化したメットールが出てきた。

「「ウイルス！？」」

「スバル！」

「分かってるよ、ロック！」

ロックが催促する。

分かっている。もう一つの自分の姿を曝すことになってしまつても…

だから、迷ってる暇はない。

右手を科掛ける。

「トランスコード003 シューティングスターロックマン！」

蒼き流星となり、二人の前へと現れる。

「スバル…その姿は…？」

「まさか、スバルの正体って」

「バトルカード　ワイドソード」

ウォーロックアタックで、一気に間合いを詰め横に振ると攻撃範囲が広がるワイドーソードで、ウィルスを一掃した。

フー、と思わず安堵の溜め息を吐く。

「「スバル……」」

不安気に覗う先輩達。

僕は、できるだけ落ち着いた訃音帰依お出しながらゆっくりと言った。

「先輩。僕はやっぱり陸上部には入れません」

「え……」

「だって」

間を一回置いてハッキリ告げた。

「僕は……ロックマンですから」

笑顔でハッキリと僕は告げれた。

僕は… ロックマンですから（後書き）

テスト期間でだいぶ更新が遅れました。

これからも遅れていくので温かい目で見守ってください。

感想待ってます。

最近出番がなかったから…（前書き）

なんだかんだでの投稿です。

ああ、早くやりたいネタがあるからこの話も終わらせないと…

では、どうぞお楽しみください。

最近出番がなかったから…

シン先輩達を正門まで送ると正門に送った後、暁さんのところに即座に向かった。

「よかったのか？スバル」

「フウフウ…何が？」

息を軽く乱し、腕を振りながら返事をする。

「正体をばらした事に決まってるだろ」

「別に構わないよ。それにロックマンにならなきゃ、シン先輩達を守れなかっただろ」

「お前が良いって言うなら俺は何も言わないけどな…それより休憩していかないか？」

「ん、なんで？」

「SPGMのせいで体力を大幅に削られただろ」

吐き捨てるように言うロックの言葉に思わず足を止める。

「…やっぱりロックもそう思うんだ」

「まあな。SPGMを使う度に異常なくらい疲れるからな」

それにダンも『SPGMはあまり使っな』と言ってた。

僕も薄々感じていた事だ。

…え、本当だよ？

別にロックに言われたから気付いた訳じゃないんだからね！

「…何言ってるんだ？スバル」

「…最近、出番が無かったからキャラを立てようと…」

「勝手にキャラ崩壊するな！」

そんなこんなで、漫才をしていると目の前に見覚えのある少女が現れた。

赤紫色の長い髪をたなびかし、あどけない表情をする。

そう彼女の名は…

「スバル君！」「ミソラちゃん！」

声を揃えてはもる。

「スバル君良かった！無事だったんだね」

「うん。僕は無事だけど…それより暁さんは？」

「ジャック君が向かってくれたよ。ゴンタ君はツカサ君を保健室に連れて行ってたよ」

そうだ。ツカサ君はどうなったんだろ？

「ツカサ君はどうだ——」

った、と言おうとした時、体がカクつと揺れたのが分かった。

なんで、だ。体に力が、入らない。

何より眠い。

踵が地面が離れていくのが意識が薄れて行く僕でも分かった。

「きゃ、スバル君？」

最後に聞いたのはミソラちゃんの声だった。

気が付くと目の前には見慣れた天井が広がっていた。

「ここは僕の部屋か？」

「あ、スバルが起きたよ」

「お、マジか」

二人の幼馴染が僕の顔を覗き込む。

「なんで、ダンとユイが…それより僕は？」

なんで、僕はこんな所で寝ているのдар？

「SPGMの使い過ぎで倒れちまったんだ」

「…ああ、そうか。そういえばミソラちゃんが現れて、そしたら急に力が抜けてそれで…」

キュッボン！

派手な音を立てたのが自分だと分かる。

顔に血が集まっていくなの分かる。

そうだ、僕はミソラちゃんに…

更に顔に血が集まっていくなの分かる。

後で、謝っておかないと

「？どうしたの？スバル？」

「何もない！」

「？？」

「そんなことよりブラック・ファントムはどうしたんだ？」

ウィーザードオンしたロックが二人に問う。

「え、えっとた、確か」

「しっかりして下さい、メタルさん。あの後シドウさんとジャックさんが戦ったのですが逃がしてしまっただらしくて…でも、かなりの深手を負ったらしいのもう出てこないんじゃないんでしょうか」

メタルが相変わらずなのでアクアが代わりに説明してくれた。

「ま、そんなことよりこれだよ」

ダンは、自分のハンターV.Gを見せる。

それは委員長からのメールだった（どうしてダンのメアドを？）

「何々、今週のゴールデンW Kで旅行に行くから私の家に集合？」
「だ、そうだ」

ふんふん、旅行か―それはいいけど僕には送られてきてないんだ
ど…

そつえばSPGMを詳しく気候と思っていたのを忘れてた。

あとで、いいか…

身支度をすまして僕らは委員長の家へと赴いた。

最近出番がなかったから…（後書き）

なんか少しずつウィーザード達が喋るようになってきました。

良かった、良かった。

感想待ってます。

旅行先は…（前書き）

前々から自覚はあったのですが今日改めてこの小説は誤字が多いのに気付きました

これからは見直しをしていききたいと思います。

旅行先は…

「「お邪魔しまーす」」

二人は、そう言って委員長の家へと入った。

いや、正確には侵入したと言った方が正しいと思う。

電波変換した状態で、窓から堂々に入った。

「二人共、不法侵入は良くないよ」

「二人共、いらっしやい。後、あなたは呼んでないわよ？星河君」
「スルーなんだ！？二人の不法侵入についてはスルーなんだ！？」

因みになんだかんだで、僕も電波変換して入ってるんだけどね。

「スバル。お前も電波変換して通り抜けてきただろ」

「チチチ、ダン。甘いね」

「どう言う意味だ？」

「僕は、天井から入ったのさ（キリッ）」

「それどっちみち不法侵入だからな！しかも天井からって上の部屋から入ってきたってことだろうが！二回不法侵入してるからな！」

「二人共々。それより早く旅行先を決めようよ」

「それもそうだな」

「だね」

ユイに言われ僕らは、円状に広がっているテーブルに座った。

メンバーは、僕、ミソラちゃん、ダン、ユイ、委員長、ジャック、

ツカサ君、ゴンタ、キザマロ、と言うメンバーだった。

なんだか大人数で行くな。

旅行のことを考えるとワクワクしてきた。

「で、何処に行くの？ルナちゃん」

最初に切り出したのはミソラちゃんだ。

「そうね。ここは行きたい所をみんなに聞きましょう」

「俺は、何処でもいいぜ」↑ジャック

「僕もかな？」↑ツカサ君

「右に同じく」↑ユイ

「俺も」↑ダン

「おいしい食いもんがあるならどこにでも行くぜ」↑書かなくても分かるよね？

「僕は、ヤエバリゾートが良いです」↑キザマロ

「私は、みんなとならどこでもいいかな？」↑ミソラちゃん

…なんか大体の人はどこでも良いらしい…

いいのかなそれで？

「スバル君は？」

ミソラちゃんがまだ意見を言っていない僕へと話を振る。

他のみんなも僕に視線を集める。

こりゃ、下手なことは言えないな。

なんとかみんなが喜ぶような場所を言わないと。

うーん、と唸って考えているとポン、とある場所が頭の中に広がった。

「僕は秋「黙りなさい」ええええええ」

意見すら言わせてもらえなかったよ！

確かにこれで失敗することは無くなったけど、胸の方に空いた穴がスースーと風をよく通している。

「じゃ、私も特に意見は無いからヤエバリゾートにしましょう」

全員頷いてヤエバリゾートへと決定した。

「スバル、泣くな。相棒の俺がついてるぜ」

「泣いて無いよ？これはただ目が霞んでるだけだからね？本当だよ。涙で目が霞んでるだけだよ。決して泣いてるわけじゃないからね」

「涙で目が霞んでる時点で泣いているっていうんだが…」

はぁー、とロックはため息を吐いた。

「星河君――？」「スバル君」！

「ん？何、ミソラちゃん？」

「旅行の事なんだけど」

「……………バカ」

何故か、背中に寒気が走った。

「スバル君？なんで十字切っているの？」

「多分、死にたくないからだと思うよ？」

「？」

もう反射レベルで体が動いていた。

旅行先は…（後書き）

これからユイの語尾に～をつけたいと思います。

これをつけると何となくのんびりした感じになるんで…

それと旅行編ではついにスバルとダンたちの出会いについて語ります。

アイちゃんはどうしよう？

手錠で繋がった僕ら（前書き）

なんかグダッてます。

かなりグダッていますがご了承ください。

手錠で繋がった僕ら

あの後、解散して僕らは各々の帰宅路へと、向かって解散した。

途中で

「そういえば、星河君。ミソラちゃんとの同居について聞「帰ろう。ミソラちゃん」て、
ちよっと、待ちなさい」

「え、ス、スバル君!？」ガツチャ（何かの鉄の音）

有無を言わさずミソラちゃんの手を引き僕は脱出した。

と言う訳で僕はある試練に立ち向かっている。

え、それはなんだって？

決まっているじゃないか。

「「.....」」

僕は、ミソラちゃんの手を引いて脱出した。

手を引くとはつまり手を繋ぐということである。

つまり僕が言いたいのは僕らの距離は殆どない。

「スバル君。近いよ…」

「…ごめん」

そこまではいいんだ（よくないけど

僕としては可愛いミソラちゃんとのこの密着具合がうれしいから…

でも、でも、これは違うと思う。

だって…

「手錠でつながってるよ…私達」

「…本当にごめん」

いつの間にか銀の輪と銀の鎖が僕らを繋いでいる。

いつの間にやられていたんだ？

『見上げる空は 心に』

「メールだぜ。スバル」

「ミソラもよ」

僕とミソラちゃんのハンターから『ハートウェーブ』が流れる。

「えへへ、スバル君もハートウェーブを着メロにしてるんだ」

「うん。この曲は二番目に好きな曲だからね」

「？一番は」

「そ、そんなことよりもメールを見ないと」

若干言葉を濁しつつ僕はメールを見た。

「？」

ミソラちゃんは特に何も言わず？マークを出し僕と同じようにメールを見た。

「ダンからだ」

「私も、ダン君から」

「内容を読むぜ。手錠で繋がった恋人つてのもいいよな…だってよ」

「……………えっと、つまり」

「ダン。クロス」

「スバル君ダメよ。つまりになつてないし、それに目がイッちゃてるわよ！」

「追伸 用意したのはユイだ、そうだぜ」

「二人ともクロス」

「更に目がイッちゃてるよ！スバル君」

「おい。早く帰ろうぜ」

「ソウダネ。ハヤクコロサナイトネ」

僕は、片言な言葉を発しながらユラリユラリ、と足を動かした。

「ミソラ。あなた、すごい子を好きになっているわね」

「うん。ハープも大概だけどね」

「だ、だれがあんな野蛮人なんか」

「はいはい（棒読み）」

耳元でミソラちゃん達が何かを言っていたような気がするが今の僕の耳には入らなかった。

『星河家』

「完全に忘れたんだけど、ミソラちゃん」

「あ、正気に戻ったんだ」

「うん。それよりも寝る時どうする？」

「え？」

呆気にとられた表情で、僕を見るミソラちゃん。

だよな。僕も今まで気が付かなかったし、他のことで一杯一杯だったから

「一緒に寝ちゃいなさいよ」

「！！ハープ！！」

「ほほほ」

ハープ特有の笑いをしながらハープは何故かロックを連れてどこかへと去った。

「て、またこのパターンかよおおお」

そんなロック余所に一気に僕らの顔が赤くなる。

年頃の僕ら一緒に寝るなんてダメに決まっているだろう。

「仕方ない。僕の腕を切れればいいか」

「それは私にトラウマを作れと言ってるの！？」

「え、ダメなの」

ほかの案を考えようと頭をひねってみるがまったく思い浮かばなかった。

「……スバル君。スバル君さえよければ一緒に寝よ？」

「……………はい？」

上目使いで探るように訪ねてくるミソラちゃんは差し詰め自分の魅力を知っている腹黒い小動物だろう。

卑怯だ。

そんな可愛く尋ねられると答えは

「はい。いいですよ」

と答えるしかなくなる。

「え、本当に！」

「うん。てか、嬉しそうだね。嫌じゃないの？僕なんかと一緒に寝てさ」

「？ううん。そんな訳ないよ。むしろ嬉しいかな」

「え？」

「ほら、行こう」

手錠で繋がっている僕らは僕の部屋に行き少しの間だけおしゃべりをして、背中合わせになるようにし、眠った。

「おやすみ」

「おやすみ」

ミソラちゃんは眠れた。

でも、僕は

（ね、眠れるかああああああ）

ミソラちゃんが傍にいただけで僕は眠れそうになかった。

結局、一晩中僕は起きていた。

次の朝、僕は目のくまがジャイアントパンダになってしまった。

手錠で繋がった僕ら（後書き）

次は、GW編をやります。

どんな話にしようかな？

感想待ってます。

ヤエバリゾート（前書き）

ついに旅行編に入りました。

いやゝ本当に起承転結で言っならばまだ起と承の間ぐらいですけどここまで来たんだなと感動を覚えました。

それではお楽しみください。

ヤエバリゾート

通常視点

『ウェーブライナー前』

「遅いわね。星河君達」

委員長はイライラしていた。

なぜなら集合時間はすでに過ぎており、後1分でウェーブライナーが到着してしまう時間だからだ。

「ス、スバル君。早くしないと遅れちゃうよ」

「ま、待て。そんなに慌てるわけ——」

男女の声がしたと思うとバツシャ、と水しぶきの音を上げて場にいらみんなの視線の的となった。

「何やってるんだ？お前ら？」

ジャックが川に落ちた二人に言う。

二人はベソをかき少し呆気に取られた。

「大丈夫？スバル君、ミソラちゃん」

「「ビショビショに濡れちゃった」」

「いえ、ツカサ君の大丈夫の意味は川に落ちたという事ではなく」
「「？」」

「「「なんで鎖につながってるんだ（ですか）？」」」

「あ、これは——」

「「二人の愛の証だよな（笑）」」

.....

「「ダ、ダン（君）！！ユイ（ちゃん）！！」」

二人は、互いに顔を赤くし二人を追いかけまわす。

キヤキヤ、言いながら二人もまた逃げる。

「もう、遊んでないで行くわよ。電車も来たみたいだし」

「だとよ、ほら行こうぜ」

「その前に、手錠のカギを渡してもらおうか」

「チッ覚えていたか」

「覚えてるわ！」

何故か、関西弁に変わっているスバル。

「それにしても、さっきの二人息が合っていたね」

「え、そ、そんなことは……」

「ミソラ。かわいい」

ユイは、赤くなっているミソラを撫で回す。

「ほら、早くしなさい。3人共」

「まだ、僕はカウントされてないの!？」

（（楽しそうだな））

「ポテチ、ポテチ」

全員が電車に乗り込むのと同時にウェーブライナーは目的地に走り出した。

『ヤエバリゾートバス停』

スバル視点

あの後、ウェーブライナーからバスへと乗り換えて僕らはヤエバリゾートにやってきた。

「さ、目的地に着いたわ」

「よし、さっそく滑ろうぜ」

「おれも行くぜ」

「待ちなさい、ジャック、外亜君。そのまえに」

「ホテルのチェックインだよ」

「！よく分かったわね。星河君」

「うん。2年前もそうだったからね」

目をつむるところに初めて来た時を思い出す。

スキーを滑った事。

アイちゃんに滑り方を教えてもらった事。

オックス・ファイヤーと戦った事。

何よりイエティ・ブリザードと戦ったことが一番の印象に残った。

「おい、スバル。ハープ達先に行ったぞ」

「え、ま、待ってよ」

人が感傷に引っ立ているというのにおいていくなんてひどいな。

僕は、駆け足でみんなの背中を追いかけた。

「チェックインを済ませたから各自自分の部屋にいて」

そう言つて委員長は一枚の紙を突き出した。

「えーと、私はルナちゃんとユイちゃんと相部屋で」

「僕は、ダンとツカサ君か…」（今夜こそあいつを殺す）

「じゃ、暫定的に俺とゴンタとキザマロだな」

「自分の部屋に荷物を置いたら早速滑るわよ」

各々部屋割りを確認し、自分の部屋へと向かった。

さ、お楽しみのスキーだ。

ヤエバリゾート（後書き）

次は、どんな感じにしようか迷っています。

多分ギャグでいくと思います。

感想待っています。

初日目（前書き）

ギャグとか言っていましたけど結局できませんでした。

ごめんなさい。

初目

僕とジャックとゴンタは、早めに用意をすることが出来たので先に集合場所のロビーの方にみんなを待っていた。

「暇だね」

「ああ、暇だ」

「お腹すいた」

「しりとりでもしようぜ」

暇だ、と言っているとダンがしりとりをしようと言い出した。

僕らは、無言で頷いた。

「じゃ、俺、スバル、ジャック、ゴンタで行くぜ」

「「「OK」」」

「スバルのルから行くぜ。ルーレット」

「と？トマト」

「トイレ」

「レモン」

「ゴンタ。アウトだよ」

大方、食べ物の名前しか出てこなかったのだろう。

そんな感じで時間をつぶしていると残りのメンバーが来た。

「さ、みんな揃ったことだし行きましょうか？」

委員長がそうみんなを促した時だった。

「おや、君たちは？スバル君達かい？」

「あ、滑田さん」

声の方を振り返るとそれはアイちゃんのお父さんの滑田さんだった。

忘れていたけどこの支配人だったな。

「そっといえばアイちゃんはいないんですか？」

キザマロが滑田さんに問う。

滑田さんは少し困ったようで残念そうな顔をして答えた。

「今、アイは海外遠征で日本にはいないんだよ。君たちが来たと言ったらとても喜ぶだろうに……ミソラちゃんは知っているがそれよりこちらの方たちは？」

「俺は、外亜 ダンって言います。スバルの幼馴染です」

「私は、青星 ユイです。同じくスバルの幼馴染です」

「俺はジャックてんだ。2日間世話になるぜ」

「僕の名前は、双葉 ツカサです。よろしくお願いします」

「ダンさん、の、ウイ、ザー、ドの、メタル、です」

「ユイのウィザードのアクアです。よろしくお願いします」

「コーヴァースだ」

それぞれウィザードの紹介を終わらせ上へと上がった。

「さて、用意してレンタルした最新版スキー板で滑るわよ」

『『『おー』』』

「じゃ、データを転送するわよ」

委員長がハンターを操作し、みんなにデータを送る。

「お、来た来た」

「はしゃぎ過ぎだよ。ダン」

「そう言ってる。ユイちゃんもね」

各々好きなことを言いながらスキー板を出す、前の時のように自我のあるタイプだ。

だが、そんな中僕だけある異変に気付いた。

（おかしい。なんで僕だけ…スキー板に模した段ボールなんだ…！？）

この状況をおかしいと思っているのは僕だけなんだろうか？

誰一人とツツコミをいれない。

ああ、あれか。最近、僕がポケパートに行こうとしているからツツコミパートに戻そうというみんなの策略なのか。

数少ないツツコミ役の僕がポケに行くとその面子を裁ききれなくなってしまう。

ま、仕方ない。ここは黙って…

「んなわけあるか！」

「ど、どうしたんだい。スバル君？」

思わず地面に向かって段ボールを叩きつけた。

「ツカサ君。どうしたも、こうしたもないよ。どうして僕だけ段ボールなのさ!」

「別にいいじゃないか」

「え?」

ダンの答えに若干戸惑う。

別にいいってどういう意味なんだろう?

「俺達はスキー板。スバルは段ボール…それでいいじゃねーか」
「よかねーよ!?!」

思わず叫んでしまった。

うむ、どうやら僕はボケにはなれないらしい。

「仕方ない。前使っていた奴でも使うか…」

こうして僕らの旅行初日目が始まった。

???視点

「星河スバル、発見。駆逐する」

初日目（後書き）

「道に迷えばとにかく前に進めばいい」と、昔読んだ漫画でこんなセリフがありました。

しかし、これは嘘です。

断言できます。

何せ、今日僕は道に迷いました。

とにかく前へ前へ進んで行くと最後には駅の西側の入口（いつもは東側）につきました。

道に迷ったらすぐに人に聞いた方が賢明です。

え？そういう意味じゃないって？

ま、いいじゃにですか。

感想待ってます。

さっそく滑ってきて（前書き）

今回はいつもより視点が変わります。

もしかしたら目が回ってしまつかもしれませんがご了承ください。

さっそく滑ってきて

僕の提案によって、数人のグループにくじで分かれて別々に行動していた。

僕、ユイ、ミソラちゃん。

ゴンタ、キザマロ、委員長。

ツカサ君、ジャック、ダン。

こんな感じで別れた。

で、僕らは今のんびり滑るために林間コースと呼ばれる斜面の緩い坂で三人で滑っている。

何故か、全く会話がないまま

（おかしい。なんでさっきから全く会話がないんだ？あれか、僕がグループを分けようとか言いだしたからか？）

「ね。あ、あの二人ともなんで黙っているの？」

おずおず、と二人に聞いてみた。

「ん？そうかな？スバルが黙っているだけなんじゃないの？」

「いや、話振ってもすぐに終わるんだけど…」

「き、気のせいだよ。ね、ユイちゃん」

こく、とユイは首を縦に振る。

もう、訳が分からない。

さつきから僕を間に挟んで二人は互いにチラチラ、と視線を飛ばし合っている。

まるで、何かを気にし合っているようだった。

一体なんだろう？

（うっ、気まずいよ。きっと、ユイちゃんもスバル君のこと好きなんだろうな…）

（ミソラもスバルのことが好きだろうな、負けないけど）

二人の思いは交差し合っていた。

委員長視点

私は、星河君達の後に続くように板を滑らせていた。

これは決して星河君が気になると言う訳じゃないんだから

あの3人は、ドジなところがあるしもしかしたら危ない目に合うのかもしれないからこうやって見張っているんだから

「委員長。待ってください」

「だらしねーぞ。キザマロ」

キザマロ、ゴンタも私の後に続くように板を滑らせていた。

「さ、もう少し急ぐわよ」

「ヒー、待ってください」

「……………」

（委員長…なんか焦っているように見える？何を焦っているんだ？）

ゴンタのこの考えが、のちに事件へと発展させる。

ジャック視点

「おーおー、後をつけてみればスバルはモテモテだな」

「ダン。マジでつける気かよ」

「ああ、もちろん。ぶっちゃけて言うとなスバルを好いている女の子たちがスバルを巡って頑張ってるのを見ていると」

ダンは片目を瞑りこう言い放った。

「ぞくぞくするね」

「…趣味わりなーおい！。ツカサ、お前からもなんか言ってやれよ」

「面白そうだから行こう！」

「て、おいおい」

そう言っつて、ツカサはスピードを上げる。

「お、気が合うねーツカサ」

ダンもまた、後を追うようにスピードを上げた。

これがおかしいと思うのは俺だけなのか？

はあゝ、とため息を吐き俺もスピードを上げた。

にしてもあいつ

「なんか悩んでっけど大丈夫なのか？」

ふと、そんな事を思ってみた。

スバル視点

「あのさ、二人共。何か不満があるなら僕は聞くよ」

我慢しきることが出来なくなった僕は二人に問う。

シヤヤヤ

からだを軽く横に向けカーブを曲がる。

曲がる時と一緒に白い結晶たちが舞い上がる。

キレイだな、と思った。

でも、これよりも僕は綺麗なのを知っている。

それは…

「スバル」

ユイが口を開いた。

「何？」

「スバルって好きな子いる？」

「え！ちよ、何をやぶらかぼうに！？」

「別に気になっただけ」

と、そっけなく返された。

そして、また沈黙。

代わりにすぐ近くで、ゴゴゴと何かが揺れる音が鳴っている。

「…あ、あのね。スバル君」

次は、ミソラちゃんが僕に話しかけてきた。

「え、どうしたの？ミソラちゃん」

「ス、スバル君は、好きな女の子いる？」

「…どうして君まで…」

二回目になると少し慣れるな…

答えられないけど

すると、黙っていたはずのユイが再度、口を開いた。

「ミソラが言わないなら私がはっきり言うよ？私は――？？？」

何だろう？この揺れるような感覚は…

そして耳鳴りが止まらなくなっていく自分

視界が揺れ、段々と何かが落ちてくるように足元の影が広がって――
——これって！？

「ユイ！危ない」

「え？」

前にいるユイを突き飛ばす。

咄嗟の出来事にユイは背中を打ち付けていくのが見えた。

（次は…）

手に持っているスティックを投げ出し、横飛びをし、隣にいるミソラちゃんを抱きしめるようにし、僕の背を打ち付けた。

その時、仰向けになった僕の視界に入ったのは大量の大きな雪だるまだった。

ズドン

スキー場に大地に重々しく鳴り響く音が僕の耳に鳴り響いた。

さっそく滑ってきて（後書き）

さて、雪だるま…また、イエティか！と思う人がいるかもしれない。

しかし、違います。

今回出ていない？？？さんも2話ぐらいしたら出そうと思っています。

では、感想待ってます。

真っ暗闇の中で（前書き）

今回は少し甘めで行こうと思います。

もちろんスバミソで

真っ暗闇の中で

ここはどこだろう？

真っ暗でとても寒い。

僕は、一体何をしていたんだっけ？

ああ、そうだ。

みんなとスキーをしていて、でも雪だるまが落ちてきてそれで

「そうだ！ミソラちゃんは！？」

寝ていた体を即座に起こし、周りに視線を移していく。

しかし、視界に入ってきたのは暗闇だけだった。

「ミソラなら寝てるぜ」

すると、暗闇から返事が返ってきた。

この声は…

「ロック？」

「ああ、そうだ。俺だ。どうやら上手い事雪玉が重なって閉じ込められたようだな」

どうやら、ロックもこの暗闇にいるようだ。

そして、僕は閉じ込められた。

「ロックどこにいるの？」

「お前のすぐ横だ」

「え、そうなの？」

「ハンターの明かりで周りを見る。そしたら見えるだろ」

言われた通りにハンターの明かりで、僕の周りを暗闇に照らし出した。

照らし出すとそこには横になっているミソラちゃんと地べたをふんぞり返っているロックがいた。

「よかった。ミソラちゃんが無事で」

「よかねよ。急に振ってきた雪たるまで閉じ込められるし、お前1時間ぐらい寝ていたんだぞ。ミソラは起きねしょ」

ミソラちゃんが起きない！

それは大変だ。

この前、テレビで寒い場所で寝ると死んでしまっつていつのを見た。

このままじゃ、ミソラちゃんが死んでしまっつ。

揺り起こそうと手を動かそうとしたが止まった。

（ね、寝顔、かわいすぎるだろ…）

これ以上にはないってくらいミソラちゃんは、幸せそうな寝顔をしていた。

それを、見ると揺り起こすという非人道的な方法で起こすのを躊躇ってしまふ。

「いや、非人道的な方法なのか？」

「勝手に心を読むな」

ロックに言い捨てると何か違う方法で起こそうと思考する。

.....

「耳に息を吹きかける」

「その発想すげえな！」

「じゃ、ロック。他に方法はないの？」

「眠りのお姫様にキスをする」

「お前も大概だよ！！」

そんな感じで言い争っている

隣で、ミソラちゃんが体を震わしている。

まさか、寒さにやられちゃって！

「…違うぞ。スバル」

「え？」

「こいつ、笑ってやがる」

耳を澄ませてみるとププ、と吹き出す音が確かに聞こえる。

「…いつから起きてたの？」

「ほんの少し前…かな」

ムク、と体を起こして言う。

「ひどいよ」

「それよりもさっきのなんだたんだろ？急にスバル君——？——」

「僕がどうしたの——」

お互い言いかけのところで口を止める。

そつだ。僕は非常時とは言えミソラちゃんを抱きしめたんだ。

やばい。

顔が熱い。

特に耳が…！

「「あ、あのね」「

同時に何かを言いかけお互いに顔を伏せてしまった。

なんでだろ？なんでこんなに意識してしまってるんだ僕？

「スバル君からどうぞ」

「い、いや。こういうのはレディーファーストで」

「じゃ、じゃ私から言っね」

ゴクリ、と自分の喉からつばが飲み込まれる音が聞こえる。

「あ、あのね。その抱きしめてくれた事…そ、その、う、うれしかったから！」

「え？え！」

ミソラちゃんのまさかの言葉にどうしたらいいか分からなくなってしまった。

「俺はお邪魔のようだから助けでも呼んでくるぜ」

「え、ちょ、この状況で？」

ロックは、どこかへと去ってしまう。

「…ス、スバル君はロックマンになって行かないの？」

「…ううん。行かないんじゃないかっていけないんだ」

「どうして？」

僕は、真っ赤な顔のまま言った。

「行ったらミソラちゃんを独りにしちゃうでしょ？」

「ッ———！」

僕の顔がさらに真っ赤になった。

そのまま僕らは救助されるまで黙りぱっなしだった。

「ね、ダン〜？」

「なんだ。ユイ？」

「さっきからスバルとミソラがお互いにチラチラ見合ってるよ？」
「何かあったんだろうな。お熱いことで」
「ふん。なんかつまんない」

??? 視点

「作戦失敗。第二段階へと移行する」
「了解。しっかりやれよ…」ブリザードロックマン」

真っ暗闇の中で（後書き）

どうでした？

しっかりスバミソできてましたか？

できてなかったりつまらなかったらごめんなさい。

次回はスバルと幼馴染達との出会いについて書きます。

感想待ってます

昔話です。（前書き）

少し昔話をします。

一応、スバルの過去がわかるので結構大事です。

では、お楽しみを

昔話です。

『ロビー』

「本当にすまない」

「い、いえ。良いですよ」

「そうですよ。結局私たちは無事だったんですから」

「いや、スバル君に至っては迷惑をかけるのは二度目だ。本当にすまないと思っている」

先程から何度も滑田さんは僕らに謝っている。

気にしなくてもいいのに

「本当に気にしないで下さい。じゃー！」

「え、ちよつと。スバル君」

半ば強引に話を切り僕は来い、と言われていた女子部屋へと逃げた。

「「ただいま」」

「あ、お帰りスバル君。ミソラちゃん」

「おう、お前ら。ま、座れ座れ」

部屋には、みんなが居て円になって何やら語っていた。

ダンの導きのまま僕とミソラちゃんは隣り合わせになるように座った。

「さ、次はミソラの番だよ」

「え？」

「今、みんなで昔話をしているのよ」

昔話だつて？

何故か嫌な予感がした。

「俺。スバルとミソラちゃんの出会いが聞きたい」

「ちょ、ダン。やめろよ。恥ずかしいって」

「俺も聞きたいな」

「ジャックまで」

「うーん。じゃ、話すね」

「ミソラちゃん！」

僕の心は今にも泣きだしそうです。

数分後

「いい話だったな」

「そうだね。相変わらずスバルはカッコいいね」

「そうだね。あそこで『僕とブラザーになってください』って言うなんてスバル君らしいな」

「全くだ。流石スバルだぜ」

「マジで、勘弁して下さい」

みんなに見えないように顔を抑えて蹲る。

ただでさえ今朝の事もあるのに…恥ずかしすぎる

「次はスバル君だよ」

「え？」

「僕は、スバル君とダン君との出会いが聞きたいです」

「俺もだぜ」

「私も聞きたいわね」

「え？えええ」

ちよ、まさかこの話になるなんて

てか、二人は話してなかったのか？

「俺は、違う話を話した」

「私も」

なんてこった。

あんな恥ずかしいのを話さないといけないのか？

「覚悟を決めろ。俺も聞いてやる」

「それ、何の慰めにもなっていないことに気付いてねロック」

はあ、とため息をつきあきらめたように僕は口を開いた。

「OK。話すよ」

『『『やったー』』』』

「（そんなにうれしいのか？）…あれは僕が8歳の頃だった」

6年前。僕は、秋原町に住んでいた。

そこで学校に通っていたんだけど僕はあまり学校が好きじゃなくていつも教室の端っこで、宇宙の本を読んでいたんだ。

蒸し暑いのが目立ってきた時期。

僕はいつものようにつまらない毎日を過ごしていると朝のHRで転校生が来たんだ。

「さ、二人共。みんなに自己紹介をするんだ」

男の子と女の子が先生に呼ばれて教室に入ってきたんだ。

「外亜 ダンって言うんだ。よろしくな！」

「青星 ユイっていうのゝよろしくね」

「ついでに俺達前の学校でも一緒だったんだぜ」

「えへへへ」

そう、蒸し暑くなってきた時期に二人は僕の目の前に現れた。

これが僕らの初めての出会いだったんだ。

昔話です。（後書き）

こんな感じです。

これを2、3話やります。

後、結局????さんはしばらく出ません。

ごめんなさい。こんな無計画野郎なんです。

それと、みなさんの読んでいる流星のロックマンでお勧めの作品を
教えてください。

お願いします。

感想待ってます。

昔話ですよ。（前書き）

だいぶ思いつきで書きました。

対して面白くないかもしれないですがどうぞお読みください。

昔話ですよ。

あっという間にダンとユイはすぐにクラスの中心になっていた。

元々二人は人付き合いがうまく誰とでも仲良くなっていた。

ただ一人を除いて

「なあ、星河」

「……………」

「ねえ、星河君」

「……………」

「「無視するな！」」

「……………」何？今、本を読んでるんだけど？」

それは僕だった。

僕だけがダンとユイの相手をしなかった。

「何って今、昼休みだぜ？」

「そうだよ。お外はいい天気だよ？」

「……………」だから？」

全く本から視線を外さず素っ気無く僕は返す。

当時の僕は、人にまったく興味がなく他人と全く関わり合いを持つとは思わなかった。

めんどくさかったんだ。

だって、本を読んでいたら話しかけられて邪魔されるんだよ？

「とにかく、その時の僕は本だけが学校唯一の楽しみだったんだ」

「なんというか…スバル君って」

「その時からスバルは、引きこもりの才能があっただんな！」

「黙れロツク」

「それで、その後どうしたんだい？」

「うん。その後僕は――」

僕は、本をパン、と閉じて二人の目を見た。

キラキラしていた。

今でも、よく覚えている。

二人はとてもキラキラした期待の目で僕を見ていた。

「本を読み終わっただけだよ。決して遊ぶわけじゃない」

「「えええ」」

二人の残念そうな声が教室に響く。

僕は、また違う本を取り出し、読み始めた。

隣でブースカ言っていたけど、僕は構わず本を読み続けた。

それから暫く二人は僕に付きまどった。

いや、正確には尾行と言った方が正しい。

僕の知らない間に二人は僕の誕生日、血液型、家の位置、その他諸々調べ上げていた。

「もう、なんなの君達」

少し怒ったように僕は二人に聞いた。

「お前と友達になりたいんだ」
「うんうん」

「なら、他のやつともう友達だろ。別に僕となくなくても」

「俺は、クラスの奴ら全員と友達になりたいんだ」

「私も」

「僕は、いいよ。いらないし」

その日は、僕はそう言って二人と別れた。

次の朝、登校中の事だった。

二人はクラスの誰からも慕われている、と僕は思っていた。

事実。二人はクラスの中で、毎日僕に付きまといながらも他のみんな共、仲良くやっていた。

話を変えるけど、人間の集団と言うのは常に誰かが中心で動いている。

クラスはその縮小版だ。

二人はクラスを中心をやっているけど、その前のクラスを中心の人

はどうなってしまうのдар。

「畜生。あいつらが来て、俺の立場が無くなった！絶対思い知らしてやる…！」

妬み復讐をしようとするらしい。

とある朝の出来事だった。

昔話ですよ。（後書き）

ふ、と昔考えたことを元に書きました。

きつと、彼みたいな考えばかりの子はいないと思います。

感想待ってます。

昔話だよ。(前書き)

かなり更新間隔をあけましたが、今日から再開します。

できるだけ、毎日更新するので頑張ります。

昔話だよ。

幼いスバル視点

「面倒なことを聞いたな…どうしようか」

僕は、頭に選択肢を浮かべ自身の行動について考えていた。

1このことを先生に言いつけるor外亜君たちに知らせる。

2さっきの少年…確かな目は石川 サンタだっけ？に止めるように注意する。

「メンドくさいな」

結局、僕は最後まで石川君の独り言を盗み聞きするだけで、第三の選択見て見ぬふりをすることにした。

「さて、今日はどんな本を読もうかな？」

今日、読む本を思案しながら僕は足を学校へと向かわせた。

「最低だな。相棒としてぶん殴りたい」

「地球を潰そうとしていた奴の手先にだけは言われたくないよ」

「それでも、これは中々ひどいよ」

「ツカサ君まで」

「今のスバルからは全く考えられないぜ」

「腹減った」

「心が折れそうだよ」

僕はシュンとした。

「で、その後どうなったのですか？」

「ほら、早く言いなさい星河君」

「はい」

キザマロと委員長に促され僕は話を進めた。

「今日は、これにしよう」

一人呟きながらも鞆から200年前に流行ったといわれるズッコケ三人組と言う本を取り出し、読み始めた。

しばらく読んでいるとふっと気付いたことがあった。

二人が僕に絡んでこない、と

当たりを見渡すと後、5分でHRが始まるというのに外亜君と青星さんがいない。

他にも石川君といつも一緒にいる子達がいらない。

この状況を少し推理する。

二人は何らかの策にはまり石川君達にひどい目に合っているのだろう。

多分、この推理は正しい。

（…関係ないか）

本へとまた目を移す。

それにしてもこのズッコケ3人組と言う本は面白い。

一緒にバカをやり、一緒に遊び、一緒に喧嘩をし、一緒に戦争したり、一緒に怪盗を追いかけたり、一緒に…

その時、思ってみたことがあった。

（僕らもある意味三人組だったのか？）

形や目的は違えど、僕らは常に一緒にいた。

気が付けば僕の隣には二人がいた。

でも、今はいない。

なぜ？

いつもなら、僕の邪魔しにくる二人。

いつもなら、遊びへと誘ってくる二人。

いつもなら…

いつもなら…

いつもなら…

「いつもなら、僕に安心感を与えてくれる二人…」

その二人を

僕は

隣を

「隣を…隣にいてくれる人を守らないと」

僕は、偶々聞いていた場所へと向かった。

通常視点

「ダン…」

ユイの不安な声がダンの耳に届く。

今、二人は石川とその取り巻きに囲まれていた。

二人は、石川に着いてきてほしいと言われあっさりと着いて行ってしまった。

そして、この状況に落ちてしまった。

「…石川。なんだよ、この状況は」

「何って？お前に居場所を取られた復讐だよ」

「？何を言ってるんだ」

「お前が来たから、みんなは俺の周りからいなくなった。クラスの中心じゃ、無くなった俺らは、周りから仲間はずれになったんだ」

「それは、ただの逆恨みじゃ」

「うるさい！やれ」

それが合図となり周りにいた取り巻き達が二人の距離を縮める。

多対一でダンも抵抗するが無意味だった。

取り巻きの一人がダンの顔に拳を入れる。

「グウ」

「ダン！」

「邪魔」

ユイがダンの前に立つがすぐに突き飛ばされる。

再度、取り巻きの一人が拳を叩きこもうとした時だった。

「先生！こっちです」

「な！あいつは星河…どうして」

「とりあえず逃げろ！」

石川達は来た道とは違う道へと走り去って行った。

「二人とも大丈夫？」

二人は驚いたように顔を見合わせた。

スバルは、頭を深々と下げ、二人が驚いている間に僕は事実を伝える。

「ごめん、本当は知っていたんだ。二人が石川にはめられそうになるのを。偶々聞いていて、それなのに僕は…」

「いいよ」

二人は同時に言った。

え、となりスバルは顔を上げる。

二人は、笑っていた。

「いいよ。結局来てくれたし」

「そういえば、星河君が呼んでくれた先生は？」

「ああ、あれは嘘だよ」

「えええ」

ダンとユイはひどく驚いた。

どう見ても本当の事を言っているようにしか見えなかったからだ。

「いや、本当は呼びたかったんだけど…慌てすぎて」

「……いや、うれしいよ」

「うん。だって、早く私たちを助けたいって思ったんでしょ？」

二人はさらに嬉しそうにほおを緩めた。

スバルは、ギョツと拳を握り、やがて意を決したように二人の目を見た。

「あの、僕、なんかでよかったら…僕の隣にいてほしい…ダメかな？」

二人は、また驚いたように顔を見合わせた。

（…やっぱりだめなのかな？）

「はあ、そいつは無理な相談だな」

「だって、私達はもう」

向かい合っていた二人は僕の横に立ち、腕を絡めた。

「もうスバルの隣にいるから」

「うん！ありがとう。ダン、ユイ」

この瞬間、僕は初めての友達ができた。

昔話だよ。（後書き）

過去編は終了です。

どうでしたか？

最後は呼び捨て合う、という形にしました。

あまりうまく落ちをつけれないような気がします。

無駄にスバルが大人びているのはスルーしてください。

次は、もう一度スバミソっぽくやってみたいと思います。

感想待ってます。

昔話が終わった後。(前書き)

今日、家で軽く火事が起きそうになりました。

幸い、何もなかったのよかったのですが、皆さんも気を付けてください。

昔話が終わった後。

スバル視点

『『『………』』』

「どうしたの？みんな黙りこくって」

「いや、なんと言っかな……」

ジャックは渋い顔をしながら口ごもる。

他の皆の同じような顔を浮かべている。

やがて、みんなは意を決したようで、声を揃えて言った。

『『『ツンデレ？』』』

「…今話のどこにツンデレ要素があったんだい…」

そんな事よりも大切な用事ができた。

「にしても、俺達の出会いってあんな感じだったんだな」

「そうだね。全く覚えてなかったよ」

問題はこの二人だ。

「「ねつ造でもしたんじゃないの（か）？スバル」

「そんなわけあるか！」

「「本当に？」」

「本当だ！てか、僕に昔話をさせたのは単純に忘れていただけだよ！」

「「うん」」

「言い切ったあ！言い切りやがった！この二人」

なんだろう。とても悲しい気分です。

あの後、適当にしゃべっていると夜の9時になった

「そろそろ開きにするか」

ダンの一声でお開きとなり男子メンバーは部屋へと出た。

部屋を出て、僕らが廊下を歩いているとダンが僕の方を見て思い出したように言った。

「スバル。お前、晩飯は？」

「あ！」

「忘れてたのかよ」

完全に忘れてた。

僕が、救助されたのは夜の7時半、ここに帰ってきたのが8時で一時間ほど喋っていた訳で…晩御飯は食べてない。

「今思ったけど。僕らが閉じ込められている間に君たちは何をしていたんだい？」

『『『スキー』』』

「いつか君たちも同じ目に合え」

そばにいたツカサ君やキザマ口までもが声を揃えている。

「お詫びに近くのコンビニの地図をダウンロードしておいたから…送信完了」

「お詫びのつもりなら何か買ってきてよ」

「やれやれ、スバル君は何もわかってないな」

「そうです。スバル君は何もわかってないです」

「ああ、分かってないな」

「？」

みんなが僕を小ばかにしたように肩を竦めた。

『『『お金渡すから何か買ってきて』『』』

「そういう事かよ！」

だよねだよね。あのダンが僕のために何かやるなんて考えられないよね！

「あ、これ。俺達のほしい奴な。後、寒いだろうから手袋もつけとけ」

ほしい物を書かれているメモと僕の手袋を受け取り僕は、渋々行くことにした。

僕が、ロビーに行くとそこにはミソラちゃんがいた。

「あ、スバル君」

「あれ？ミソラちゃん？どうしたの？」

「コンビニに行くんでしょ？私も一緒に行つていい？」

そういえばミソラちゃんも晩御飯食べてなかったな

「勿論。さ、行こう」

僕は快く快諾して僕らは一緒にコンビニへと向かった。

昔話が終わった後。（後書き）

結局、スバミソは明日へと持ち越しにしてみました。

すみません。

感想待ってます。

とある夜道ととあるロビー（前書き）

前回の宣言通り今回もスバミソっぽくしてみました。

もしなってなかったらすみません。

では、どうぞ

とある夜道ととあるロビー

コンビニに行くのには、15分も掛かった。

歩いている途中、雪が降ってきて唯でさえ寒いのにさらに寒さを増した。

寒さで震える僕は、電波変換して行こうと提案したらミソラちゃんが…

「あ、歩いて行こうよ！ほ、ほら。私達、電波変換に頼りすぎて運動していないよね。だから、たまには歩こう」

という事で却下された。

僕たちさっきまで滑っていたのに

それにそこまで電波変換には頼っていない。

結局、言われるがままに、僕は歩いていくことにした。

「スバル君。いっぱい持つてるね」

「パシリでこうなったんだけどね」

「あはは。それにしても寒いね」

手袋つけとけばよかった、とミソラちゃんは自分の手を擦る。

確かに寒そうだ。

僕は、手袋をつけているからマシだけど、それでも少し手が悴んでいる。

「……………よし」

僕は、右手に付けていた手袋をミソラちゃんの右手にはめてあげた。

「おい、スバル。それじゃ、片方の手が寒いぞ」

「あんたは黙ってなさい。KY星人！」

「な…！だれがKY星人だ！」

ハーブのバッシングをロックは、心外そうな顔で反論する。

二体の言い争いが、静寂の場を騒音でうるさくした。

「でも、ロック君の言う通りだよ。これじゃ、スバル君の右手が寒いでしょ？」

「そうだね。確かに…でも、こうしたら」

「ええええ！」

ミソラちゃんは驚きの声を上げる。

そりゃ、そうだ。僕がやっている行動は

空いている右手を彼女の横に出す。

「少し恥ずかしいけど…寒いよりいいよね？」

「え、えと、そ、その…」

しまった。

どうやら、引かせてしまったらしい。

僕は、取り繕うように言う。

「なーんて、冗談——」

「……ありがとう」

だよ、と言おうとしたらミソラちゃんは、僕の手をそっと握り、少し赤くなった顔でミソラちゃんは笑ってくれた。

その笑顔を見ると体温がカァーと上昇し、鼓動が早くなった。

……不意打ち過ぎるよ。

あの笑顔を見せられると思わず期待してしまう。

でも、あの笑顔は誰にだって向けられるものだと思っている。

僕も彼女の唯のファンだという事を

最近、こんなのはっかりだ。

まだ赤い顔のまま僕らはホテルへと戻った。

『ホテル内のロビー』

委員長視点

「はあ」

今日で何回目だろうか？

私は、また溜息をついた。

いや、今日だけじゃない。

昨日も、一昨日も、前の月も、その前の月もだ。

私は、何度も溜息をついている。

（どうしたらいいのかしら？）

何度も溜息をする理由は分っている。

私と星河君の現在についてだ。

4月の口喧嘩で私たちの会話は極端に減った。

これも、私のわがママが悪い。

避けられているのは私が意地っ張りだから

私が全部悪い。

もう話し合うこともできないのかしら？

「おい。どうしたんだ」

俯いている顔を上げるとジャックが怪訝そうな顔で私を見ていた。

とある夜道ととあるロビー（後書き）

どうでしたか？

スバミソっぽくなっていましたか？

70話から委員長長視点です。

さて、この二人がどんな会話をするか俺も楽しみです。

感想待ってます。

悩み（前書き）

今回は、ジャックと委員長の会話です。

大した内容じゃないのですが結構、次の話で使います。

では、どうぞ。

悩み

「べ、別に何もないわよ!」

私は、そっぽを向く。

悩んでいる所を見られたなんて最悪!

それでも、ジャックは呆れたように言う。

「嘘つけ」

簡単に騙されないことに私は意固地になり否定する。

「本当に何もないわよ」

「じゃ、なんで泣いてんだ?」

「え?」

ジャックに指摘され目元に手を当てる。

指先が冷たかった。

そうか、と私は納得した。

私は、星河君と話せなくて泣いているんだ、と…

「…なんで泣いてるのは知らねーけど。とりあえずこれで拭け」

ジャックは、ポケットから取り出した黒いハンカチをぶっきらぼう

に突き出した。

「……………ありがとう」

そう言い、私は涙を拭った。

「…お前さ、何か悩んでんだろう?」

「…何もないわよ」

「ゴンタがすっげえ心配してたぞ」

「…何もないって言ってるでしょう」

「あの、ゴンタだぞ?いつも食い物ばかり考えているゴンタが心配してるんだぜ?」

「…何もないって言っているでしょう」

「お前が悩んでいること言ってくれないと俺とキザマロが迷惑するんだ」

「…どういう意味よ」

やっと、違う言葉を喋ってくれたな、とジャックはほくそ笑んだ。

それよりも私のせいで迷惑をかけてるなんてどういう意味なんだろ?

ジャックにそう聞くと、ジャックからこう返事が返ってきた。

「俺とあいつは同じ部屋だろ?それで寝ようとしたら、ゴンタが委員長が最近なんか悩んでいるんだ。何とかしてくれってうるさいんだよ」

意外だった。

ゴンタがそんな事を言ってくれるなんて思ってもいなかった

「お前が、思ってるよりあいつはお前の事を想ってるんだぜ？」

「……………そうなの？」

「そうだ。スバルから聞いたんだけどな…ゴンタがメテオ―サーバーの事件の時にサテラポリスをやめたか知ってるか？」

「怖気づいたから？」

ガクツとジャックはズツコケた。

「お前、それ本人には言うなよ。たぶんショックで3日は寝込むぞ」

「…じゃ、なんなのよ」

「お前を、守りたいんだってよ」

「……………は？」

一瞬だけ処理が追いつかなかった。

ゴンタがそんなことを言った？

まさか。そんな

「信じられないって顔してるな。でも、真実だ」

「でも、でも、ゴンタよ？」

なぜか、私はジャックにすがりつくような思いで聞いていた。

ジャックは、それでもいつも通りの声色で言った。

「ゴンタだからだろ？」

「え？」

「お前が思ってる程、あいつはお前の事想ってるんだってさっきも

言っただろ？」

「……………」

「…だいぶ話が脱線したな。ま、俺はゴンタ程、鈍くはないから何に悩んでるかは察しが付くけど…言ってやろうか」

…ジャックには、なんでもお見通しのようだ。

一度、深呼吸をし気持ちを落ち着かせる。

「……自分で言うわ。やっぱりこういうのは自分で言わないと」
「だな。スバルと仲直りできたらしいな」

私たちはおやすみ、と言い合い部屋に戻った。

（にしてもさっきの話、誰かに聞かれてたな…誰だ？）

悩み（後書き）

気が付くと70話です。

速いですね。

当初の予定では60話で完結のはずだったのですが、一気にかくと
いう行為が僕にはできないので細かくちよいちよい書くというプレ
イスタイルに

それでも、200話までには終わらせたいのでそのつもりで

後、90話くらいで物語が本格的に動きます。

では、感想待ってます。

頂上で…（前書き）

風邪をこじらせました。

やばい。現在37度8分

まだ上がりそうです。

何とか治さないとな…

頂上で…

スバル視点

「で、今日はどうしようか？」

AM 8 : 30

僕は、見渡すようにみんなに聞く。

今、僕らはホテルの食堂で、朝食を摂りつつも今後の予定を決めていた。

因みに朝食はバイキング方式である。

「そうね。自由行動…と言うのはどうかしら」

「じゃ、その時間でお土産と買うとか、いいね」

「いいな、それ。流石ツカサ。じゃ、姉ちゃんのお土産とかも買うか」

『『『 暁さんのはいいの？』『』』

「誰が買つか。あんな奴の…」

『『『 嫉妬に狂うシスコン程見苦しいものは無いよね』『』』

「お前ら、一回表に出ろ…！まとめて殺つてやる」

あ、やばい。目がマジだ。

そんな殺気だった朝食も終え、僕は部屋で帰りの用意をしていた。

作業をしている最中に背中に気配を感じた。

ダンだ。

「おう、スバル。もう準備してるのか？」

「うん。僕は、少し滑ってからお土産を貰うからね。疲れてない内
にしておくよ」

「ふーん。じゃ、俺もやつとくか」

という事で僕もダンと一緒に帰りの準備をすること数分。

コンコン

と、扉を叩く音が聞こえた。

「はい」

「私だけど…」

「委員長？」

委員長？どうしたんだろ。

まさか、最近僕と仲悪いから怒りのあまり僕を暗殺しに来たんじゃ…

「そんな訳ねーだろ。ほら、さっさと出る」

「勝手に人の心を読むなよ。ロツク」

文句を言いながらもドアを開ける。

そこには、腰に手を当て、般若の形相で仁王立ちをしている委員長

がいた。

……やばい。手が震えてきた。

「星河君、この後…予定、空いているわね」

「え…ま、うん」

「そう、よかった。なら、勝負よ」

「……………は？」

思わずロックと一緒に聞き返す。

どうしてそうなったんだ？

てか、委員長は急にどうしたんだろう？

「どういう事さ？」

「そろそろ、この関係に決着をつけたいと思ってたの！星河君。この勝負で負けたら一つ言うことを聞いてもらうわ！」

「え、ちょ、そんな、強引な」

「勝負はスキーよ。場所は頂上で」

言うだけ言って委員長は部屋から出って行った。

部屋に残された、僕らは口をポカーンと開けたまま立ち尽くした。

「…なんだったんだ？今の」

「そんなの分かんないよ。ロック」

ほぼ、泣き言のように言う。

「とりあえず行けよ」

「?なんでだい。ダン」

諭すようにダンは言った

「いいから行つてやれつて…これがあいつなりの決意なんだから」

「?ま、いいや。どうせ滑る予定だったんだし」

ダンの言っていることはわからないまま帰る用意ができた僕は、部屋を出て、スキーをやりこにゲレンデに出かけた。

『ただいま。システムの暴走で吹雪が発生しております。速やかに避難してください』

「で、どうしてこうなった…」

僕は、頂上を目指してリフトで目指していたはずだ。

だけど、移動中天候が急変して雪が降り、猛吹雪になった。

そして、リフトも止まってしまった。

吹雪で周りはいさみ見えないけど、僕以外人はいなさそうだ。

「…つておかしいよね。ロック」

「ああ、確かにね。ここは冬以外でもスキーができるように人工的に雪を降らせるが、前の事件で夜だけに降らせるはずだぜ?仮に降

らせたとしてもこんな量を降らせるか？」

「考えられるのは……」

「あいつらだろうな」

カラミティだ。

それしか思いつかない。

システムのカ＋カラミティの能力で、ここら全域を雪で覆い尽くしているはずだ。

「…な、スバル」

「なんだい。ロック」

「この天候を管理しているシステムってよ。確か頂上だよな」

「……！」

自分でも血の気が引いていくのが分かった。

頂上には、委員長がいる。

もしかしたら敵に捕まっているのかもしれない

そう思うと、いてもたってもいれなくなった。

「トランスコード003シューティングスターロックマン」

蒼い光が僕を包み僕は、リフトを踏み台にしてウェーブロードに飛び乗り駆けた。

（無事でいてくれ…委員長）

???視点

「そっちの首尾はどうだ？ブリザードロックマン（以降BR）」

「上々だ。そちらは？」

「こっちも準備OKだ」

「そうか。ならいい」

「…で、大丈夫なのか？相手は、8体だろ。いや、7体だな」

「大丈夫だ。数の差はウイルスで埋める。それに…」

切り札が二つあるからな

と、私はそう言った。

「ふーん。アース様の贈り物ともう一つあるのかよ」

「ま、そういうことだ。おっと、敵を目視した。通信を終える」

ハンターの電源を切り、私はオリジナルが来るのを上から眺めた。

「ふふふ、私の勝ちだな。オリジナルよ」

頂上で…（後書き）

ということで次回からバトルシーンです。

今回茶々と終わらせようと思います。

あと、まだ戦闘描写のしていないメンバーを中心にやっていこうと思うのでそのつもりでいてください。

感想待ってます。

チャージ（前書き）

今回はオリジナルギャラクシーアドバンスが出てきます。

完全なオリジナルなのでご了承ください。

では、どうぞ

チャージ

スバル視点

「はあ、はあ、はあ」

「スバル。大丈夫か？」

「な、何とかね」

息を荒げながらもなんとか返事をする。

僕は、あと少し頂上のところで数えきれないほどのウィルスを手にかけていた。

「ゴロオオオオ」

「くっ、バトルカード マッドバルカン」

目の前にいるスノーゴロンに雪の殻ごと撃ち抜いた。

「メットオ！」

「スバル後ろだ！」

「うああ！」

ロックの注意が間に合わず、ショックウェーブが背中にヒットする。

「このままじゃ」

みんなも来るのが遅れているようだ。

もしかしたら下でもウイルスが来ているのかも知れない。

「スバル。エンプティだ」

「エンプティノイズ？…そうか！」

この状況でエンプティは最高のシチュエーションだ。

…そうでもないけど

「ノイズチェンジ…エンプティ！」

水晶色の光が僕を包み、黄色く光った目と魔法使いを思わせる水晶色の装束を身にまとった僕が現れる。

「マジックフロー！」

呪文と共に、半径一メートル以内に異質なパネルが発生する。

「この床の能力で、床の上にいるウイルスは一時的に僕のしもべになる」

床に立っていたウイルス達が一斉に周りにいたウイルス達と同士討ちを始める。

僕は、その間に上へと駆け上がり頂上に着いた。

「中々、冷静な判断だ。オリジナル」

「お前は…！」

「私の名は、BRだ。以後お見知りおきを」

「今すぐ、この騒ぎをやめろ！」

「その発言は、聊か冷静さを欠いていると言える。そんなことを言
つてやめた敵はいるのかね？」

確かにいない。

なら、やるしかないようだ。

「バトルカード ライメイザン」

電光の剣を現し、一気に距離を詰めBRに切りかかる。

「予想通りだ。ブリザードランス」

BRは、いつの間にか手に持っていた氷の槍でライメイザンが届く
前に脇腹に刺す。

全く反応が出来なかった僕は、脇腹に重傷を負い、白銀の地面に赤
が落ちる。

「てめえ！ビーストスイング」

「ふん」

ロックのビーストスイングを見切りBRはバックステップで距離を
取る。

「つくふ」

痛みが体を駆け巡るが代わりに氷の槍を引っこ抜いた。

「リカバリー200」

リカバリーで傷口をふさぎ、もう一度戦闘態勢を作る。

「冷静になれよ。オリジナル。じゃなければ——」

次は無いぞ？

冷徹な笑みを浮かべるともう一度氷の槍を作った。

「ちつ、あいつ空気中の雪であれを作りやがるな。どうする？」

「なら、遠距離攻撃だ」

近距離戦から遠距離戦に切り替えるためにダッシュで距離を取る。

「バトルカード クラウドシュート1 サンダーボール1×3」

三つの電球が距離を詰めていきクラウドシュートがBRの目の前で距離を詰める。

今度こそやった！

そう思った時だった。

BRの目の間に4本のつららが発生し、すべての攻撃を遮断した。

「アイスメル……。このような撃ならいくらでも遮断できる」

余裕の笑みでBRは言う。

逆に僕は、焦りの表情を浮かべた。

なんだ。こちらの攻撃、行動が全て読まれているしか思えない。

このままじゃ…

「なぜ、攻撃が通らないって思っているだろ？ そんなのは簡単だ。私はお前だからだ」

「…僕だから行動が読めると？」

「ま、それも一つの理由だがもう一つある」

B Rは、親指を立てて、得意そうに言った。

「今までの二人が負けたのを私は分析した。それは情報の更新だった」

「情報の更新だ？ という意味だ。こら」

「そのままの意味だ。私達は地球の情報ならいつでも分かる。だから、お前の過去の戦闘データを検索し、戦略、対策を立てたのだよ」

この僕は、メガネでもあれば完璧な頭脳系になれるだろうな

そんなことを想いながら、対策を立てる。

いや、意味ないのか…何をやっても過去のデータから…

「そうか…そうだね。そうすればよかったんだ！」

「…スバル何か思いついたのか？」

「うん、行くよ。新しい力で…バトルカード エレキスラッシュ」

電撃の刀で駆け出し、B Rに接近する。

「バカ目！冷静な判断ができないようだな。ジェットランス」

氷の槍が、B Rの周りに現れ僕にめがけて飛んでくる。

「バトルカード バリア スーパーバリア オーラ。ギャラクシー
アドバンス…ドリームオーラ」

相手の攻撃を10秒間だけ無効にする伝説のオーラを纏い、すべての槍を無効化した。

「アイスメル！」

予想外の攻撃に驚いたものの冷静な対処で僕の行く手を阻んだ。

「何をしでかすと思えば…これぐらい」

つらら越しに聞こえるB Rの声

僕も、B Rに聞こえるように言う。

「B R。君の方こそ冷静じゃなかったようだね」

「な、なんだと！？私はいつでも冷静だ」

「なら、ケアミスだ。君は過去の戦いを対処できると言った。でも、裏を返せばそれは」

新しい子の力には対策が立てられないんだろ？

ズドン！！

つらら越しでも見えた。

漆黒の雷がBRを襲うのを

「チャージカード サンダーノワール」

これがエンプティのもう一つの力

電気系のカードをチャージして発動できる。

僕の手には、勝利を手にした汗で一杯だった。

チャージ（後書き）

中々のチートさを発揮したエンプティータだと思います。

マジックフローとか、ウイルス戦でなかなかのチートだと書いてて思いました。

その他分りにくいところなどがあれば言ってください。

説明をさせていただきます。

明日、また投稿したいと思うのでまた、見てください。

感想待ってます。

陽動（前書き）

今年最後の投稿です。

大した内容ではないですがどうぞ

陽動

「あははは。流石オリジナルだ。貴様の方が冷静なようだな」
「…しぶといね」

BRの前にあったアイスメルは、消し炭になり所々、黒くなっているボロボロのBRが目の前にいる。

「あれぐらいじゃ、死なんよ。私は…」
「じゃ、君を今度こそ倒させてもらっよ」

もう一度戦闘態勢に入る。

相手は、ボロボロだ。

僕一人でもやれる。

「ははは、滑稽だな。オリジナル。正に勝利は決定したような顔だな」

「どういう意味だ？」
「私には、切り札があるのだよ」

そう言っつて、BRはパチン、と指を鳴らした。

すると、物陰に隠れていたであろうスノーゴロンが委員長を抱えてBRの隣に立った。

「お、まえ。まさか？」
「そうだ。そのまさかだ」

滑稽だな、ともう一度BRは呟き委員長の顔を触る。

「汚い手で触るな」

「お前の手も私の手も一緒だろ？」

「僕は、お前と一緒になんかじゃない！」

「確かに。我らカラミティはどこかお前と違うからな。ま、どうでもいいが。」

さ、膝をつけ。さもないと」

女を殺す

僕は、従うしかなかった。

膝をつき完全に無抵抗を示す。

「それでいい…ふん！」

「ぐわあ」

鳩尾を蹴られ空中に舞いあがる僕の体

着地はせず、BRはけまりのように僕を再度蹴り上げる。

「てめえ」

「おっと、私に何かしてみろ？女が死ぬぞ」

「ぐうう」

委員長を盾にされて、おとなしく爪を終うロック

それでいい、と満足そうにうなずきながらも僕をけり上げ始めた。

それが、何度も何度も続く。

「疲れたな。少し休むか」

ドン、と僕は背中から落ちた。

だめだ。力が入らない。

それにあばら骨が何本か折れた。

「メイドの土産に聞かせてやろう。実はなこの作戦は揺動なのだよ」
「なんだと？」

喋れない僕の代わりにロックが話を繋ぐ。

「アース様は今回、貴様らを倒すことではなく目障りなWAXAを潰すつもりらしい」

「WAXAを？」

「そうだ。向こうには2体しか電波変換のできる奴はいないだろ？
なら、もう潰すしかないじゃないか？頭を取ればお前たちも潰しやすいからな」

「どう潰すつもりだ？」

「1000体のウィルスを送り込む」

「なっ」

そのあまりの量にロックは絶句する。

1000体って曉さんとクインティアさんだけじゃ対応できる訳が無い。

早くこいつを倒していかないとそう思い立ちあがろうとするがうまく立てない。

くそ。このままじゃ…

「だそうだぜ。お前ら」

人が嫉視に立とうと頑張っている中ロックはBRを見たまま言った。

「アンガーパンチ」

「ヘルズシック！」

大鎌がスノーゴロウの首を刈り取り委員長を助け出し、大きな拳がBRを吹っ飛ばした。

「よ、また。助けに来たぜ」

「俺は初めてだな」

何故かそこにはジャックとゴンタが居た。

陽動（後書き）

それにしてもガキつかが楽しみです。

では、また来年お会いしましょう。

感想待ってます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2647s/>

流星のロックマン4 ただ勘違いで...

2011年12月31日18時45分発行